呉羽丘陵とその周辺
ぶらりみどころ

呉羽山観光協会
「旧北陸街道を歩く」実行委員会

呉羽丘陵とその周辺

ぶ　ら　り　み　ど　こ　ろ

呉羽山観光協会

「旧北陸街道を歩く」実行委員会

平成２７年４月１日

あ い さ つ

呉羽山観光協会「旧北陸街道を歩く」
実行委員会・会長　田　畑　宏　継

「旧北陸街道を歩く」実行委員会では、平成 19 年 12 月の発足以来、平成 26 年まで７回の歩行会を開催してきました。

最初の 2 回は、旧北陸街道が富山県内を東西に横断し、富山の発展に多大の貢献したことに鑑み、その内の富山城址から小杉町手崎（約 12ｋｍ）までを平成 20 年 11 月と平成 21 年 10 月に分けて歩き、江戸時代から明治、大正、昭和にかけて旧北陸街道が果たしてきた役割や形跡を見て、人々の営みを感じてまいりました。

また歩行会に合わせて『沿道に歴史ロマンを求めて・旧北陸街道を歩く』の冊子を平成 21 年９月に出版したしましたところ多くの人から評価を頂き完売となり、改めてご支援ご協力を賜りました関係の方々に厚くお礼を申し上げるものであります。

さて第 3 回以降の歩行会は、旧北陸街道が富山平野を東西に横断する歴史軸とすれば、峠茶屋でクロスする呉羽丘陵を南北の歴史軸と捉え、南北縦走する事としたところであります。

呉羽丘陵は、富山市の中心にも近く、春は桜や梨の花、夏は緑の散策、秋は梨の収穫、冬はスキーなど古くから市民に親しまれてきたところであります。

特に最近では、呉羽丘陵の裾野にある「小竹貝塚」の調査が進み、縄文前期の人骨などが多く出土し歴史的価値の大変高い事が判明し注目を集めております。

このような裾野は、古くから寒江郷と呼ばれ倉垣荘として呉羽丘陵と一体となって文化が開けたところであります。

この事から、歩行会を開催するにあたり、寒江郷と呉羽丘陵が持つ歴史的な価値を北は百塚から、南は婦中町長沢、東は五福桜谷、そして西は寒江、下村、老田に至る区域において神社仏閣や古墳、城跡などの遺跡について、既存の紹介本と現地の説明板などから「みどころ」として整理したところであります。

各々の見どころ場所は、今も地域の人々によって守り、伝えられておりますが、この歴史の深みを多くの人に知っていただきたく、ここに『呉羽丘陵とその周辺　ぶらりみどころ』を発行することといたしました。

本年 3 月 14 日、「北陸新幹線、長野・金沢間」が開通いたしまた。これを契機に多くの観光客の方が呉羽丘陵などへ訪ねられることと思います。この「みどころ」が新たな情報発信となり、多くの交流と地域の発展につながればと期待するものであります。

発行にあたり次の郷土史家の先生方からご指導、ご助言を頂き、さらに五福、桜谷の両地区自治振興会並びに呉羽地域の６地区自治振興会からご支援を賜り厚くお礼を申し上げ挨拶といたします。

（地元郷土史家）

五十嵐顕房、須山盛彰、武内淑子、舟竹　孝、正橋剛二、山口悦子（五十音順、敬称略）

目　　次

1．呉羽丘陵とその周辺（みどころ範囲）

2．呉羽丘陵と寒江郷の概要

（1）呉羽丘陵の概要 6
（2）寒江郷・倉垣荘の概要 10

3．寒江郷のところどころ

（1）寒江郷のみどころ概要 12
（2）寒江本郷の二上神社 13
（3）常在山自得寺（本郷中部） 14
（4）藤白山願念寺（野口） 15
（5）「銀坊主」の生みの親・石黒岩次郎 16
（6）五智山乗福寺（中老田） 16
（7）東嶽山本浄寺（東老田） 17
（8）蔵地山圓楽寺（願海寺） 17
（9）白鳥山長福寺（西二俣 ） 17
(10) 願海寺城と寺崎民部左衛門 18
(11) 願海寺の寺と地名 18
(12) 願海寺・加茂社 19
(13) 中老田・加茂社 19
(14) 北代・加茂神社 19
(15) 下村・加茂神社 20

4．旧北陸街道（富山往還）を歩く

（1）旧北陸街道（富山往還道）の概要 21
（2）富山城下での旧北陸街道 23
（3）富山船橋をしのぶ 24
（4）橋北での旧北陸街道 26
（5）五福での旧北陸街道 30
（6）峠から三茶屋での旧北陸街道 32
（7）街道の分岐点・追分茶屋 34
（8）吉作の東京町 36
（9）富山藩境・野口 37
(10) 願海寺七曲りの名残り 38
(11) 願海寺、茶屋の史跡数々 38
(12) 西二俣の茶屋 40
(13) 加賀往還道との交差点・大手崎 40

5．旧北陸街道（巡見上使道）を歩く

（1）巡見上使道の概要 42
（2）追分茶屋から吉作へ 43
（3）梨の生産地・吉作 44
（4）鍛冶の神、速星神社と神話が残る住吉社 46
（5）二つの花木 47
（6）富山藩境と老田地区 48

6．八ヶ山周辺の探訪

（1）八ケ山周辺のみどころ概要 50
（2）八ヶ山遊園地と石原正太郎碑 51
（3）富山藩主の墓と真国寺 51
（4）牛ヶ首用水 52
（5）北代極楽寺址 53
（6）長岡新の五如来堂 53
（7）石坂交差点のお堂 53

7．呉羽山周辺の探訪

（1）呉羽山周辺のみどころ概要 54
（2）佐々成政剃髪趾碑 55
（3）「立山を仰ぐ特等席」と有頼少年像 55
（4）御野立所と歌碑 56
（5）富山藩と豊栄稲荷神社 57
（6）金尾柳神斉の石碑 57
（7）高見・平和観音像 57
（8）桜谷の長慶寺・五百羅漢 58
（9）富山市民俗民芸村 59
(10) 佐伯則重の碑 59
(11) 八幡社と武将との関わり 60
(12) 五福新道と「呉羽修路の碑」 60

8．明神山周辺の探訪

（1）明神山周辺のみどころ概要 61
（2）峠茶屋と旧北陸街道 62
（3）七面堂 62
（4）七面宮と稲荷社 63
（5）木俣修の歌碑（芝生広場） 63

9．城山周辺の探訪

（1）城山周辺のみどころ概要 64
（2）白鳥城址 65
（3）五福小学校・大峪城跡 65
（4）白鳥神社 65
（5）富山稲荷神社 66
（6）西斜面に広がる呉羽梨 67
（7）住吉金草窯跡及びたたら遺跡 67
（8）呉羽の守り神、姉倉比賣神社 68
（9）大徳寺の歴史ー蓮如上人ゆかりの寺 69

10．古沢、池多、朝日、長沢周辺の探訪

（1）古沢、池多、朝日、長沢周辺のみどころ概要 70
（2）富山市ファミリーパーク 70
（3）古沢神明社 71
（4）古沢用水 72
（5）杉谷の霊水 73
（6）安田城跡 73
（7）朝日の滝 74
（8）根本山中堂寺 74
（9）熊野神社（友坂） 75

(10) 友坂の二重不整合地層 75
(11) 婦中町ふるさと自然公園 75
(12) 北叡山各願寺 76
(13) 六角堂 77
(14) 馬頭観世音碑と鎮魂碑 77
(15) 神保山本覚寺 78
(16)「古洞の森」と県民公園「野鳥の園」 79
(17) 新しい農村住宅「開ヶ丘」 80

11. 呉羽丘陵と城（山城と平城）

（1）呉羽丘陵と城のみどころ概要 81
（2）白鳥城址 82
（3）五福小学校・大峪城跡 83
（4）安田城跡 83
（5）長沢西城跡 84
（6）長沢東城跡 85
（7）富崎城跡 86
（8）高山城跡 87

12. 呉羽丘陵と遺跡（遺跡の宝庫）

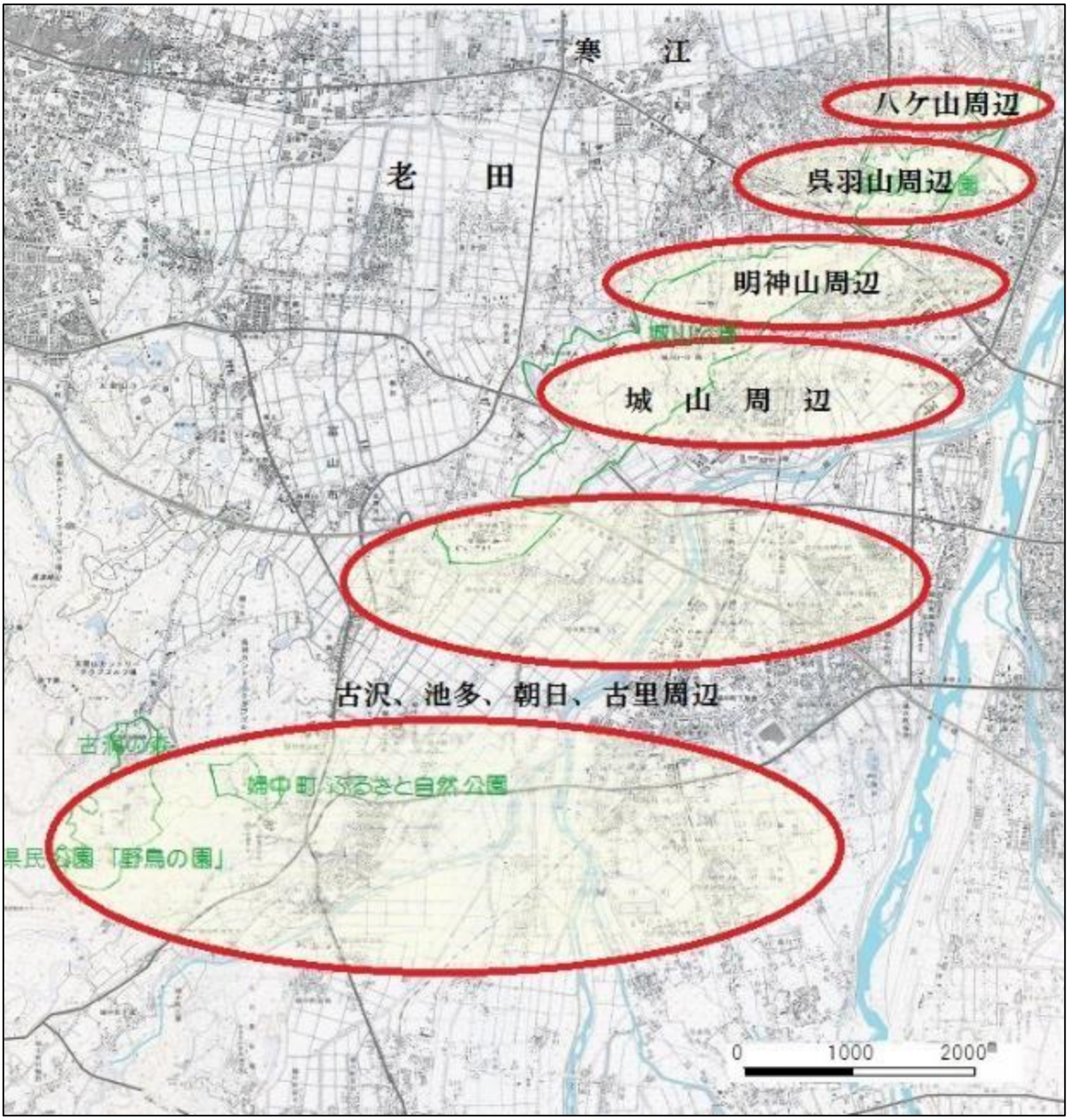
（1）呉羽丘陵と遺跡のみどころ概要 88
（2）百塚遺跡 89
（3）蜆ヶ森貝塚 89
（4）小竹貝塚 90
（5）北代縄文広場 92
（6）番神山横穴墓群 92
（7）呉羽山古墳群 92
（8）古沢塚山古墳 93
（9）古沢遺跡 93
(10) 境野新及び向野池遺跡 94
(11) 栃谷南遺跡 95
(12) 平岡遺跡 95
(13) 開ヶ丘遺跡 96
(14) 杉谷古墳群 97
(15) 王塚・千坊山遺跡群（国の史跡指定）の概要 98
(16) 王塚古墳 99
(17) 勅使塚古墳 99
(18) 千坊山遺跡 100
(19) 六治古塚墳墓 100
(20) 向野塚墳墓 100
(21) 富崎墳墓群 100
(22) 富崎千里古墳群(南群) 101
(23) 五ッ塚古墳 101
(24) 富山県内の古墳の分布と形態及び年代 102
(25) 古墳が語る呉羽丘陵周辺（婦負のクニの誕生と終焉） 103

編集後記（「旧北陸街道を歩く」実行委員会事務局）

【表紙及び裏表紙の説明】

表紙の写真は、射水平野上空より東方面の呉羽丘陵及び、神通川、常願寺川、立山連峰などを見る。
裏表紙の写真は、呉羽丘陵の城山付近より西方面、射水平野を見る。

１．呉羽丘陵とその周辺（みどころ範囲）



見どころの範囲図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

富山県は、南の県境に高い山が連なり、そこから流れ出る大河川が扇状地をつくり平野部を開いている。

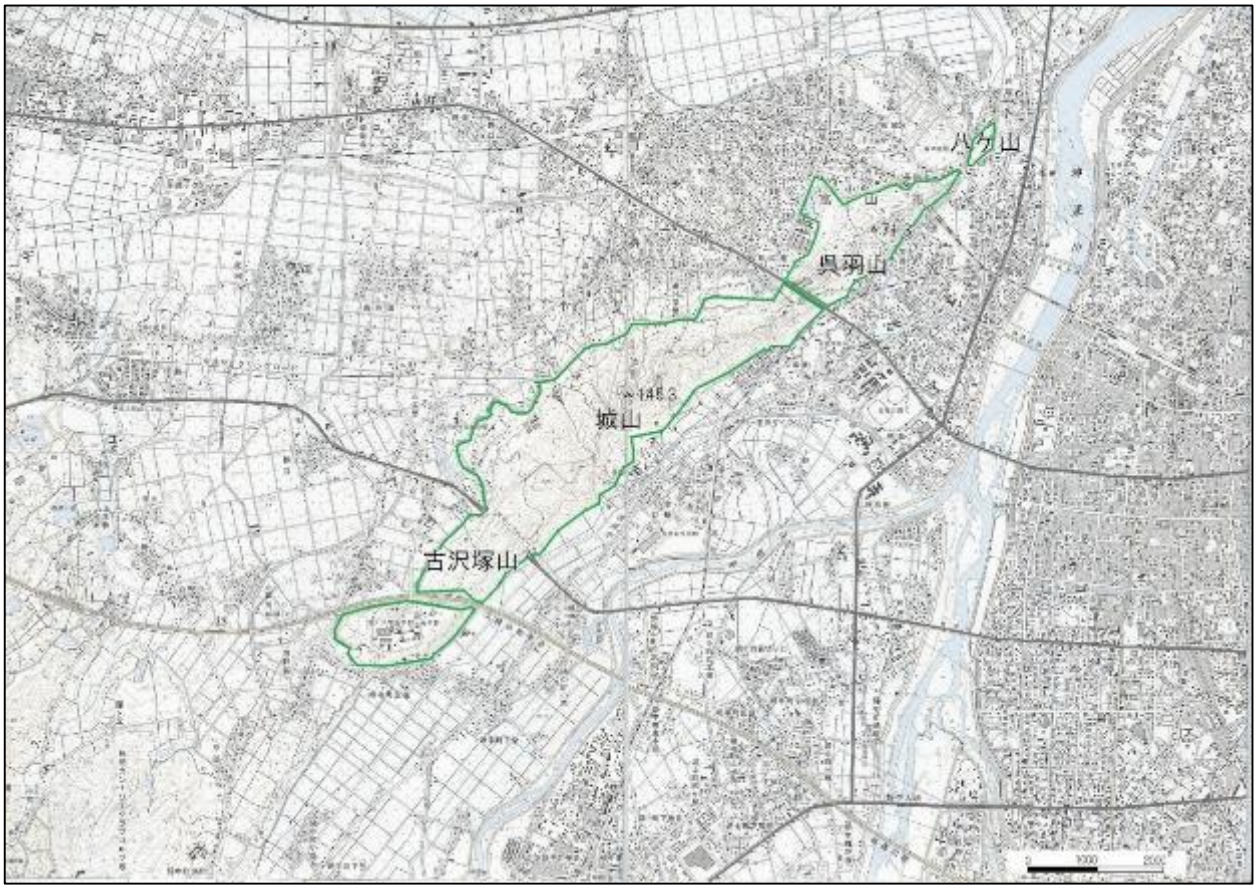
人々は、周囲の丘陵部を含めた平野部に住み歴史をつくってきている。なかでも古くから人口が集中している県中央部で、そこを東西に横断している旧北陸街道が飛騨街道などと一体となって人々の生活を支えて来ており、今でも沿線に多くの神社仏閣や遺跡を残している。

この事から、旧北陸街道にスポットを当て、その沿線にあたる呉羽丘陵とその周辺の見どころを紹介することとし、次の区域に分け神社仏閣、遺跡、戦国時代の山城などに整理した。

１．呉羽丘陵と寒江郷
２．旧北陸街道の沿線
３．巡見上使道の沿線
４．八ヶ山周辺の探訪
５．呉羽山周辺の探訪
６．明神山周辺の探訪
７．城山周辺の探訪
８．古沢、池多、朝日、古里周辺の探訪

２．呉羽丘陵と寒江郷の概要

（１）呉羽丘陵の概要



呉羽丘陵の範囲図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

呉羽丘陵とは？

「呉羽丘陵」という呼び名は、呉羽山で代表される丘陵という意味で、正しくは「呉羽山丘陵」である。

ここでは全体統一のため呉羽丘陵を使うことにする。

呉羽丘陵は富山市西部に位置し、南西から北東方向に斜めに走っている。その延長は、南の友坂から北の百塚まで約 8㎞、最大幅は 2㎞ 足らずである。

県道富山高岡線の南側に広がる城山（標高 145.3m）、北側に位置する呉羽山（標高 71.3m）、さらに牛ケ首用水を越えた北側の八ケ山（標高 35.0m）の三つのピークをもつ。

越中平野の小さな高まり、呉羽丘陵

旧北陸街道は、古くから明治の初めに五福新道ができるまで、呉羽丘陵の峠を難所としてきた。

また、近代の鉄道交通の時代になってもトンネルをうがち、切り通しを開かねば通行がかなわなかった。

そして、時代により高地性集落や宗教的施設、城郭などがつくられ、観光地ともなってきた。

呉羽丘陵は越中平野のほぼ中央の小突起、人びとにどのような影響を与えてきたのだろうか。

呉羽丘陵の特質

呉羽丘陵の高さは、100m前後に過ぎないけれども、丘陵より西を「呉西」、東を「呉東」という呼び名があるように境界、または障壁として受け止められる場合がある。

確かに交通の障害は、昔も今もあることは冒頭に述べたとおりである。

また、方言や風俗・習慣、商圏などにおいて西と東で異なることが指摘されている。

それならば呉羽丘陵を挟んで呉西と呉東でかなりの地域性の違いがあり、それがこの丘陵の障壁

性によるものなのだろうか。しかし、そうとも言いがたく、両地域に共通するものも多い。

大体、「呉西・呉東」の用語の使用は、比較的新しく昭和の初めからのようである。

藩政時代は加賀藩領・富山藩領で区分されたため、呉羽丘陵で東西を分ける観念はなかった。むしろ婦負郡の範囲は呉羽丘陵を含み、更にその西方の呉羽・寒江地区に及んでいた。

呉羽丘陵はその位置といい、高さといい、実に適度で自然の賜物と言う他はない。

先人たちがこの地に神聖なものを感じ社寺や廟所、記念碑などを設けた心を尊しとしなければならない。

また豊富な動植物も見られ越中平野に残された唯一のグリーンベルトとして重要性が高く、親しみやすいがゆえ、みだりな開発や利用を抑えるため丘陵全体が都市計画公園として整備されている。

呉羽丘陵の生い立ち

呉羽丘陵は、東斜面が急な崖で、西斜面は緩やかな斜面である。東斜面は平野との境目が直線的になっており、呉羽山断層が考えられるが、断層の証拠を示す露頭(岩石が地表に露出しているところ)が見つからず、その後の調査で山麓線より約1km 東に、呉羽山断層があることが明らかにされた。(平成９年富山県活断層調査の調査より)

呉羽丘陵の地層は、下図のように層をつくって堆積している。

地層は水平でなく、下層では大きく西に傾いている。これらの古い地層の上に新しい層が堆積し丘陵を形づくっている。

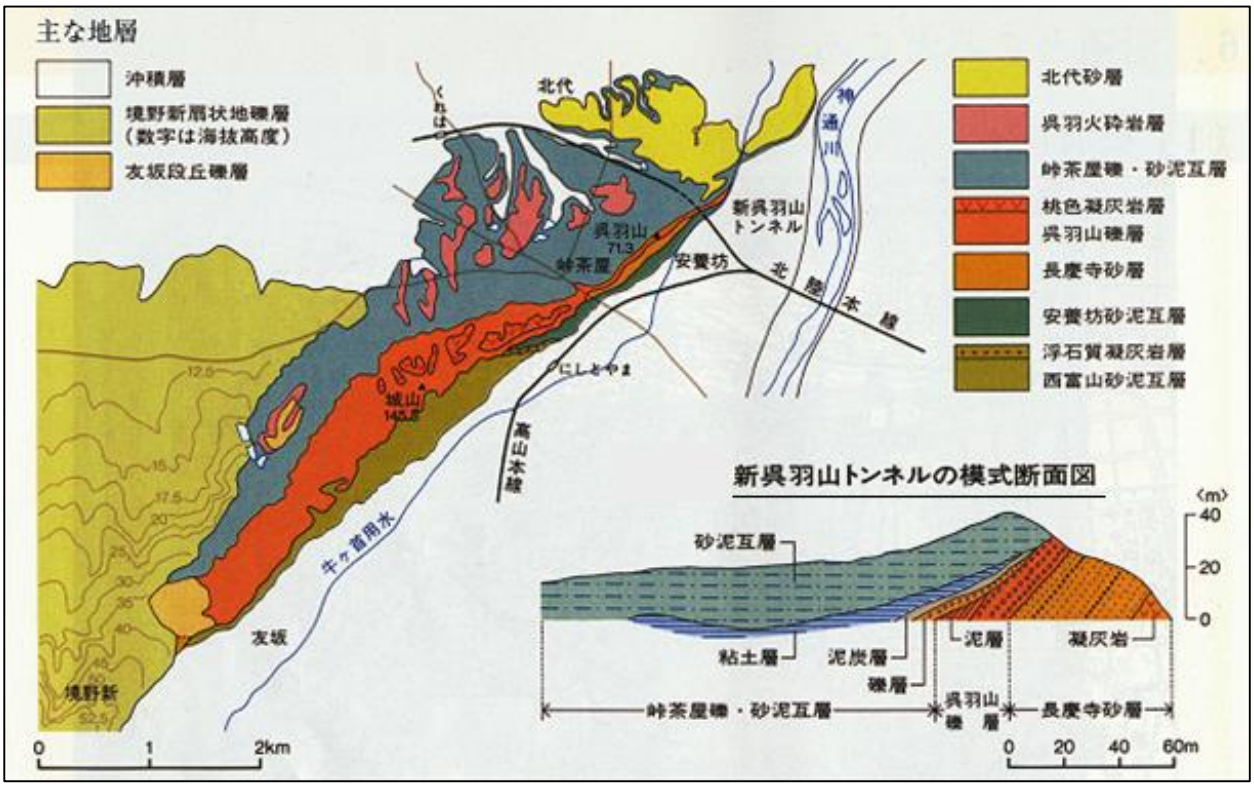
地層が観察できる露頭は、丘陵の随所にみられる。

東側の安養坊付近では、今から百万年ほどまえ海で堆積した層があり、山頂付近から西斜面にかけて砂や小石、場所によって人頭大の石が一定方向で堆積している。これは川によって流されてきた石などが堆積されたことがわかる。

つまりかっては海で、その後、隆起して陸となり、その上に大きな川が土砂を運んで堆積させた。

その川は現在の神通川で、よりはるか西方の友坂 - 境野新のコースをたどり、現在の射水平野へ流れていたと考えられる。（古神通川）

その後、丘陵部および境野新付近が隆起したため、河道が東へ移り、丘陵の東側を流れるようになった。



呉羽山丘陵地質図　（『アーバンクボタ 31 号』1992 年、藤井昭二氏原図）

「呉羽」の地名の起こり

江戸時代に書かれた『越中志徴』には、呉羽山の山名は機織業を伝えた渡来人クレハトリに由来すると書かれている。

呉羽駅（旧 JR 北陸本線呉羽駅、平成 27 年３月 14 日より北陸新幹線　長野・金沢間の開業に伴い「あいの風とやま鉄道」へ移行）の南方に姉倉比賣神社が鎮座するが、祭神の姉倉比賣は機織の神でクレハトリ伝承とかかわりがあるとされている。

『源平盛衰記』巻 28 に、寿永２年（1183）木曽義仲の武将今井兼平の軍勢が「御服山」に陣取ったとある。この場合、クレハトリに呉服の字があてられ、これが音読されてゴフクとなり、さらに御服、五福などの字が宛てられるようになったと考えられる。天明３年(1783)以前に書かれた堀麦水の『三州奇談』に「くれはの宮」と記されているのがクレハでの文献初出である。

埋蔵文化財の宝庫

呉羽丘陵およびその周辺には、数多くの遺跡が分布している。

富山市埋蔵文化財センターのホームページに富山市の主な遺跡 55 件が紹介されているが、そのうちの 24 件が呉羽丘陵とその周辺に属するものである。

なかでも昭和 55 年の城山の白鳥城址発掘のおり、山頂部の本丸跡から「高地性集落」が発見され弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器や竪穴遺構が検出された。弥生時代の終末期に動乱の時代があり、防禦的な性格の集落が存在したのではないかと推量される。

それらを時代順に掲げると次表のとおりとなる。

呉羽丘陵周辺遺跡分布表など

時代／遺跡名	特　　徴
【旧石器時代】	
境野新遺跡・向野池遺跡	東西旧石器文化の交流がみられる
【縄文時代】	
蜆森貝塚	伝説の貝塚
小竹貝塚	日本海側最大級の貝塚
平岡遺跡	縄文前期､1000 点以上の石鏃、石錐など出土
開ヶ丘中山Ⅲ遺跡	縄文時代中期の集落跡
開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	縄文時代の大規模集落跡
古沢遺跡	縄文時代のドングリ発見
北代遺跡	遺跡公園に整備
長岡八町遺跡	縄文時代後期～晩期遺跡
【弥生時代】	
杉谷古墳群・杉谷 A 遺跡	四隅突出型、防形蓋、山陰と北陸の交流を示す
【古墳時代】	
百塚住吉遺跡	県内最古級の前方後円墳
呉羽三ッ塚古墳	呉羽丘陵北西部の古墳
古沢塚山古墳	5 世紀前半の前方後円墳
番神山古墳群	6 世紀後葉の横穴式古墳

時代／遺跡名	特　　徴
【古代】	
(飛鳥時代)	
金草第一号古窯	7 世紀末の須恵焼き窯、約 8000 点の壺、杯など出土
(奈良時代)	
栃谷南遺跡	古代の瓦・須恵器生産工房
西金屋窯跡	須恵器を焼いた窯
長岡杉林遺跡	奈良～平安時代にかけての集落遺跡
開ケ丘中遺跡	山寺を奉る工人の拠点集落
開ケ丘ヤシキダ遺跡	平安時代の工人集落
花の木Ｃ遺跡	古代婦負郡の祭祀場か
【中世～近世】	
白鳥城跡	呉羽丘陵の最高峰に位置した山城
願海寺城跡	堀跡から木簡出土

歴史時代以降の呉羽丘陵

歴史時代に入ってまず問題になるのは、古代の官道がどのように通っていたかである。

『延喜式』記載の越中八駅のうちまだ場所が明確になっていない「白城」駅が、呉羽丘陵ふもとの花木に比定されれば、丘陵の近くを通ったことになる。そうではなくても、水戸田 - 黒河 - 花木 - 茶屋と通じる道の歴史は古く、江戸時代には巡見上使道とも呼ばれ、丘陵を東西に横切った。

戦国時代の天正 13 年 8 月(1585)、羽柴秀吉が白鳥城に本陣を張り富山城主佐々成政を降伏させた。(通説では天正 14 年 12 月 19 日「太政大臣」の認可を持って豊臣としており、本編では、羽柴秀吉とする。)

『三州志』には、白鳥城やその支城とされる大峪城とは別に、呉服山陣跡・呉服北代山・安養坊山・道心山の四つを一跡として記している。

近世の呉羽丘陵

呉羽丘陵を越える旧北陸街道は、江戸時代に入って高岡から小杉新町を経由し、大手崎で分かれ願海寺を経て追分茶屋で旧来の北陸街道と交わる「富山往還」ができたため富山道とも呼ばれるようになった。

産業面では、寛永元年(1624)、農民の訴願を加賀藩が許して牛ケ首用水の開削が始まった。呉羽丘陵の東側から北部へ水を送り、婦負郡北部から射水郡を潅漑するものであった。

また古沢用水は丘陵西部の境野新扇状地を広く開発するもので古沢屋仁右衛門が宝永３年(1706)より自普請で工事を行い、その後富山藩が引き継いで完成させた。

呉羽山東側の桜谷は、一目千本といわれた桜の名所で、ここに自仙院(富山藩８代藩主前田利謙の生母)が人丸堂をつくり、藩文化の中心地となった。

丘陵最北端は、百塚といい富山藩が最初に築城計画を持っていたところである。その後、近くに歴代藩主の墓地を築いた。のちに富山市民の墓地もその周辺に営まれ現在の長岡墓地になった。

江戸時代の儒学者で漢詩人の南部南山(1658～1712)は、しきりに呉羽山を歌い俳書『多磨比呂飛』で俳諧名所として呉羽山を取り上げている。

大伴家持の立山の歌碑をはじめ多くの文学碑が山中に建っている。

旧北陸街道（富山道）が呉羽丘陵を越える地点にあった七面宮（現七面堂の前身）は、江戸時代の名所に数えられ参詣の人びとでにぎわった。

近代の呉羽丘陵

明治 11 年(1878)、明治天皇の北陸巡幸のおり、五福新道(安養坊新道とも言う)が新設された。

この道は、従来の急傾斜の呉羽丘陵峠(峠茶屋)を上るよりよほど楽で、荷車や荷馬車の通行が可能となった。そのため、旅人は峠の道から新道へ移り、峠の道が次第に利用されなくなっていた。

なお、呉羽山観光ホテル東崖下の五福新道沿いに「呉羽修路碑」があり、大正 10 年(1921)に拡幅修理が行われたことがわかる。

北陸本線は、明治 32 年に高岡 - 富山間が開通したが呉羽丘陵の北側を迂回し、富山駅も神通川の左岸、田刈屋地内に仮設されたものであった。

明治 41 年、呉羽丘陵をトンネルでうがち、神通川を鉄橋建設して富山駅が現在の場所に建設された。

昭和 10 年代、東西の交通を遮っていた呉羽丘陵では荷馬車から自動車へと時代の変遷に伴って新国道 11 号(後に国道８号、現在の県道富山高岡線)の切り割工事がなされた。

旧北陸街道及び五福新道が横断していた峠茶屋を中心に呉羽丘陵を開いての広幅道路が建設された。

このため五福新道は寸断され、旧北陸街道はつながらなくなってしまった。

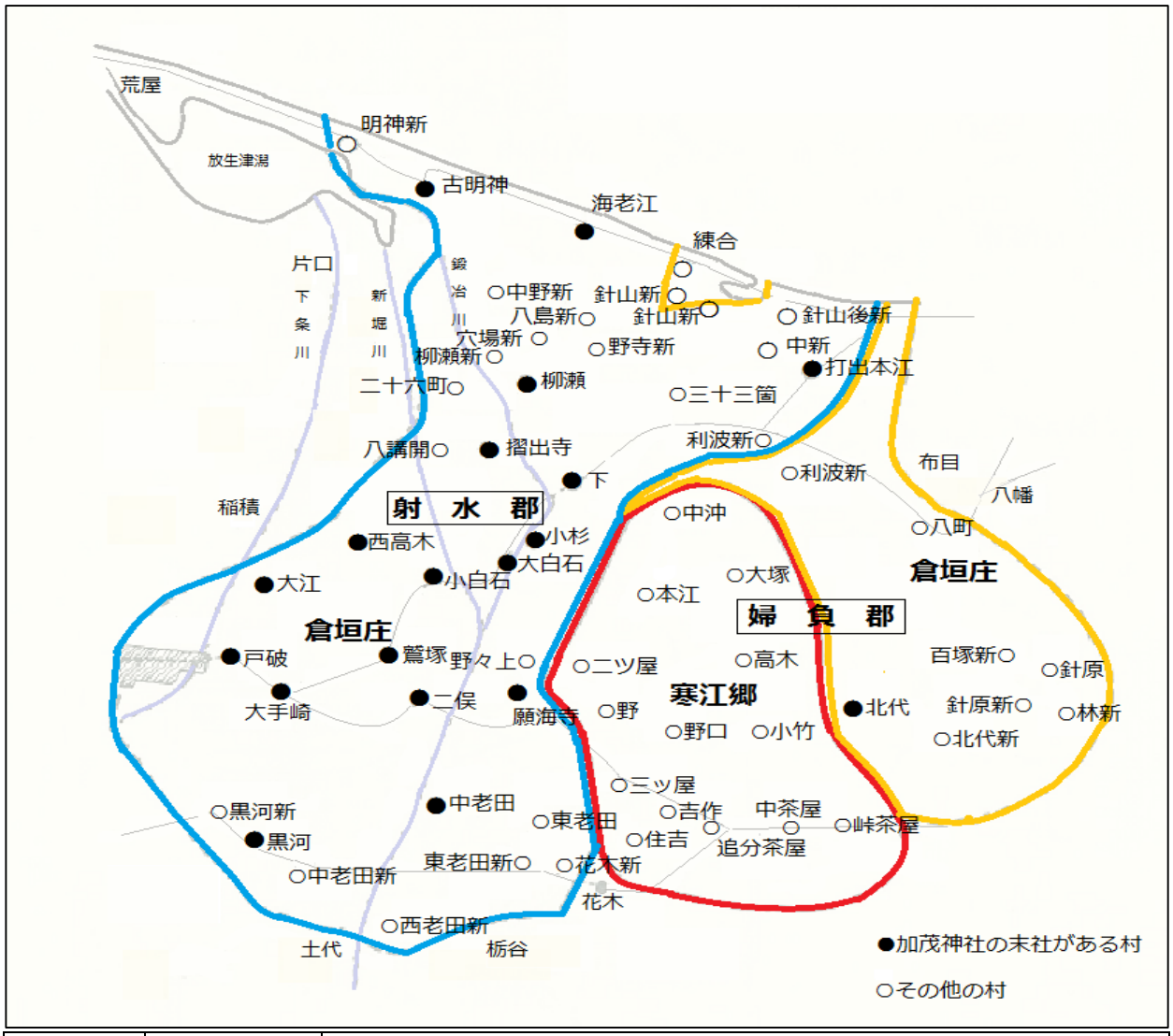
また産業面では、藩政時代の牛ヶ首用水や古沢用水を利用した稲作が中心であったが、水利の悪い呉羽丘陵西斜面では茶、桑から梨の栽培へと移行し、やがて一大産地へと発展していった。

また北陸本線が開通してから、呉羽駅周辺に「呉羽紡績」や「東亜特殊製鋼」など大工場が進出した。

しかし昭和に入って戦後の社会情勢から両工場もなくなり、やがて経済成長に合わせ住宅団地へと開発された。

呉羽丘陵を横断する県道富山高岡線
(左、城山方面　　右、呉羽山方面)

（2）寒江郷・倉垣荘の概要



	射水郡倉垣庄 （38 ヶ村）	打出本江（足洗）、利波新、三十三箇（弘法分、館ヶ崎、六人野、七軒）、針山新、中新、針山後新、海老江、古明神、明神新、中野新（浜開）、八島新、野寺新、穴場新、柳瀬、柳瀬新、二十六町、八講開、摺出寺、下（志村、高場）小杉、大白石、小白石、西高木、野々上、願海寺、二俣、東老田（牧）、東老田新、花木新、中老田（西、東光明寺）西老田新、中老田新、黒川、黒川新（藤塚、石坂、新田、町口）、戸破（島、針原、北手崎）、大手崎、鷲塚、大江
	婦負郡倉垣庄 （10 ヶ村）	針原、針原新、百塚新、林崎、北代、北代新、八町、利波新、練合、針山新
	婦負郡寒江郷 （14 ヶ村）	中沖、大塚、本江、野口、野、二ッ屋、高木、小竹、吉作、住吉、三ッ屋 峠茶屋、中茶屋、追分茶屋

倉垣庄の範囲図（江戸時代）　（下村教育委員会、生涯学習叢書１より）

寒江郷のはじまり

「寒江郷」とは、奈良時代の呼び名で文献に登場するのが天平勝宝４年（752）「越中国射水郡寒江郷戸主三宅黒人」として出てくる。

「郷」とは、50 戸ほどの集落を表し、里とも呼ばれた。この時代の寒江郷は、射水郡に属し東側が八町、北代あたりまでを指すと言われている。

射水郡寒江郷は、古代の婦負川（現在の神通川）が、呉羽丘陵の最北端をかすめて四方付近で海に流れ出ており、往古の放生津潟と南の呉羽丘陵に囲まれた低地に位置していたものと思われる。

しかし、その後中世に入って下加茂社領となり郡境に変動があって婦負郡に属した。

倉垣庄と共に下賀茂神社の荘園へ

平安時代初期の寒江郷は、西隣り位置する倉垣庄とともに、白河上皇・堀川天皇の仏神事興行政策により上下賀茂社に各 600 町ずつ寄進された荘園の一荘となった。

倉垣庄が寛治 4 年（1090）、寒江郷が寛治５年（1091）に下賀茂社領となり倉垣荘と呼ばれ、以降室町時代末期まで約 500 年間続いた。

倉垣荘の広さは、当初、30 町（30㎢）であったが室町時代に年貢として 200 貫の地とされ現在の射水市海老江、堀岡地区から白石地区、戸破地区、黒河地区、富山市老田地区、八町地区、北代地区など射水市東部から富山市西部の 48 村に及んだ。

さらに江戸時代の資料『三州志』によると南北朝（1330～1390）の頃、現在の寒江本郷を本村として寒江地区、呉羽地区の 14 村が下賀茂社の荘園になったと言う。

地元では、これを裏付けるものに姉倉比賣神社に奉納されている上杉輝虎願書（永禄７年６月 24 日付、1564）に「寒江庄小竹村」と記されているものがある。

倉垣荘の各村では加茂神社があるのが特色であるが、現在の寒江地区にはない。

ただし北代に加茂神社があり、北代が初期の下賀茂社領であったなごりを残している。

荘園の移り変わり・崩れゆく荘園

初期の荘園は、奈良時代に律令制下で農地増加を図るため墾田私有を認めたことに始まる。

平安時代に、小規模な免田寄人型荘園（免税農地）が発達し、その後、皇室や摂関家・大寺社など権力者へ寄進する寄進地系荘園が主流を占めた。

鎌倉時代には、守護・地頭による荘園支配権の簒奪（さんだつ）が目立ち始め、室町時代になると中央貴族・寺社・有力武士・在地領主などの権利義務が重層的かつ複雑にからむ状況が生まれた。

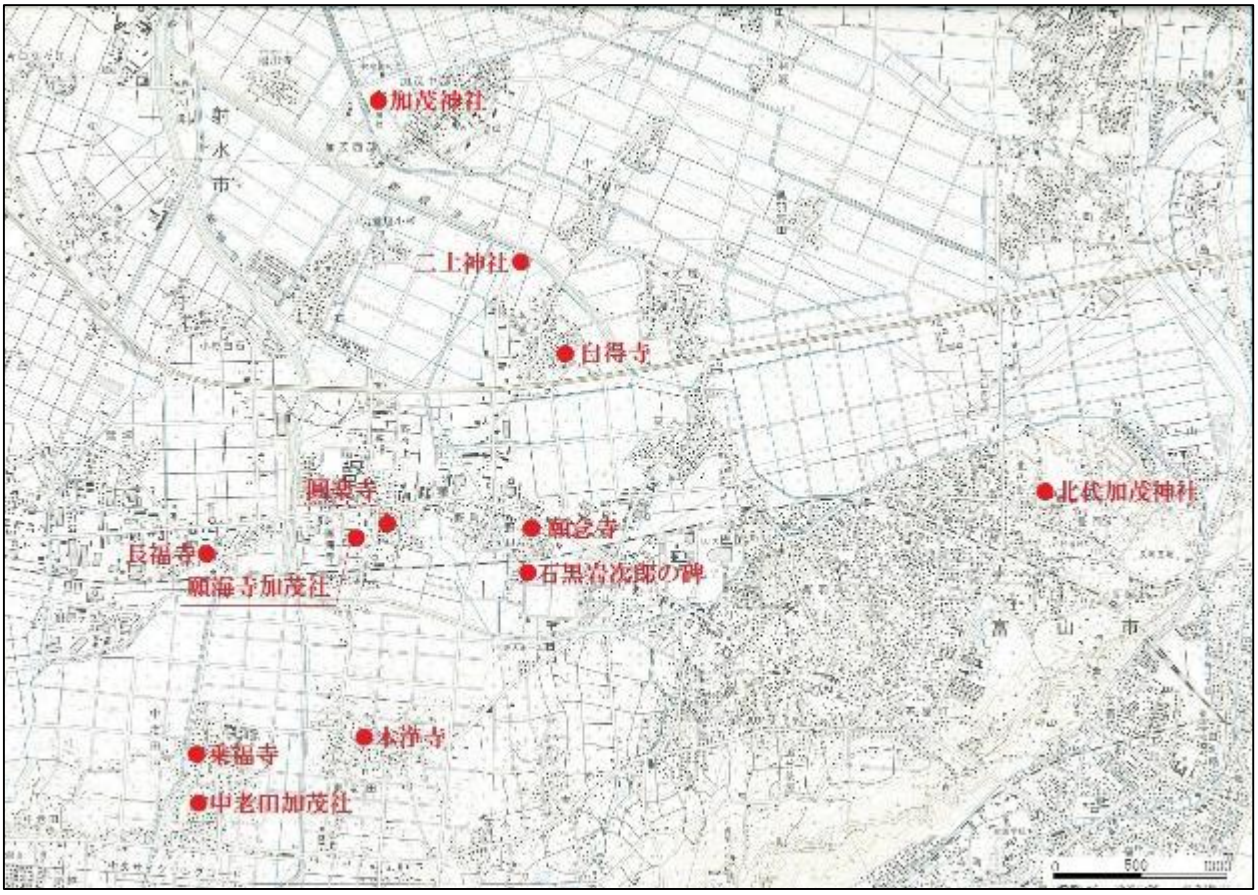
例えば、長禄 2 年（1458）寒江庄の代官誉田三河入道が年貢や人夫代銭を横領したこと。

文明 4 年（1472）越中射水、婦負の守護代神保長誠が倉垣庄内に侵入し所領の拡大を図ったことなど、しだいに荘園の崩壊が進んでいった。

戦国時代に入ると戦国大名による所領及び自治組織の郷村を含めた一国支配が進み、最終的に豊臣秀吉の全国的な検地により荘園が解体した。

呉羽丘陵から西方を見る

３．寒江郷のところどころ



寒江郷の見どころ位置図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

（１）寒江郷のみどころ概要

下村加茂神社を中心に開けた京都下賀茂神社の荘園、倉垣荘は、現在の射水市から富山市に及ぶ広範囲な地域で各村に加茂神社が祀られているのが特徴である。

平野部に広がる水田地帯でありながら、古くから灌漑用の水利がなく、呉羽丘陵の北斜面から流れ出る水をため池で水を確保し稲作していた。

この事から池多、古沢、吉作、呉羽などの山中に高木、老田、大江（おおごう）などの村が溜池を整備していた。また反面排水にも苦労しており舟に乗り田植えや稲刈りをしていた。

藩政時代に入り、富山藩が誕生してから加賀藩との藩境が確立し、村ごとの意識が高まり各村で立派な神社仏閣が造られた。

このような倉垣荘の中にあって奈良時代に誕生していた寒江郷のみどころを神社、寺を中心に紹介することとした。

寒江郷の観光案内板　（寒江地区センター前に立つ）

（2）寒江本郷の二上神社

寒江本郷の二上神社

寒江本郷の西北、鍛治川沿いに二上神社がある。

ご神体は、鎌倉時代の作で木造の観音像、総丈59ｃｍで高岡市の二上神社の分神と言われている。

この寒江の郷は、平地のため用水や排水の確保に苦しんでおり、古くから地割をなしていたことが、いまも残る地名、蔵面坪、東坪などからうかがえる。

これら一大事業を行うに当たり西側に眺める二上山の二上神の力を借りるため神社を建立したとされる。

また拝殿には、室町時代の木像の狛犬が保管されており、ご神体の観音像と合わせ神仏混淆の特色が残っている。

さらに江戸時代に奉納された絵馬などが数枚掲げられている。

木像の狛犬

奉納されている絵馬

（３）常在山自得寺（本郷中部）

台杉が植えられた参道

常在山自得寺は、曹洞宗の名刹で大本山總持寺の直末である。もと真言宗寺院で創立が建徳年中（1370～1371）。開基は、権大僧都竜恵法印で、開山が法印入滅後の応安７年(1374・北朝の年号、建徳と同年代）、本山總持寺四世無際禅師を懇請して始祖とした。この時に、真言宗から禅宗の曹洞宗の寺院となった。

寛永 14 年（1637）加賀藩三代藩主前田利常から 1200 歩の領地を拝領した。

明治 3 年の合寺令により伽藍などが壊されたが同 5 年に梵鐘や法器、一切経などが復元された。

宝物に延命地蔵石仏坐像（33 年に一度御開帳）、聖観世音木像立像、俄山禅師遺品（無際禅師は總持寺二代俄山禅師の高弟）の柱杖などがある。

また境内に高さ２ｍに及ぶ南北朝時代の宝篋印塔（県指定文化財）があり、自得寺の当時の隆盛を表している。

南北朝時代の宝篋印塔

手入れされた庭園

（4）藤白山願念寺（野口）

願念寺の正面

藤白山願念寺と称するが、古文書によると、次の話が寺伝として語られてきている。

もとは応永 11 年（1404）、新川郡布施川で開基した真言宗憲念寺で、その後現在の野口村に移転した。

宝徳元年（1449）憲誓住職のとき、蓮如上人が 11 日間滞在され、その時いろいろ教えを受けた住職は、願憲の名を頂いた。その後、応仁の乱のとき、江州堅田に避難されていた蓮如上人を訪ね 7 日間の教えの中で、浄土真宗に宗派替えされ願念寺の寺号を受けた。

願念寺は、上杉謙信の越中攻めと羽柴秀吉の佐々成政攻めのとき、２度焼火を浴び多くのものを失っているが、地元住民など関係者の篤い信仰心により支えられてきている。

また旧北陸街道（富山往還道）に面し、さらに加賀藩と富山藩の境界付近であったことから次のような話も残されている。

慶応４年(1868) １月、鳥羽伏見の戦いで勝利した新政府軍は、徳川慶喜追討令の勅書を発し、各藩主に請け書を求めた。3 月 10 日、北陸鎮撫使節総督、高倉永祐が富山藩入りをした時、富山藩士 40 余人が藩境の野口で出迎えたという。

その時の様子を藩士の一人森田三郎が日記に「願念寺で待機していた」と書き記している。

願念寺の御堂

（５）「銀坊主（ぎんぼうず）」の生みの親・石黒岩次郎

稲穂をあしらった石碑

野口の「あいの風鉄道」の踏切のわきに石碑が建っている。食糧増産をうたわれた明治時代は、良い稲株を選り分けて品種改良を行った。野口に住む石黒岩次郎は、家の前で試験田を作るなど稲の品種改良に 20 年もの年月を費やし努力を重ねていた。ある時、田んぼの一株にすっくと立っている稲を見つけ、モミの多さ、株の根張りなどに優れた品種を発見し、これを「銀坊主」と名付けた。その後、またたく間に全国や朝鮮にまで広がったが、これを知らずに 63 歳で生涯をとじた。

昭和３年、町田忠治農林大臣の撰文による石黒岩次郎の功を讃える石碑が建てられた。

（６）五智山乗福寺（中老田）

天平 11 年（739）婦中町長沢の各願寺仏性上人が支院として乗福寺を中老田に創建し五智如来を安置した。全盛時の各願寺は、末寺三千余坊を有しており京都より鍛冶師などを呼び大鐘、鈴、仏具などを鋳造し、今も鍛冶川、鍛冶浦という地名が残っている。その後乗福寺周辺に万行寺、養田寺、正釈寺、光明寺，南之坊、北之坊など八か院が順次建立されて北陸有数の大寺院となった。

天文７年（1538）神保と越後の長尾為景との争いに巻き込まれ灰燼に帰し、その後僧侶が途絶えたが天正８年（1575）観音小堂、寛永８年（1631）吉村久平の長男が出家し観音堂の横に庵室を結び本尊を守る。やがて江戸時代、宝暦８年（1758）現在の地へ移転し再建された。元の跡地には、土地改良事業の際に出土品が発見されたので「乗福寺跡地」の石碑が建っている。

乗福寺の正面

（7）東嶽山本浄寺（東老田）

本浄寺の正面

天正 14 年（1586）梅沢町の海岸寺 13 世陽山文泰和尚の弟子、賀純和尚が師匠を開祖として開山し、以来子弟が連綿と法灯を守ってきている。

創建当時は、布教的な庵であったが、のちに篤志家の寄進にて大きな伽藍となり遠くからでも見ることが出来たとされ、現在、寺橋、観音屋敷などの地名からも広範囲な寺領地を有していたことが想像できる。

また観音堂に安置されている大悲正観音菩薩は、地元瀧脇家の祖先伝来の守本尊であったものを江戸時代の 1790 年頃、当寺に移したとされ、以来厨子を閉ざし、33 年ごとに開帳されている。

しかし文政 5 年（1822）に火災にあい観音堂を残して全焼したが、その後 30 年の年月を経て再建され現在に至っている。

（8）蔵地山圓楽寺（願海寺）

圓楽寺の創建は、今から 400 年前、願海寺城の一家老「蔵地孫之進」が、城主寺崎民部左衛門一族郎党の霊を弔うため真言宗の一宇を開いたことに始まる。その後、慶長 19 年（1614）嫡男「富太郎」が出家し空信と改名し、浄土真宗本願寺派、蔵地山圓楽寺として再発足する。

元和 9 年（1623）現在地に移転し、現在第 18 代住職にいたる。ご本尊阿弥陀如来像は、真宗寺院の本尊と形態が多少違っており、家老職であった蔵地家の念持仏でないかとされている。

（「圓楽寺」縁起より）

圓楽寺の正面

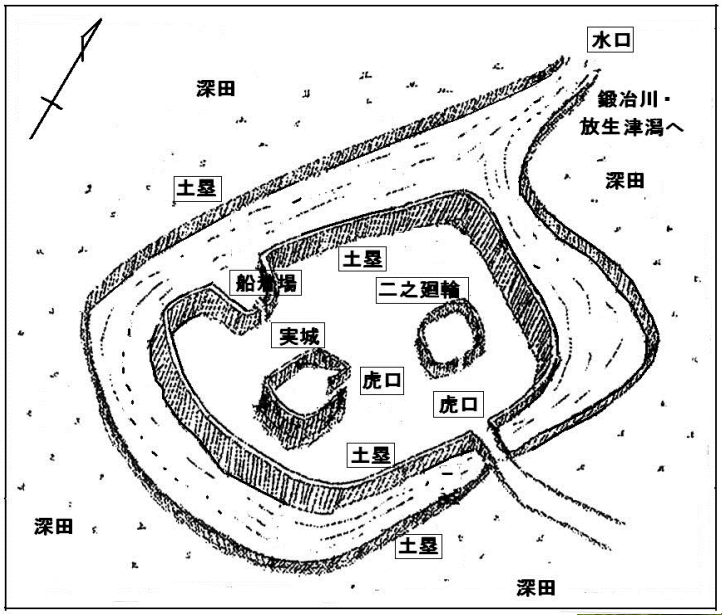
（9）白鳥山長福寺（西二俣）

長福寺の正面脇

長福寺創建の口伝に二説がある。もと源氏の閥族であった小坂義正ら 4 人が当地へきて長福寺を開いたという説と蓮如上人と深い関わりがある加賀二俣、本泉寺の役僧であった順正が創建し、以降二又であった地名が二俣になったという説がある。

蓮如上人との関わりは、上人が加賀、越中での布教活動を盛んに行われ、当地を通られた時には長福寺によられ門徒らと手交された。蓮如上人に関する遺品が数々あったが現存するものは舊（旧）蹟碑と六字名号である。また梵鐘は、世界大戦の供出を免れた約 500 年前の長福寺第 2 世慶順の時代のものである。

(10) 願海寺城と寺崎民部左衛門



願海寺城景観イメージ図　（『老田郷土史』より）

願海寺城は、上杉謙信の武将、寺崎民部左衛門盛永が天文 14 年（1545）頃に築城した平城で「上杉家文書」や「信長公記」などに名前が出てくる。

佐々成政の越中分封につき織田勢力が強まるなかで上杉謙信に仕えた寺崎民部左衛門は、謙信没後（天正６年、1578）織田信長に従うも反逆を疑われ、天正９年（1581）織田信長勢に攻められ富山県で切腹、願海寺城も廃城となる。

長い間、城の位置が賀茂神社周辺や「願海寺の七曲がり」と呼ばれる古道の存在から、集落の南部にある「舘本」地内と考えられていたが平成 14 年 5 月の舘本地内で行った発掘調査で、二重の水堀を巡らす戦国時代の居館跡が検出され、水堀の中から土師器（かわらけ）・珠洲焼・青磁・瀬戸美濃などの陶磁器類や漆器・木簡・将棋駒・曲物などが出土した。

木簡の表に「多て王き」、裏に「暫王り多て己」と墨で書かれ、名前や館の戦に関連した内容と考えられる。

また上杉家文書から城内には、二の廻輪（二の丸）と実城（本丸）が実在したことも明らかになっている。

小字館本の角に建っている城址碑

(11) 願海寺の寺と地名

願海寺の地名は、越中三坊主（親鸞の弟子）の一人「願海坊」が開基した寺の名（願海寺）をとって名付けられたという。

（坊号を実際に「願海寺」と命名したのは第五代信誓ともいわれる）

戦国の頃、第十四代願海寺住職「了性」が、水橋の小出から射水郡開発村（現富山市願海寺）館本に移住し「願海寺」という一宇を建立した。

熱心な布教活動により寺勢は大いに振るい下寺、三十八ケ寺を得、本願寺番銭（五百文）の最高負担額を納めていた。（『富山市史』通史より）

しかし、本願寺派に属する願海寺は、当時同じく館本に城を構えていた寺崎氏の夜討ちにあい寺は焼失し他都へ移った。

願海寺という寺は、現在、富山市清水町にあり、寺歴 800 年を有している。

住民にとって非常に大きな存在感を持つ寺院であったことから、「願海寺」の寺名が地名として残ったという。

(12) 願海寺・加茂社

・祭神　　賀茂別雷命（かもたけいかづちのみこと）
・旧社格　　村社
・所在地　　富山市願海寺
(歴史)
創建は不詳であるが、平安後期の 11 世紀ではないかと言われている。
「若々しく、逞しい」神で五穀豊穣、商売繁盛などに御神徳されるとのことから信仰の厚い神様。
神社では、獅子舞、初詣、春秋祭礼、少年相撲などの奉納行事が多く賑やかに催されている。
平成 12 年４月、拝殿、幣殿が再建された。

願海寺の加茂社参道

(13) 中老田・加茂社

中老田の加茂社参道

・祭神　　賀茂別雷命
・旧社格　　村社
・所在　　富山市中老田
(歴史)
平安時代、京都の神主城石主亮が中老田（小字加茂）に来て加茂社を創建し、山城の加茂神を勧請したと伝えられている。
明治４年（1871）村の中心部に鎮座する山王社の西側境内に遷宮された。
その後、明治 40 年（1907）、山王社と近在の神明社３社及び羽右衛門宮など一括合祀して加茂社とし、本殿、拝殿も改善して現在に至っている。

(14) 北代・加茂神社

・祭神　　賀茂別雷命
・旧社格　　村社
・所在地　　富山市北代 中谷
(歴史)
天正年中 (1573～92) 神保氏張により勧請され、近郷 33 ヵ村総社となる。
寛永三年（1626）の牛ヶ首用水開設以来、牛が神社のまもり牛となる。
昭和 44 年４月、明治 100 年祭を記念し茅葺であった拝殿を改築した。また鎮守の森となっていたご神木が枯れ木寸前となっており、新拝殿に引き継ぐため一部を財源とした。これらを記念して境内に記念碑が建てられている。

北代の加茂神社参道

(15) 下村・加茂神社

下村の加茂神社参道

・祭神　玉依姫命（たまよりひめのみこと）、加茂建角身命（かもたけつぬみのみこと）、賀茂別雷命（かもわけいかづちのみこと）
・旧社格　賀茂御祖神社領倉垣荘の惣社で郷社
・所在地　射水市下村

（歴史）

社伝では、治暦２年（1066）に京都の下賀茂神社から勧請されたと伝える。寛治４年（1090）、白河上皇の勅願により倉垣荘が越中国射水郡に設けられると、荘家がこの加茂神社に置かれた。境内に隣接して加茂遺跡があり鎌倉期の居館跡が発掘された。

荘域拡大に伴い、射水郡内各所に賀茂神が勧請された。

（祭事・無形文化財）

年間 50 回近くに及ぶ加茂神社の祭事は、荘園維持行事（勧農儀礼・貢納儀礼）の継承と賀茂信仰にまつわる葵祭の移入という特徴がある。射水市加茂地区・倉垣小杉地区・柳瀬地区の３地区で祭礼を維持している。

（主な祭事）

・１月１日：鰤分け神事（射水市指定無形民俗文化財）
・５月４日：やんさんま祭り（富山県指定無形民俗文化財）
・６月上卯日：御田植祭（富山県指定無形民俗文化財）
・９月４日：稚児舞（「越中の稚児舞」として国の重要無形民俗文化財に指定）

（有形文化財）

・「獅子頭」２体（射水市指定有形文化財）

（境内末社）

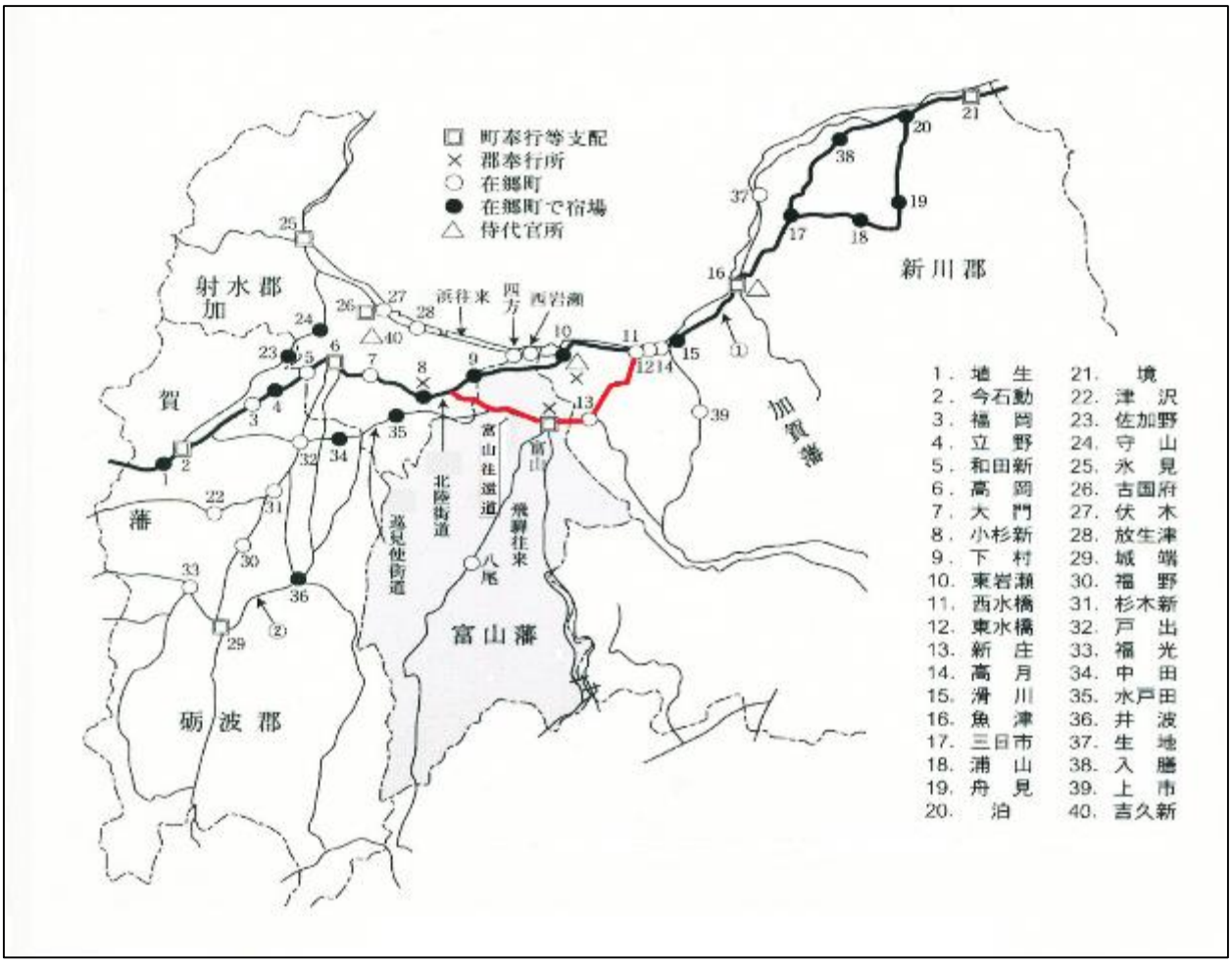
・貴布禰社（きふねしゃ）・任海社（とうみしゃ）・稲穂神社

（名所・旧跡）

・福王寺（旧・加茂神社神宮寺）真言宗
・木造不動明王立像（富山県指定有形文化財）
・木造阿弥陀如来坐像（富山県指定有形文化財）
・木造毘沙門天立像（富山県指定有形文化財）
・賀茂本地仏の聖観世音菩薩坐像

４．旧北陸街道(富山往還)を歩く

（１）旧北陸街道（富山往還道）の概要



江戸時代の越中の町と街道　（石黒信由原図、『富山県史』史料編より作図）

県内の北陸街道変遷

富山藩の街道状況は、加賀藩前田氏の越中支配の状況によって道筋や働きに変遷があった。

文禄４年（1595）越中全域が加賀前田氏の支配となり、慶長２年（1597）前田利長が富山町に居城し、越中支配の拠点とした。利長は、翌年家督を継いで金沢に移ったが、同 10 年利常に家督を譲り再び富山城に戻った。

この頃の北陸街道は、富山町 - 舟橋 - 五福 - 茶屋 - 水戸田 - 中田 - 今石動 - 加賀金沢町の経路であった。

利長は、同 14 年（1609）の富山町大火によって高岡に城を築いて移ったため、高岡を中心に浜往来など北寄りの魚津町に行く道が整備され、また小杉新町から戸破、大手崎（射水市）を経て富山町へ通じる道（富山往還）なども重要となった。

さらに寛永 16 年（1639）、富山藩が支藩として誕生し前田利次（利常の次男）が富山城（加賀藩から借城）に入城してから富山町が越中交通路の要となった。

この頃の北陸街道は、正保４年（1647）の『越中道記』に「大道」と記され、越後から越中新川郡境村（現朝日町）に入り、泊町、横山町（現入善町）、入膳町、三日市（現黒部市）、魚津町、滑川町、東水橋（現富山市）、西水橋、新庄を経由して富山町に入り、神通川の船橋を渡って左岸の婦負郡愛宕村から五福古城道、花木新、黒河村、三戸田（現射水市水戸田）を経て今石動町（現小矢部市）を通り倶利伽羅峠を越えて加賀へ入る経路であった。全長は、越後境の堺川から倶利伽羅峠まで 20 里 19 町余（80.7km）、道幅はいずれも２間（3.6m）と記されている。

その後加賀藩は、寛文２年（1662）に富山町を通らない三日市 - 魚津町 - 滑川 - 東岩瀬 - 下村（射水市） - 小杉新（射水市） - 高岡町 - 今石動町の新しいルートを確定し、加賀藩主の参勤交代路とした。

以後、この経路が正規の北陸街道とされた。

街道筋の東岩瀬町に新川郡奉行所、小杉新町に砺波・射水郡奉行所を置いた。寛文５年に道番を定め、同６年各宿の駅馬数を指定し、延宝元年（1673）に街道調査を行って翌２年４月に街道の補繕をした。そして街道の管理を各郡十村（他藩の大庄屋に相当）の責任とした。

富山往還（富山道）

『従加州金沢至武州江戸下通山川駅路之図』（富山～高岡）　正徳２年（1712）有沢永貞図（富山県立図書館蔵）
江戸時代の初期に金沢から江戸までの山、川、宿駅の様子を描いたものから富山高岡間を抜粋したもの。

加賀藩により小杉新町から戸破（射水市）を経て、大手崎で別れ富山町を通らない北陸街道が整備されてから、二俣、願海寺を通って追分茶屋で従来の北陸道に交わる道を石黒信由編著『増補大路水系』（天保７年、1836）では「富山往還」と記している。

この富山往還は、さらに中茶屋、峠茶屋で呉羽丘陵を越え、五福、富山船橋を経て富山城下に至り、富山城下から東は、新庄新町、西水橋、東水橋を経て滑川町に至るまでを指し、小杉新町からの総距離が７里 27 町 16 間（18.4km）であった。

富山往還は、富山町で飛騨街道や東岩瀬往来、四方往来、立山道などと交叉し、また西が水戸田から砺波へ向う道などもあって各宿、各地と結ぶ越中の中心街道で両宿伝馬と旅人、人足が行き交って大変賑わった。

『増補大路水系』では、この富山往還に対し加賀藩主の参勤交代路を「北陸道」つまり「北陸街道」と記しているが、同じ時期に書かれた加越能文庫『五街道之外往還宿駅人足継立候ケ所書上申帳』には富山往還も「北陸道往還」と記している。

加賀藩交通制度の確立によって、追分茶屋から西方の水戸田・中田を通る北陸街道の機能は減少したが、徳川将軍の代替わりのおり国廻する巡見上使の通る道であったことから巡見上使道（巡見使街道）と呼ばれるようになった。

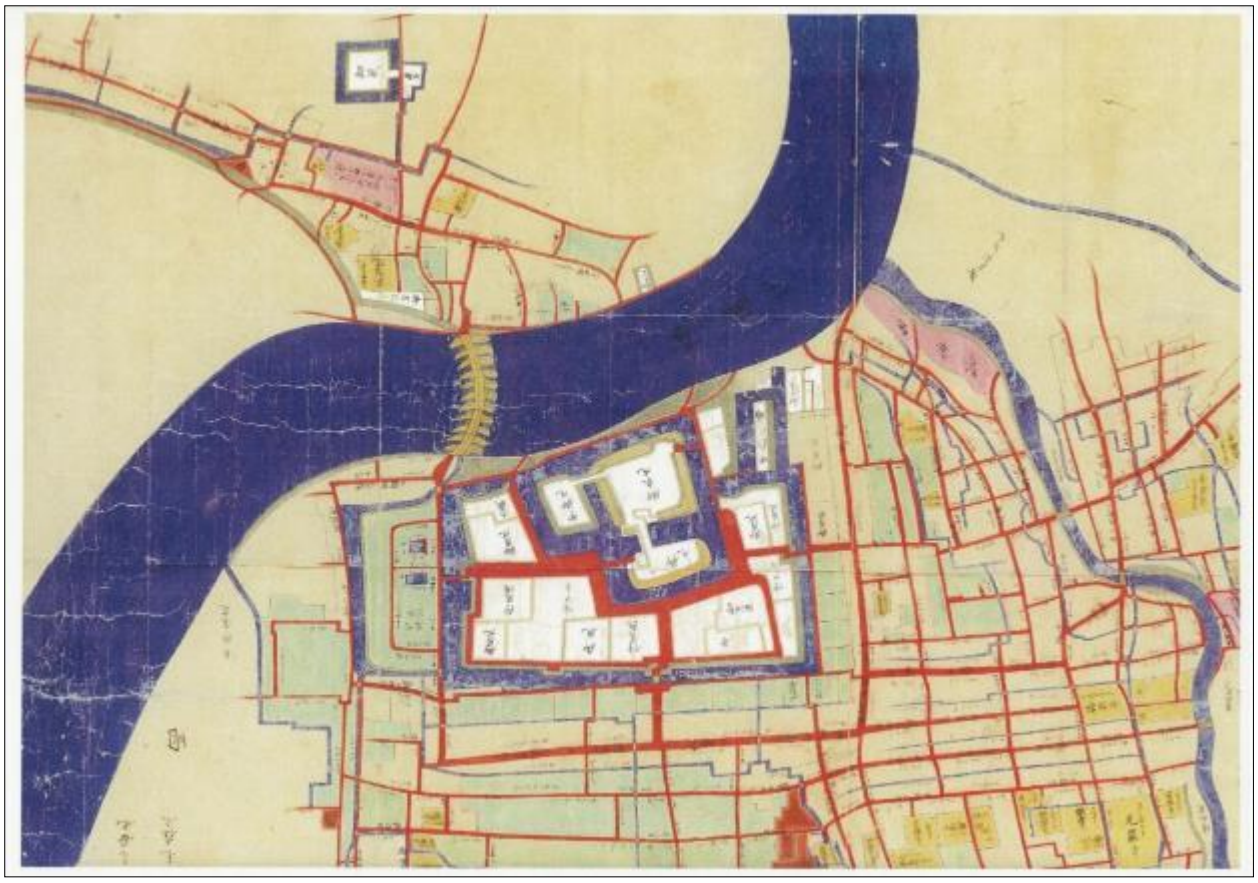
巡見上使道は、富山町、新庄新町を経て西水橋を通ったからその経路は富山往還でもあった。

広い意味での北陸街道

当時の街道の名称は、古くからの名称やその機能、地域名などから複数の呼び名が存在した。

前述したように呉羽丘陵を通る街道は、越中大道、富山往還、巡見使街道、北陸道などと呼ばれたが、加賀藩主の参勤交代路を正規の北陸街道とするも一般的には富山往還を含めて広く北陸街道とする理解がなされている。

（2）富山城下での旧北陸街道



『富山御城下町絵図』（部分）　　（富山県立図書館蔵）
富山町をお城中心に描いた精図。城中が白色、侍屋敷が緑色、寺院、船橋が黄色など色分けし描かれている。

富山城下での旧北陸街道

富山城下での旧北陸街道は、東が加賀藩領新庄から赤江川を渡って富山の町に入る。稲荷町、柳町、上り立町を経てイタチ川を越え繁華街の東四十物町、中町、西町へと続き、西町の太田口で南からの飛騨街道と接続していた。さらに西へ、現在の平和通りを二番町、一番町、越前町、旅籠町と進み、旅籠町から、北に折れ富山城の三の丸の西側を外堀に沿って船橋へ通じた。この七軒町までの街道（現在の県道諏訪川原通り）を昼道と呼んでいた。

七軒町では、鉄砲町から神通川に流れ込んでいた助作川に助作橋が架けられ、そして富山城下の治安を守るため門が設けられていた。

この門は、助作門と呼ばれ木戸（柵門）で日の出に開けられ日没に閉ざされていた。

夜間の通行は、この門の北側で助作川に沿って西へ迂回し鉄砲町、平吹町を通って旅籠町に至っていた。この道を夜道と呼び昼道に並行していたが旅人に判りにくく作られていた。

船橋の南橋詰には、やや広い場所があったことが江戸時代の城下町絵図で見ることが出来る。

また鮎の鮨を商う茶店などがあって賑わっている様子を当時の版画や十返舎一九の文に記すところである。一九は「名物の鮎の鮨とて旅人のおしかけてくる茶屋の賑はひ」と書いている。

今もあたりに鱒の鮨の看板をあげる川魚店があり、鮨を圧する黒石を並べた独得の景観である。

（3）富山船橋をしのぶ

『富山城下神通川船橋図』　富山藩絵師、山下守胤筆（富山市郷土博物館蔵）
神通川船橋の水墨画で両岸に常夜燈が描かれている。現在、松川べりと県森林水産館前に残っている常夜燈である。

今も残る常夜燈

南詰常夜燈

越中船橋は、前田利家によって慶長年間、木町地先に架設されていたものを富山藩主前田利次が万治年間に城下町割りの一環として、この地に移したという。

現舟橋のたもとにある南詰の常夜燈は、昔とほぼ同じ場所で道路の東側に立ち「両宮伊勢大神宮」と刻まれている。

北詰の常夜燈は、森林水産会館前に立っているが、もとの位置が道を挟んだ西側で南北筋違いに対峙していた。

この北詰の常夜燈には「金毘羅大権現」「寛政十一未歳初春」と刻まれている。これを見ると「富山船橋」の守護神は、伊勢と金毘羅さんであった。

両常夜燈ともに富山大空襲の火をかぶったため、ところどころ損傷したが一応の原型を保ち旧北陸街道の旧観をしのばせてくれる。

また北詰の常夜燈の隣に頼鴨厓（らいちょうけい）（頼三樹三郎）が嘉永元年(1848)に詠じた船橋の漢詩の説明板が建っている。「ここに船橋を架け、64 艘の舟を鎖でつなぎ、舟の上に板を並べて人を渡したあとで規模壮大、景観雄大、日本第一の船橋」と天下に伝えている。漢詩碑の建立は昭和 30 年である。

明治 11 年（1878）、明治天皇の巡幸も船橋を通られたが、明治 15 年木橋に架け換えられ神通橋と名づけられた。ここに船橋は、300 年の歴史を閉じた。その後、神通川は、明治 24 年の馳越工事（はせこしこうじ）によって流路を変えたが、旧河道も残り新旧二川に分流する形となった。

明治 32 年官設北陸鉄道は、敦賀から富山までが開通した。当時の富山駅は神通川左岸の田刈屋地内に設けられ、富山市へ入るにはこの神通橋を渡らねばならなかった。

神通川旧河道の埋め立ては、約 40 年かかったが土地区画整理事業で整備（昭和 3 年～昭和 9 年）された広大な旧河道の土地に、県庁や市役所、電気ビルなど大型建築物が建ち、県都富山市の発展に大きく寄与した。

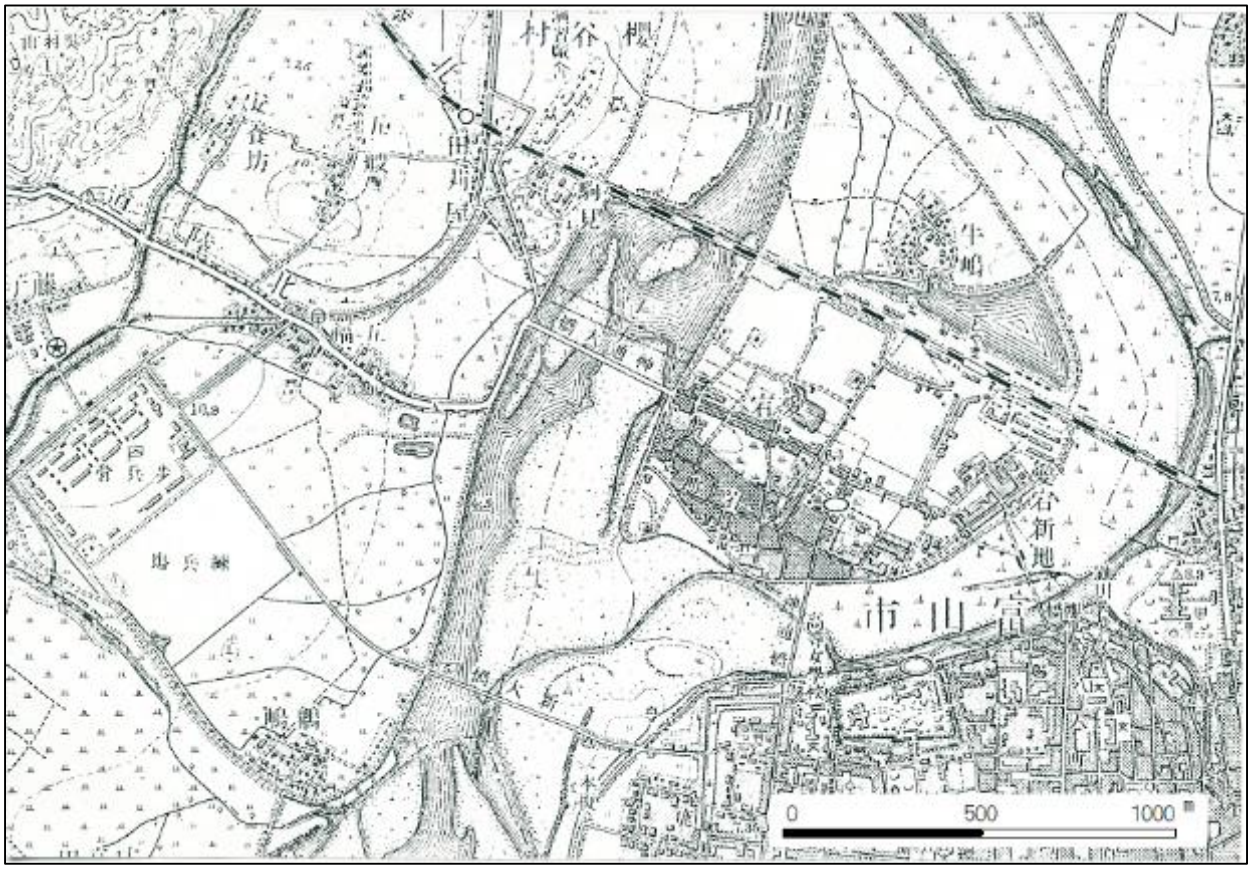
これらの工事の完了を記念して日満産業大博覧会が昭和 11 年（1936）に開催された。歌人の川田順（1882～1966）も「埋め立てし神通川の川床にひろがる街や時雨ふりつつ」と歌っている。

残った松川は、旧神通川の名残りをとどめているが、川漁などに使う舟も数少なくなり観光用の舟が見受けられる。

北詰常夜燈　（県森林水産会館隅に立つ）

現在の舟橋
旧神通川の廃川地を流れる松川に架かる舟橋は、橋桁に往時の笹舟がデザインされている。

（4）橋北での旧北陸街道



舟橋が架かっていた旧北陸街道の様子を残す明治 43 年測量の地形図

かっての神通川は廃川地となり馳越線が本流になっている。旧北陸街道は南側の市街地から船橋に代わって架けられた神通橋を渡って愛宕へ進み、家並みを通り抜けて新しい神通川の神通大橋、そして五福へと続いている。

舟橋の北詰

神通川の左岸一帯を「舟橋向」、又は「橋北（きょうほく）」と言い、文政２年（1819）正式に富山城下に組み入れられた。

舟橋向には、船頭町、藤井町、手伝町（てったいまち）、愛宕町、舟橋今町、舟橋新町、舟橋散地町（ふなはしちりちまち）、御福新町が旧北陸街道に沿うように連なっていた。街道は、船頭町から藤井町の郡役所の手前で左折し、西へ手伝町、愛宕町へと続いた。

明治政府は、県と町村の中間的な行政機関として明治 11 年（1878）から大正２年（1923）までの間、各郡に郡役所を置き中央から派遣した官選の郡長に郡役所を統括させていた。

その婦負郡の郡役所が明治 11 年、富山愛宕町に置かれた。最初の位置は分からないが、その後、明治 16 年（1883）に旧北陸街道の沿線、藤井町に新築移転をした事が分かっている。

その場所は、旧北陸街道を船頭町から北へ向かって突き当たったところ（現在の極性寺参道の出入り口）の県道小竹諏訪川原線の道路上で 32 年間あり、大正４年（1915）五福に移転し、大正 12 年（1923）の勅令で廃止となった。

沿線の極性寺は、浄土真宗大谷派の寺院で、『遺徳法輪集』では、「昔より越中には、三坊主とてあり。聖人（親鸞上人）御直弟子なり、願海寺、持専寺、極性寺これなり」とある。山号を館定山といい、古く鎌倉時代に富山市水橋の館（たち）に寺院を創建したと伝える。真宗教団ができあがる前から越中に浄土真宗を根付かせた歴史ある寺である。

県内各地を転々と移った後、寛永元年（1624）に安田町の現在地に移転した。

明治時代の地図を見ると、旧北陸街道から北へ参道が付けられていたが、現在民家が建ち並び、東側の県道小竹諏訪川原線から出入りするよう参道が付け変えられた 。

愛宕町通り

愛宕通りの街道筋

明治 11 年（1878）10 月 1 日、明治天皇の北陸巡幸の一行は、総勢 835 人、乗馬 119 頭の大行列で、御供をされた重臣は、右大臣岩倉具視、筆頭参議・大隈重信、参議・井上馨、徳大寺実則、宮内大書記官・山岡鉄太郎、内務少輔・林友幸、陸軍少輔・大山巌、内務大書記官・品川弥二郎等が各省から参加していた。

秋風さわやかな快晴のもと、東四十物町（ひがしあいものちょう）の中田清兵衛家を出られた明治天皇は、中町、西町、越前町、旅籠町、平吹町、諏訪川原を経て南から七軒町へと旧北陸街道を馬車で進まれた。

船橋南詰にある茶屋蔵本屋の前で板輿に乗り換えて船橋を渡られ船頭町、手伝町を経て愛宕町の大間知荘平家へ到着された。

明治天皇が休まれた御休所跡の東側に北へ向かう小路がある。この道を鍋屋小路という。

この道に面して西側に旧大間知家が使用していた井戸があり、明治天皇御小休の際、この井戸の水を沸かしお茶にして差し上げた御膳水井戸である。また随行員の山岡鉄太郎のエピソードが残っている。山岡鉄太郎は鉄舟と号し、戊辰戦争の時に勝海舟の使者として駿府（政府軍の本部）に行き、西郷隆盛と会見して勝と西郷の「江戸城明渡し会談」の道を開いた人である。

北陸巡幸の時、御休憩所の周辺の家々は街道に面した戸を外し随行された人々の御休所に当てられた。誰がどの家との指定なく、各自が行列の止まった所の近くの家で休憩をとられたようである。

各家では紋服を着て接待に当たったが、大間知家の筋向いの家で山岡鉄太郎が休まれた。

畳の上に赤ケット（毛布）を敷き高杯（たかつき）に奉書紙を敷き、竹林堂の饅頭を載せ茶の接待をした。

山岡は、饅頭を引き裂いて口にし、「ああ、酒饅頭だな」と言って賞味した。間もなく「お立ち」の合図で山岡は、素早く天皇のもとへ駆けつけられた。と伝えられている。

ここを通り過ぎて、北に向かって 80 メートル程進むと安田公園にいたる。この公園の一部南側の一帯が安田善次郎の生家が建っていた所である。

安田善次郎は、天保９年（1838）に生まれ、大正 10 年（1921）に亡くなっているが江戸に出て両替商に奉公、のちに両替店安田屋を開業した。

その後、明治９年（1876）、第三国立銀行の創設に参加し、のちに頭取となり、第百三十銀行等多くの銀行の救済や設立に関わるなど金融界での地位を確立した。

明治、大正期の実業家で安田財閥の祖で晩年、社会事業にも尽くし、日比谷公会堂、東京大学安田講堂などを寄贈した。

安田善次郎生誕の地　（「安田公園」として記念碑が立つ）

由緒ある愛宕神社

愛宕小路にある愛宕神社

旧北陸街道を西へ進み、南側に入る愛宕小路を70メートル程進むと愛宕神社にいたる。

愛宕神社は、室町時代には富山市石坂にあったと伝えられている。石坂のある桜谷地区は、室町時代に万見郷（まみのごう）と呼ばれていた。

当時万見郷を流れていた神通川は、天正８年（1580）の大洪水で流路を現在の松川の流れに大きく変った時、神通川流域が大変な荒廃地となったことは容易に想像できる。

その後、神通川の流路が定まって、富山城下も徐々に整備される中で、愛宕神社は石坂から遷座されたものと思われる。

愛宕神社の本社は、丹波国の式内社にもなっている古い神社で、京都市左京区嵯峨愛宕町に鎮座されている。この神社の御分霊を勧請して創建されたと伝えられている。

御祭神は、火之加具土命を主祭神とし、武南方命（諏訪神）、倉稲魂命（稲荷神）の神々が合祀されている。

藩政時代には、富山藩の鎮火守護の神として崇敬されていたが、明治時代になって、この神社の旧御神体が地蔵菩薩像であった事から、政府の神仏分離、廃仏毀釈政策の対象となった。

当時の神社関係者が相談の上、近くにある船頭町地蔵堂に緊急避難されることになった。

この地蔵菩薩は、僧形で、身丈36センチの木像、半跏趺座で錫杖を持った延命地蔵のお姿で、体内には「長禄元年（1457）夏、愛宕大権現、越中国婦負郡万見郷、五十嵐次郎左衛門敬白」と明記されている。

船頭町地蔵堂は、戦後の都市計画整備で移転し、現在芝園町２丁目の公民館に収められ、毎年８月24日の地蔵盆会に近隣の人たちが集まって手厚く法要を営まれている。

旧北陸街道を愛宕小路と反対の北に向かう小路が御蔵道である。

この道は、富山藩の年貢米を収納する愛宕の御蔵に通じていた。愛宕の御蔵の位置は、旧愛宕小学校の所で、この東側に年貢を納入できなかった農民などを拘束する百姓牢もあったという。

藩政時代は、神通川を利用して年貢米の輸送だけでなく色々の物資の輸送が盛んで、船橋の北詰である神通川左岸の船頭町で陸揚げされた物資が、旧北陸街道を通って各地へ輸送された。

愛宕町通りには、これらの物資を取り扱う有力商人が多く居住していて、商店街として賑わっていた。

御蔵道を少し西に進むと左手に乗光寺がある。

乗光寺は、元禄5年（1692）富山城主より愛宕村紅葉ヶ池を埋めた用地をもらい、寺堂を建立したのが始めとされ、今も幼稚園の名前に地名が残っている。

舟橋今町通り

旧北陸街道は、けや木通りをわたって西へ進み左右に別れる三叉路に突き当たる。

この三叉路を左に折れると弥五兵衛坂という緩やかな坂にさしかかり、鵯島（ひよどりじま）から八尾に向かう道になっていた。

旧北陸街道は、右へ曲がって50メートル程進む。また突き当たりになっていて左角に角清（かどせい）という名の衣服および雑貨の店があって、明治時代まで通行客に湯茶の接待をしていた。

ここから舟橋今町となり旧北陸街道は、現神通川の右岸堤防に当たるが西へ真直ぐ五福新町へと続いていた。

現在の神通川の右岸から数十メートルのところに婦負郡第一小学校が南向きに建っていた。

愛宕小学校の創立期の学校で、明治６年（1873）２月15日に開校され、富山県で第２番目に誕生した学校といわれている。

この小学校は富山藩士であった森田家が経営する寺子屋を借用して創設され、教育内容は、寺子屋時代の引き続きで、読み、習字、算術が中心であった。

わずか10か月で小学校は現在の愛宕神社の境内地に新築され履新（りしん）小学校と名付けられた。

この学校の卒業生の中に文化勲章を受賞され、富山市の名誉市民第一号となられた国文学者山田孝雄博士がおられる。

先生のお墓は、呉羽山桜谷の長慶寺の五百羅漢の横にあり富山市街を見下ろすように建っている。

また神通川の馳越工事の結果、川底になった村がある。旧北陸街道沿いの船橋今町、御福新町、畠中村の大半で、ここに住んでいた人たちは神通町、新富町、富山駅前の方へ移り住むことになった。このようにして出来上がった町は移転地と呼ばれていた。

舟橋今町の街道筋

（5）五福での旧北陸街道

明治終り頃の旧北陸街道松並木　（五福地内）（『富山縣寫眞帖』明治 42 年）
昭和 10 年代まで残っていた松並木。富山縣寫眞帖では、「安養坊道」と説明されている。

神通川左岸の旧北陸街道

呉服山長光寺の御堂

神通川左岸での旧北陸街道は、上水道管が架かっている地点（神通大橋の約 100 メートル上流）から旧射水線の跡地（現在市道となっている）を渡って西へ向かう。

街道筋は住宅地になっているが街道の面影をとどめており、やがて南側に長光寺がある。

長光寺は、山号を「呉服山」といい真宗大谷派の寺である。その由来は、およそ 900 余年前呉羽山の八幡社付近に真言宗の「延命安寧坊」を建立したのがはじまりとされている。また宗派替えの時期についてはさだかでないが、寺宝として教如上人（東本願寺 12 世上人）の手紙が保存されていることなどから、教如上人が存命中の慶長 19 年（1614）までに行われたのではないかと言われている。また境内には佐々成政の愛妾早百合が祀られていると伝えられる墓がある。

長光寺を後にした街道は、西へ 100 メートルほど進むと左手、県道富山高岡線の市電停留場、富山大学前から来る道路とのT字路に出る。この交差点を左に少し行くと右手に熊野神社がある。

熊野神社には、越中勧進相撲の開祖といわれる「鬼頭崎岩右衛門」の石碑がある。

この付近一帯は、富山大学五福キャンパスがあることから学生街として栄え、アパートやマンションなどが多く、新旧入り混じった住宅地である。

街道は、さらに西へ進むと牛ヶ首用水から分水する用水の村西橋を渡って県道西富山停車場線に出る。辻に地蔵堂があり、石地蔵３体が安置され、その内の中央１体に「慶応四辰年」（1868）と刻まれている。

旧北陸街道は、県道西富山停車場線を横断して西へ進むと右側の道端に石碑・石仏群がある。

付近の道ばたに散在していたものを一個所に集めたものと思われ石仏３体、常夜燈の残欠１基、「読誦三千部法華塔」１基などがある。

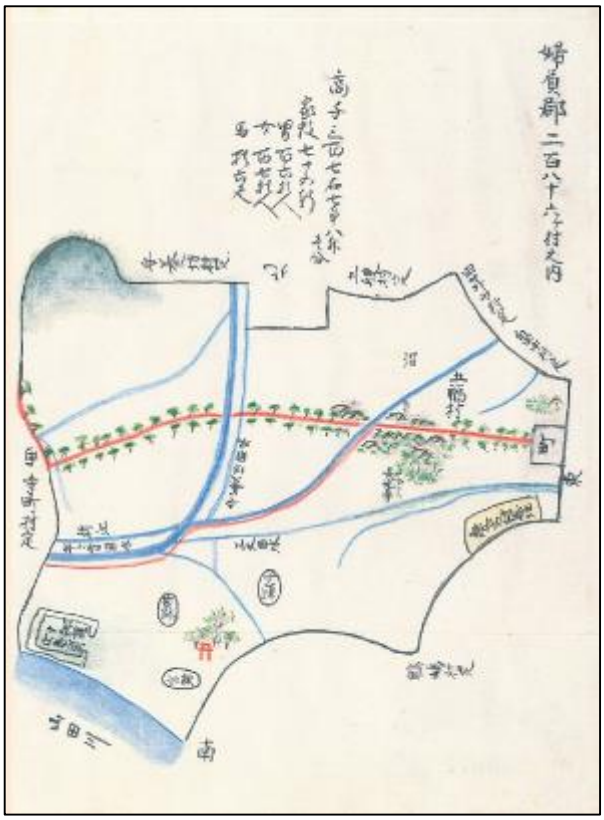
また地元関係者が立てた「皇恩軒跡地」と記した白い標柱がある。

「皇恩軒」は、明治 11 年明治天皇が北陸巡幸のさい呉羽山の峠を五福新道で越えられるにあたり御小休され、輿に乗り替えられたところである。

尼寺だった皇恩軒の跡地を地元では、この石碑など集めた三叉路の場所と表示している。また、今まで郷土史などの中で「皇息軒」と記述されていたが正しくは「皇恩軒」である。旧北陸街道は、西部中学校の北西角で南西に折れ南に牛ヶ首用水へ向っていたが、現在、そのルートを通る事が出来ない。五福新道が呉羽山を越えて中茶屋に向かうようになったためと思われる。旧北陸街道は、江戸時代の絵図にも直線的に描かれ、道の両側に松並木が描かれている。昭和 10 年代までその松並木の一部が残っており街道に風情を添えていたが、戦中戦後伐採されて今は一本も残っていない。

街道沿いに集められた石碑群（「皇恩軒跡地」の標識あり）

峠茶屋へ向かう旧北陸街道



婦負郡五福村・安養坊村・吉作村・住吉村・北代村・小竹村絵図（部分）　（富山県立図書館蔵）
江戸時代（天保年間）の絵図、町屋から西へ進む旧北陸街道沿いに松並木が植えられ、長光寺も描かれている。

途切れた旧北陸街道へ出るため五福新道を西へ進み牛ケ首用水まで行く。五福新道に架かる橋の東側の下流に義太夫師「大坂六代目　竹本内匠太夫」の明治 14 年の碑がある。

旧北陸街道へは橋を渡ってすぐ左に折れ、川沿いに暫く行くと道が右に曲がり、やがて県道富山高岡線（旧国道８号）と交叉する。

旧北陸街道は、県道富山高岡線を斜めに渡り、平成 27 年 4 月の開校をめざし工事が進められている新五福小学校（旧市民病院五福分院跡地で、平成 20 年五福地区センター、公民館、児童館が建てられる）と自動車学校の北側を通って右に折れＪＲ高山線を超えて峠へ向かう。

こあたりは、地元で藤子と呼ばれ上の絵図でも、曲りかたが直角的であるが、江戸時代末期に街道筋が大規模な桃林となったため付け替えられたという。また前述した越中勧進相撲の開祖「鬼頭崎岩右衛門」の石碑は、この街道筋の飯田家敷地に建っていたものである。

やがて旧北陸街道は、呉羽丘陵である城山公園に近づくが、境界の山裾にＪＲ高山線と神通川の支流である馬渡川（まわたりがわ）が通っている。数年前までは、橋と踏切があったが、現在は通行止めとなっている。線路を越えるには、①西富山駅まで迂回し駅の傍の踏切を渡る。②県道富山高岡線から城山公園に入って戻ると言う二つの方法がある。

ＪＲ高山線を迂回して城山公園内の旧北陸街道に戻ると、装いを新たにした足立塚が建っている。

足立塚は、峠茶屋周辺で唯一元の場所に残っていた石碑で、富山藩の見日流（けんじつりゅう）柔術の元祖足立正保の天保 13 年(1842)、門弟によって建立された顕彰碑である。正保は、天和年間(1681～1683)に飛州高山から富山へ来て見日流の柔術を教え多くの門弟を育てた。元禄６年(1693)門弟の一人、渡邊繁正に、その秘伝を授け、そして秘伝を受けた渡邊繁正は、富山藩の柔術を指導した。

峠へ向かう旧北陸街道は、城山公園内で姿を変えたが、呉羽ハイツなど山頂へ向かう自動車道路下のトンネルをくぐり抜けると階段状の坂道となる。もとの街道は、足立塚あたりから南側に折れて峠に向かう急な山道であったため大坂と呼ばれていたが寛政 10 年（1798）頃になだらかな道に付け替えられた。

階段状の坂道を登りきるとＴ字路に当たり道案内の標識が立ち「右、七面堂・常夜燈、左、稲荷神社・白鳥城跡」と表示されている。旧北陸街道は左手へ進み、登り切ったところが呉羽丘陵の峠である。

城山公園での街道筋に立つ足立塚

（６）峠から三茶屋での旧北陸街道

峠に立つ

峠に出た旧北陸街道

峠に出た旧北陸街道は、視界が広がり辻を思わせ、わきに地蔵堂が建っている。峠は、海抜 50 メートル程度で、西方から峠まで家が両側に建ち並んでいる。

北側の一番峠に近い家の屋号が「アメヤ」、その一軒おいて隣が「マンジュウヤ」と昔から呼ばれている。この峠が旧北陸街道の要所として栄えていた頃は、両側に休み茶屋があって繁盛していたものであろう。しかし、明治 11 年に明治天皇巡幸のための「五福新道」が出来てからは、峠茶屋は人の往来が遠ざかり、次第に静かな街道筋へと変わった。

峠から山道を尾根つたいに行くと稲荷社の境内へ出る。このあたりが明神山といわれ明治初頭まで七面宮などが建っていた。しかし他の寺院なども含め神仏分離で破却された。

山道は、城山公園の園路として整備されており、稲荷社の横を抜けて「木俣修の歌碑」がある芝生広場を通り城山（白鳥城跡）へ向かう。

旧北陸街道は、昔の面影を残した急な坂道を西へ下っていく。少し下がった地点に村境の地蔵堂があり、ここが峠茶屋と中茶屋の境界になっている。また北東から斜めに来る五福新道と交叉する三叉路ともなっている。

三茶屋の由来

「茶屋」の名がつく集落は、峠茶屋・中茶屋・追分茶屋で、順に西へ向かってつながっており総称として「三茶屋」と言われてきた。

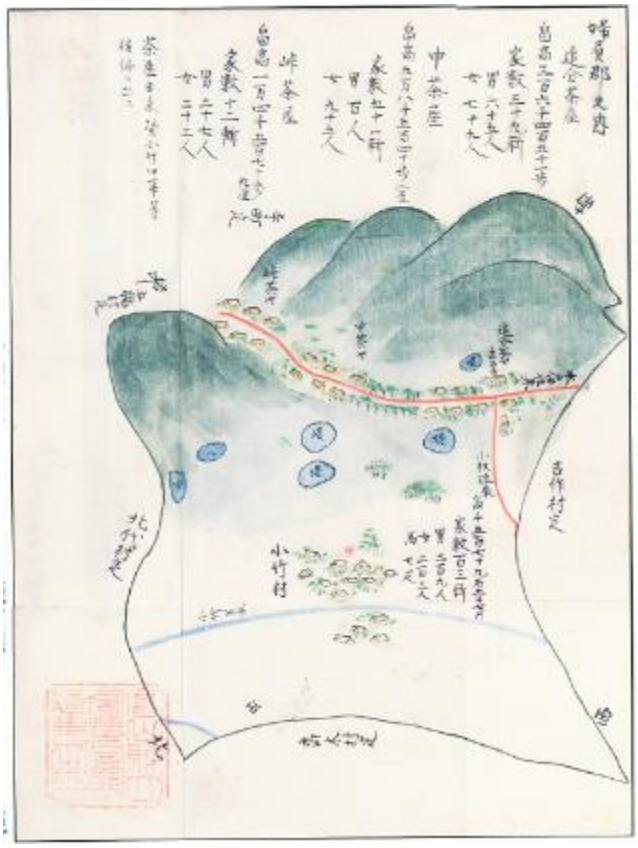
三茶屋の中で最も古いのが峠茶屋で、寛永 10 年(1633)清左衛門が１町四方の山を拝領し家立てを許されたのがはじめである。(「内山家文書」)

追分茶屋は、承応元年(1652)久右衛門・伝吉・彦兵衛・忠右衛門の４人に家立てを許されたのが初めである。

中茶屋は、追分茶屋の８年後、万治３年(1660)に家立てを許された。

村名は、峠茶屋が呉羽丘陵の峠に位置していた地形に由来し、追分茶屋は道の分岐点、つまり街道が分かれる「追分」に位置したことから生まれた。

これらに対し中茶屋は、両者の中間にあり、中間茶屋とも言われたという。



婦負郡五福村・安養坊村・吉作村・住吉村・北代村・小竹村絵図（部分）　（富山県立図書館蔵）

中茶屋を行く

旧北陸街道は、峠茶屋と中茶屋の村境地蔵堂の前から西に向かって続く。

地蔵堂前からほどなく左手に茶屋町公民館がある。このあたりが中茶屋の中心で、かつて野菜作りが盛んなとき集荷場として賑わっていたところである。そこから少し行くと右手斜めに進む道があり、呉羽小学校前を経て高木、大塚、下村方面へ行く重要な道路であった。道の脇に地蔵があったが、交通の支障になったため、現在は少し西へ移動し建てられている。

地蔵堂に続く広い敷地が島崎家である。

明治 11 年（1878）明治天皇巡幸の折り、五福の皇恩軒から呉羽山を越えられて休憩されたのが、この島崎家である。

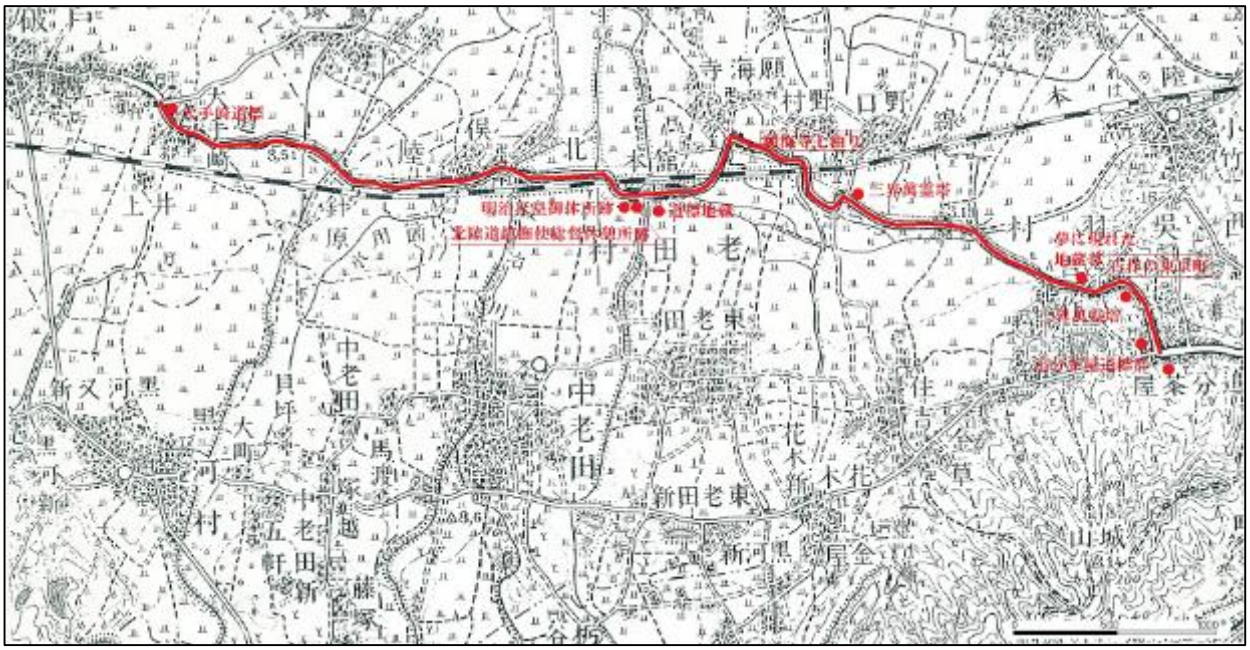
以前の島崎家は道路に面した大きな茅葺き屋根の家であったが、今は敷地内の後ろで建て替えられている。道路に面して「明治天皇中茶屋御小休所」の石碑と案内板が立っている。

天皇巡幸を記念して昭和 10 年に当時の文部省が立てたが、石碑と案内板が風化したため、平成14年に地元住民がもとの形に準じて建て替えたものである。

旧北陸街道は、さらに西へ進み、追分茶屋に向かうが街道沿いに家の途切れたところが続いていた。この間、街道松が植えられ、ずいぶん風情があったと伝えられている。上に掲げた『三茶屋絵図』やその他の江戸時代の絵図にも、両側にぎっしり松並木が描かれている。

「明治天皇中茶屋御小休所」の石碑と案内板

（7）街道の分岐点・追分茶屋



富山往還道（赤入り）旧北陸街道の様子を残す明治 43 年測量の地形図

この図は、江戸期から明治 43 年頃までの北陸街道の様子を表している。車馬通行のための拡幅や鉄道の敷設、河川改修などにより多少の変更はあったが、「願海寺の七曲り」などの特色ある道路形態が残されている。

追分茶屋の分岐点　四つの道標

中茶屋を出ると旧北陸街道は、県道富山戸出小矢部線と合流する。合流した県道は、拡幅されて西に進み、やがて追分茶屋の神明社前へ出て三叉路に出会う。

この三叉路が追分であって右方面（北）は、小杉、高岡へ向かう「富山往還道」となり、直進方面（西）は、水戸田、石動を経て金沢へ向かう「巡見上使道」となる。

この追分には、昔から道しるべが立っており現在、平成 24 年新たに整備した１か所を含め、４か所が残っている。長い歴史のなかで数や場所が変化し、また堂の中に入って表示先が見られないのもある。

一つ目の道標地蔵

一つ目は、

三叉路の左手（山側）地蔵堂の道標地蔵である。なかに大２体、小２体の石地蔵が安置されているが右の大きい地蔵像が道標地蔵である。光背に享保２年（1717）、台座裏に「右ハ金沢道、左ハ三と田道」と刻まれている。これは見ること困難だが現地で確認している。

一つ目の道標地蔵台座の文字

二つ目の神明社前道標

二つ目は、

神明社前の鳥居脇に据えられている。元は三叉路の縁にあったが道路工事で移設された。その道標には東側面に「立山道」、南側面に「小杉道」、西側面に「城端水戸田道」と刻まれている。

三つ目は、

自然石道標で個人宅の敷地内に入っており自由に見ることはできない。

石には「西ミとたみち、向かがみち、東とやまみち」と書かれていることがわかっている。

三つ目の自然石

新たに立った四つ目

長い間神明社の鳥居脇に仮置きされていた道標は、平成 24 年 10 月、県道富山戸出小矢部線の高源寺前から神明社に上がる細い道の入り口に建った。この道標は、立っている場所から西へ少し行った県道富山戸出小矢部線（巡見上使道）の脇道から道路工事が行われたとき出てきた。下端が欠損して分からない行先もあるが四つの面に「左　富山」右回りに「右　京　金□（金澤か）」「左　井波」「中嶋六兵衛□□□」と刻まれている。

四つ目の新たに立った道標

（8）吉作の東京町

東京町と呼ばれる街道沿い

旧北陸街道は、道幅が狭くなって坂をゆるやかに曲りながらつづく。左右は、民家と竹やぶ・柿畑などが断続して続くが、なかでも昔の商家と思われる家の軒瓦や鬼瓦に七福神などをあしらった飾り瓦があり独得のたたずまいを残している。

このあたり一帯は、江戸時代、大変賑わった場所で両側に、お茶屋、酒屋、そば屋、桶屋、風呂屋、牛鍋屋、豆腐屋、床屋、瓦屋、油屋、よろず屋等の店が建ち並び活気あふれる町並みであった。賑やかな町を表現する言葉として、近代に入ってから「東京町」という言葉が使われ、現在もこの地をそのように呼ぶ人がいる。

また道ばたには、石仏像が刻まれた「三界萬霊」の塔があり「天保二卯年三月□日」と読める。

この碑は、以前追分茶屋寄りに立っていたが平成 17 年にこの地に移されてきた。

さらに西のはずれに風化した地蔵が祀られている。以前、近くの杉原の川（現小竹用水）にお地蔵様が流されてきて埋まっているという夢を見た人がいた。すぐに川にかけつけ川底からお地蔵様を救い出し家の横に地蔵堂を建てまつられた。

この区間は、街道の面影を色濃く残す静かな古道である。やがて道は、「あいの風鉄道」呉羽駅へ向かう県道吉作小竹線を横切って梨畑に入る。

恵比寿様の飾り瓦

大黒様の飾り瓦

商家の飾り瓦

道端にひっそり佇む供養塔「三界萬霊」

夢に現れた地蔵尊

（9）富山藩境・野口

村外れにある三界萬霊の供養塔

旧北陸街道は、梨畑の中を西に進むとやがて水路に当たる。この用水が牛ケ首用水の分水、小竹用水で『往来絵図』にも記載されている。

また用水にかかる橋を、同絵図、また『三州地理志稿』でも、「杉原橋」と記している。

この地点に一本松があったことが、江戸時代のいくつもの絵図に描かれている、今はない。

道は、新興住宅の中を通って医療法人呉陽病院の北側の水田地帯に出る。これから先は、圃場整備のため旧北陸街道が部分的に寸断されている。

野口の村はずれの一角に古い地蔵尊（高さ 1.7 メートル）がブロック塀に囲まれて立っている。

天保４年(1833)3 月の造りで台石に「三界萬霊」と刻まれている。

地元の人は、この地蔵尊がある道を「往還」と言っており、昔からこの道筋にあって旅人の道中の安全と道標の役目をもっていたものと思われる。

街道は、圃場整備により形を変えて直線的に西へ進み県道新湊平岡線を横断して「あいの風鉄道」へ向かう。野町の踏切は、昭和初期まで官舎があり、番人が遮断機を操作していた。

今は踏切の跡もなく、線路の両側に防護柵が設けられ人々の通行を遮断している。

旧北陸街道は、この遮断された踏切りで北へ渡るが水田を隔てて右手に野町集落がのぞまれ大きな屋敷も見えている。

この付近がかっての射水・婦負郡境で同時に加賀・富山藩境でもあった。

(10) 願海寺七曲りの名残り

願海寺集落の中の古道「願海寺の七曲り」の面影

旧北陸街道は、圃場整備された中を西へ願海寺に向かうが、所々で名高い「願海寺の七曲り」古道の面影を見せる。

石動の俳人、宇白が元禄 13 年(1700)撰の『草庵集』に「願海寺の七まがりといふ処にて」と題して「よけて行く稲つけ馬や沼田道」、また加賀の句空も「秋の日にまがりかかるや願海寺」の句を収めている。

集落の中の圃場整備された道は、再びあいの風鉄道の舘本踏切を南に渡るが、手前に「往還道路の願海寺の七曲り」（呉羽山観光協会）の説明板が立っている。

地元ではここらを「七軒町」と言い「往来」とも言っている。

道は、西に折れて県道東老田白石線へ出る。

県道東老田白石線を右手の踏切渡って左手の奥、水田の中に「願海寺城址」の石碑が立っている。

戦国の武将で、織田信長に謀殺された寺崎民部左衛門の城の跡である。湿地の真っ只中にあって沼田を要害とした平城であった。

(11) 願海寺、茶屋の史跡数々

道標地蔵

旧北陸街道は、県道東老田白石線を渡って通称「茶屋」と呼ぶ集落に入る。

今も道の両側に十数軒の民家が立ち並び、往年の街道の面影を残している。左手に滝脇家があり入口に地蔵堂がある。堂内に安置された石地蔵の両側に「右　小杉道」「左　とやまちか道」と彫られている。

この石地蔵はもと邸内に祀られていたが、お告げによって外に堂を建てたものとされる。

道標を兼ねた地蔵で刻まれた案内から見ると元の場所は現位置よりもっと東寄り館本集落の東端であったものと思われる。

当時茶屋には、放生津方面へ流れる砂川が横断しており舟着場があった。船が荷を運びこんで、この地蔵前で売買されたと言う。

旧北陸街道筋に安置された道標地蔵

明治初期の出来事跡

明治天皇の御小休所跡の石碑

瀧脇家の隣が舟竹家で、その門には「明治元年三月勅使高倉三位永祐御泊遺跡」「明治七年三月順徳天皇神霊御還遷ニ付御小休遺跡」と読める表札が掲げられ、注連縄がかかっている。

慶応 4 年(1868)1 月、鳥羽伏見の戦いで勝利した新政府軍は、徳川慶喜追討令を発し北陸各地の藩主 21 人に勅書に対する請書を差し出すことを求めた。北陸道鎮撫使総督の高倉永祐(ながさち)は、1 月 20 日京都を出発し、3 月 10 日に舟竹家に着いている。総勢 1500 名に及ぶ大部隊であった。

高倉勅使が入られた門に掲げられている表札

舟竹家には、今も高倉勅使が休憩された座敷が残されている。

次の家が佐崎家で「明治天皇願海寺御小休所」の石碑及び説明板が立っている。瓦葺の黒い堅牢な木門が明治 11 年当時のまま立ち、庭も巡幸当時のまま保存されている。

また御小休された「御座所」もそのまま保存されており明治初頭の史情が濃厚にただよう一角である。

また江戸時代には、両家の間に砂川が流れており射水郡放生津潟の加賀藩米蔵へ年貢米を運んだ舟着き場もあり「茶屋」と呼ばれた地域である。

腰掛け茶屋、宿屋、店屋などがあり大変賑わったところであるが昭和 52 年 (1977) 排水路工事で川が埋められ舟場も消滅し面影を無くした。

旧街道は、集落を抜け西へ進むとあいの風鉄道に当たる。ここが土福踏切で昭和 10 年頃まで小さな官舎があり一人の番人が遮断機を操作していた。

今は小さな踏切と成っているが、これを渡って北側に出る。

やがて新堀川の土福橋を渡ると西二俣の集落に入る。江戸時代の絵図では西二俣の集落のそばを

鍛冶川が流れており、橋に願海寺二俣境橋と書かれている。現在、鍛冶川はあいの風鉄道の南側で砂川などと合流して新堀川となり、圃場整備によって街道の面影を無くしている。

(12) 西二俣の茶屋

そしてやがて射水市へ旧北陸街道は、集落にかかると道筋が明確である。地元では「二俣の茶屋」と呼び10軒余りの民家がある。

ここにも鍛冶川に舟着き場があって天明年代（1781～88）の頃、12艘の舟が発着していたと言われ、中老田の加茂社に「三十石船」の絵馬が奉納されている。

旧街道は、西へ進み県道富山小杉線と交叉する。『往来絵図』にも「中老田村道」と記載され、北は下村、南は中老田へ向かう道である。

交差点には旧北陸街道を挟んで日枝社と長福寺とがある。長福寺は浄土真宗本願寺派で山号を白鳥山といい、明応6年(1497)順正が蓮如の弟子となって開いた寺と伝え、境内に「蓮如上人旧跡」の碑が建っている。

西二俣はもと二俣村と称したが、昭和40年富山市編入し、同名の他集落と区別するため西二俣と改称した。

旧北陸街道は、集落を抜け北陸本線に沿って西へ進むと道ばたに地蔵堂のほか「二本松九平の碑」、「日露戦役戦死者碑」などが建つ。

やがて射水市に入るが『往来絵図』によると、このあたりに「道番（みちのばん）」が記載されている。

集められた石碑

(13) 加賀往還道との交差点・大手崎

加賀往還道へ向かう手崎の街道筋

大手崎

射水市に入るとあいの風鉄道沿いが工場地帯となって昔の街道筋が分からなくなっている。

しかし旧街道は、西へ進み県道富山高岡線（旧国道８号）を超えて手崎の集落に入り、約 300 メートル歩くと大手崎の辻に出る。この間は、道幅も狭く両側に旧家や屋敷林を望み街道の面影を色濃く残すところである。

辻には、加茂社があり戦国時代から江戸時代にかけて市が立ち大変繁盛した所である。

この辻に道標が二基並び立つ。一基は四角柱状で風化磨滅して「□□□菩薩」「□□みち」「□□みち」とかすかに読める程度であるが、いま一基は自然石で、「右　とやま」「左　いはせ」と明確に読むことができる。

道標のとおり北は、下村を経て東岩瀬に至り、西は小杉から高岡など経て加賀に向かう「加賀往還道」である。天保 10 年(1839)の「射水、婦負、新川三郡御廻往来絵図」でも大手崎が加賀往還道と富山往還道の分岐点として描かれている。

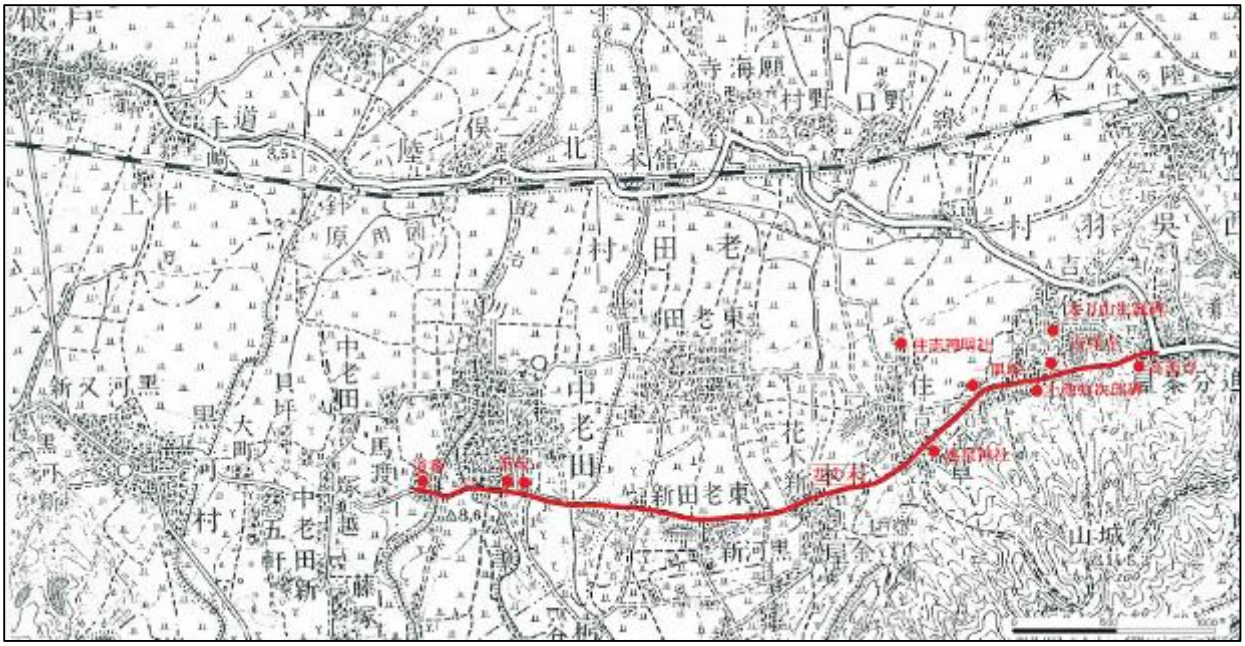
加賀往還道との分かれ道の道標

加賀往還道

加賀往還道は、加賀藩主前田家が参勤交代に利用した街道で、支配拠点の変遷によってルートが変化した。ここ小杉の町を通る加賀往還道は、寛文２年（1662）、加賀藩が下村、小杉新などを新たな宿駅に指定して富山町を通らない参勤交代路を整備したことによる。小杉の市街地を抜けて高岡へと向かうが、ここでも旧街道を利用した『街中アート』のイベントが開催されている。

加賀往還道との交差点、大手崎

５．旧北陸街道（巡見上使道）を歩く



旧北陸街道（巡見上使道）の様子を残す明治 43 年測量の地形図

（１）巡見上使道の概要

巡見上使道（巡見使街道）とは、江戸幕府が寛永 10 年（1633）第３代将軍家光の時代、全国を６ブロツクに分け、３人１組で国廻りをさせ道路状況や周辺村落の治安等について視察した時に使われた街道で富山には複数の指定路があった。

なかでも越後から越中新川郡境村（現朝日町）に入り、泊町、横山町（現入善町）、入膳町、三日市（現黒部市）、魚津町、滑川町、東水橋（現富山市）、西水橋、町新庄を経由して富山町に入り、神通川の船橋を渡って左岸の婦負郡愛宕村から五福古城道、花木新、黒河村、三戸田（現射水市水戸田）を経て今石動町（現小矢部市）を通り倶利伽羅峠を越えて加賀へ入る街道が代表的な北陸街道でもあり巡見上使道でもあった。

その後、加賀藩の参勤交代道として富山町を通らない街道が整備されたことから、水橋から富山町を通り追分茶屋を経て西方面の三戸田、戸出、今石動町（現小矢部市）までの間が巡見上使道としての機能のみとなり、地元では、これを巡見上使道と呼ぶようになった。

ここでは、そのうち追分茶屋から中老田までの約 4.2 キロメートルの巡見上使道を紹介する。

巡見上使道は、県道富山戸出小矢部線の追分茶屋で富山往還道（富山道）と分かれて西へ進む。

左手の高台に高源寺があり、その前を少し行くと吉作へ入る。

吉作は梨の一大産地で沿道に梨の選果場や梨直販店の看板が出る家々が並び、広がる梨畑も見ることが出来る。

街道筋は、面影がないが加賀藩が造った一里塚の跡地や富山藩にゆかりある速星神社を経て花の木へ進み、やがて加賀藩との藩境、東老田に出る。

さらに巡見上使道は、東老田で県道を離れて中老田の集落に入る。沿道に色々の石碑が立ち面影を残しているが、やがて鍛冶川を超えて射水市黒河に入る。

このような巡見上使道を紹介する。

追分茶屋の分岐点
（真っ直ぐ西は巡見上使道、右手は旧北陸街道）

（2）追分茶屋から吉作へ

お茶の役所・高源寺

追分茶屋で旧北陸街道（富山往還道）と別れ西へ進むと直ぐ左手の高台に高源寺があり参道の脇に地蔵堂が建っている。

高源寺は、曹洞宗の寺で富山藩時代に茶の役所である「茶会所」が置かれ、また明治に入ってから小学校も置かれたなど地域と深いかかわりを持つ寺である。

巡見上使道は、さらに西へ緩く登ってまた下る。右手に住宅団地が見えてくるが以前に大きなため池（赤嶋堤）があったところである。街道沿いには多くの灌漑用の溜池があって呉羽丘陵からの雨水を受けていた。現在大部分が埋められ付近で残っている溜池は、吉作の柿ノ木原堤、北陸電力呉羽試験農場下の花ノ木堤などがある。

高源寺の参道と脇に安置された地蔵堂

戦国の山城・白鳥城址

追分茶屋から吉作交差点までの約 700 メートルの区間は、標高 20～10 メートルの起伏が続き、左手に呉羽丘陵の山頂（城山、145 メートル）が見え隠れをする。なかでも一番高い山が中世期に築かれた白鳥城跡のある城山で越中平野の東西を見渡せる軍事上の要衝であった。

戦国時代、羽柴秀吉が越中平定（佐々成政討伐）の際、本陣を設けたことでよく知られている。他に、源義仲（木曽義仲）の部将今井四郎兼平が御服山に陣をしたとか、また神保長職が天文元年（1532）上杉謙信の越中進攻に備えてここに築城したことなどが伝えられ慶長４年（1599）頃まで存続していたという。

昭和 51～57 年にかけて、富山市教育委員会が城跡を発掘調査して、弥生時代末期・古墳時代初頭の土器、住居跡（竪穴遺構）などを検出している。その結果県内初の「高地性集落」の存在を確認している。

最高峰・城山

「富山国体」の開催（昭和３３年）に向けＮＨＫのＴＶ塔が建設された。

その後テレビの普及により民放ＴＶ塔が建ち、また余暇時間の利用促進から勤労者の福祉施設である「呉羽ハイツ」も進出した。

（3）梨の生産地・吉作

曹洞宗円通山吉祥寺

巡見上使道筋に建つ吉祥寺の裏門

巡見上使道は、再び緩い上り坂となり右手に曹洞宗円通山吉祥寺の裏門が見えてくる。

吉祥寺は、天授５年（1379）字矢野（呉羽中学校の付近）の地に大徹禅師十哲の一人、越叟冷潤が開山した越叟寺が始まりで、慶長３年頃、現在地に移転した。

寺には、「雨乞い信仰と蛇池」と「秋葉三尺大権現の火祭り」の話が残っている。三世越山本宗の時に田畑を荒らしていた大蛇退治のため読経祈祷を行った。それ以降作物が良くつくられるようになったと言う。これが地名にかかわり、今でも寺宝蛇骨を住民の雨乞い信仰として奉信され蛇池も本堂裏に残されている。また富山藩主が小僧に化身した秋葉大権現に相撲で負け、帰依して富山藩の家紋である梅鉢の紋と土地を与えた。

このことから地元では、秋葉大権現に対する信仰が篤く、毎年２月 28 日を秋葉籌火祭りの日として祈祷法要が厳粛に営まれている。門前に街道沿いの石地蔵がお堂の中にまつられ、また裏門は、透かし彫りの夫婦龍が掲げられている。

門は、もと加賀の豪商木谷（屋号・木屋）藤右衛門の大庭の門であったが、加賀藩祖前田利家の菩提寺、宝円寺の三洞庵に移され使用されていたものを昭和 60 年代にこの地へ移転してきたものである。

太刀山生誕の地

坂道を下ると「あいの風鉄道」呉羽駅からの県道吉作小竹線との交差点に出る。

この交差点を北へ呉羽駅に向かって 200 メートルほど入ると右手に「太刀山生誕の地」の石碑が立つ生家がある。

第 22 代横綱太刀山峰右衛門は、明治９年、老本治助の二男として生まれ、名が弥次郎であった。

弥次郎は、明治 31 年、巡業に来た友綱親方に相撲界入りを勧められたが固く断り続けた。

しかし板垣退助などの政界人を通して無理やりに入門させられ 23 歳の遅いスタートであった。

明治 38 年５月場所で関脇、明治 44 年１月場所で全勝優勝し、見事 22 代目の横綱になった。

その後大正４年まで８回の優勝を重ね、さらに大正５年夏場所８日目まで 56 連勝をするなど天下無敵を誇った。得意技で有名なのは、「45 日」（１突き半）の異名をとった突張りであった。

大正７年の勇退まで、相撲界の無敵の王者として長く慕われ、その後若手の養成に努めたが昭和 16 年、64 歳にしてこの世を去った。

呉羽小学校にある「太刀山相撲道場」は、遺族からの寄贈によるもので、学校でも相撲体操を取入れ、さらに課外活動で相撲を普及するなど体育学習に力を入れている。

呉羽梨生みの親「土池弥次郎」

吉作の交差点の左手に、呉羽梨生みの親「土池弥次郎」の頌徳碑が立っている。

土池弥次郎は、日本梨の導入に専念したのが明治 30 年～40 年頃である。特に明治 40 年、東京興農園より「太平」と言う青梨品種の苗木を 20 本買ってきて植えた。4 年ほどで実をつけたが美味しくなく、病害虫にも弱い品種であった。その後、「長十郎」という赤梨を取り寄せ試作したところ、大変味もよく、多収穫で将来性があると判断した。そして村人にも勧め指導したところ栽培面積が 10 年後（大正５～６年）に 30 町歩となった。その後、病害虫の発生により全滅する危機もあったが、新農薬と散布器具の導入などにより梨作りが本格化した。土池弥次郎は、関西方面への販路の拡大にも力を入れ、さらに出荷組合の育成にも努めた。これらの業績により昭和 12 年６月有志により頌徳碑が建立された。

頌徳碑の隣に「呉羽梨第一選果場」（昭和 43 年設立）と「梨会館」（多目的梨研究会館・昭和 55 年創立）があり一大産地の拠点となっている。

加賀藩時代に造った一里塚

また吉作の村はずれに加賀藩時代に造られた一里塚の跡があり呉羽山観光協会の案内板が立っている。

江戸幕府は、慶長９年（1604）東海道、東山道、北陸道の整備を命じた。日本橋を起点とし 1 里ごとに塚（５間四方）を作り、榎を植え目印にした。一里塚は、人夫や馬の借り賃計算のもとになり、また旅人のオアシスとなっていた。加賀藩も参勤交代路に一里塚を整備し、2000 名の行列が江戸まで 119 里(470Km)を 12 日間で着いたと言う。

富山藩の誕生後は、高岡町から小杉手崎、下村を通って水橋へ向かう街道を参勤交代路とした。

太刀山峰右衛門、出生の石碑

土池弥次郎の頌徳碑

一里塚の跡に建つ案内板

（4）鍛冶の神、速星神社と神話が残る住吉社

金草、西金屋と言う地名

巡見上使道は、左手に城山を眺め、やがて北陸電力の研修場と試験農場が目に入ってくる。

周囲には、呉羽青少年自然の家・ガラス造形研究所・ガラス工房・富山ファミリーパークなどがあり、新しい文化施設に出合うことができる。

やがて巡見上使道の左手に小高い山があり速星神社と高西寺が見えてくる。ここは、もと古沢村金草と呼ばれ、西隣に西金屋（古沢）、東隣に金屋（五福）など「カネ」に係る地名が多い。

これは、北代遺跡や北押川遺跡から「たたら」（製錬炉跡）や鉄滓が確認されたこと。また古沢Ａ遺跡の炭焼き窯跡（燃料）の確認など８世紀に製鉄が行われていたところで、畑地から焼けただれたカナクソ（溶岩のような鉄滓で排出された不純物）が多く出てくることなどから地名に残ったのである。

速星神社の由来

このような所にある「速星神社」は、製鉄と深いかかわりを持つ神社と言われ、現在、勧請祭文と鉄砲（銃身のみ）が残されており、祭文から勧請には朝廷と京都の吉田神社が関与していることがわかる。

速星神社は、宝永元年(1704)7 月、富山藩２代藩主前田正甫公の代に呉羽丘陵西側の新田開発の成功を願い、勧請されたものである。

鷹狩制の廃止(元禄 6 年(1693))以降に開墾された場所や以前に開墾された新開地は、溜池の灌漑では水不足をきたし、ほとんどが畑地のままであった。そのような畑地を田地に作り直すことを畑直新開というが、その水不足の解消として、山田川から取水する古沢用水が開鑿された。そしてできたのが古沢村(上古沢と金草)である。

神社の旧地(鎮座)は金草御鳥場(現、北陸電力(株)研修所の南東方)の山の上にあり、「金草の宮」と呼ばれていた。管理は藩士(餌指役)の２人、維持(経費負担)は上古沢(代表、仁右衛門)と金草(代表、理右衛門)であった。

勧請 100 年で速星神社の役目が終ったとみられ文化 2 年(1805)2 月、９代藩主前田利幹公の代にロシアの南下に対する軍事訓練の御鷹打場を守るため、富山城下町の下金屋鋳物師へ下げ渡された。銃はこの頃のものであり、製造をしていた下金屋の人たちにより奉納されたものである。

管理には下金屋の清右衛門が派遣され西金屋に住んでいた。その後、弘化 4 年(1847)、山の上では不便なため、神社は下の現在地へ移転した。

さらに明治元年(1868)、下金屋の人たちが維新の戦乱に巻き込まれ管理ができなくなり地元の金草へ贈与された。この事によって新田開発の守護神、速星神社が畑直新開をした金草村へ戻ってきたことになる。これと同時に、奉納された火縄銃もまた近くの有力者の家に贈与された。さらに近くにあった金草神明社(速星神社の転入に伴い転出していた)が合祀されたのである。

現在の本殿は、明治 12 年(1879)に友坂熊野神社の旧社殿(文政 12 年(1829)建)が移築されたもので、拝殿は平成 11 年(1999)に新しく建替えられた。

祭神は五十筒男命（いわつつおのみこと）であるが、富山藩社時代は新田開発のため「農耕の神」、富山町下金屋社時代は鷹狩りのため「鍛冶の神」、明治以降は金草の人たちの「よろずの神」となる。

巡見上使道の脇にある速星神社

住吉社の翁

住吉は、古くに牧村と言われていたが、住吉社に因み、村の名になったという。住吉社は古来、神尾池（現在なし）の縁にあったが明治 45 年に神明社へ合祀された。なお神明社は正徳元年(1711)に勧請され新池の縁にあったが明治の初め、現在地（字鷹沼）へ移転したものである。

その住吉社に次のような神話が残っている。

先の『肯搆泉達録』によると姉倉比賣神社に関する記述の中に住吉神社と老人の事が出てくる。「第 11 代、垂仁天皇の頃、越の国に阿彦と言う大変乱暴な者がいた。

垂仁天皇の 81 年の春、大若子命（おおわくこのみこと）に阿彦を討伐するよう標剣を与えられた。大若子命は、ただちに阿彦の征伐にかかるが苦戦したため、姉倉比賣神社の比賣から八搆布の白幡八流（八幡兵法）を教えてもらった。早速、八節の竹を求めたが得る事が出来ず、その時、白鬚の翁が八竿の竹を担いで来て大若子命に与え「われ住吉の翁なり」と告げ去った」と言う。もちろん大若子命は、阿彦を征伐することが出来、お礼に姉倉比賣神社を造り変えたという。この翁こそ住吉の命といわれる。

（5）二つの花木

花ノ木での巡見上使道　（花ノ木交差点）

花ノ木の交差点、左手に曲がると古沢、平岡を経て八尾へ通じる。

巡見上使道筋には、花木が富山市花木と富山市東老田（字花木）と東西にある。昔は、婦負郡と射水郡の郡境で「元和８年（1622）花木新村一村建許可状」（海内家文書）によると、この郡境付近に新村を立てることとなり、周辺の射水・婦負各村の協力を得て花木が開発されたものとみられる。

寛永 16 年（1639）以降は、富山藩領・加賀藩領に分かれている。 古代越中国の北陸道には、平安時代の「延喜式」によれば、坂本ー川人（かわと）ー亘理（わたり）ー白城（しらき）ー磐瀬（いわせ）ー水橋ー布勢（ふせ）ー佐味（さみ）の８駅が置かれていた。

８駅のうち白城駅の場所がはっきりしない部分もあり、射水市白石と富山市花木の２説がある。「白城」の白は自（鼻）（はな）の誤字から来ていると思われ「はなき」と呼ぶことが出来る。従って「白城は、富山市花木の地とみたい」と言う説である。（『富山史壇』第２巻 10 号）もしそうだとすれば、古代の道は、高岡伏木の駅から小杉・黒河・花木を通り、小竹の姉倉比売神社の北に出て岩瀬（磐瀬）駅に向ったと想像される。

（6）富山藩境と老田地区

東老田から中老田へ

花木の西隣りは加賀藩領の東老田で藩境にあたる。さらに西に進むと道端に小さな地蔵堂と草相撲力士の石碑３基が立ち並んでいる。

巡見上使道は、県道を離れて北へ進み、町境の砂川を渡ると中老田に入る。

この分岐点に「呉羽梨第二選果場」が建っている。昭和 54 年の建設だがそれ以前は、吉作の選果場（現呉羽梨第一選果場）に出荷し選果の労務を集中していた。

時代の進展に伴ない老田地区の栽培面積の増加、他地区の生産量の増加、吉作選果場処理能力の問題などから、中老田、東老田、古沢、池多、射水市黒河、同櫛田の生産者のため第二選果場が作られたが、平成 25 年に第一選果場に集約された。

東老田の街道筋に建つ石碑

多くの活動家が出た中老田

さらに巡見上使道は、県道富山小杉線の交差点に出るが手前南側に、馬頭観音碑・草相撲力士碑、そして北側梨畑の一角に、有名な筆塚が２基立っている。

１基は田中可成（たなかかなり）の碑である。彼は文政 11 年（1828）から弘化４年（1847）の 19 年間、初めて寺子屋を開設して子弟の教育に当たった。

他の１基は真野成次（まのなりつぎ）の碑である。彼は嘉永元年（1848）から明治元年（1868）の 20 年間、その指導に携わった。

当時の寺子屋は 10 歳～15 歳の男子が読み、書き、算盤を習得した。その子弟らが恩師の死後、使い古した筆を埋めて墓碑を建てた。

これが筆塚である。

また明治６年８月、中老田に菁莪（せいが）小学校（現富山市立老田小学校）が開校した。

その創立の提唱者は海内果（うみうちはたす）、寺子屋の出身者である。

菁莪とは「人材を育てる」という意味で寺子屋の教育目標であった。

田中可成の筆塚

真野成次の筆塚

射水市（黒河）との境

鍛冶川を渡る巡見上使道筋　（橋の向う西側が小字「道番」地域である）

巡見上使道を更に西へ進むと、庚申様と呼ばれる健康長寿を願う石仏堂がある。

ここを通り過ぎると左側に西南戦争、日露戦争戦役者の石碑が立っている。西南戦争の石碑は珍しい。

鍛冶川を渡ると道番（みちのばん）という小字がある地域に出る。寛文６年（1666）加賀藩が道番、長兵衛と間兵衛の２人を置いて往来する人々の安全を見守ったところである。

道番を過ぎると旧街道は、竹やぶの中を通り、ところどころに地蔵堂や石碑があり街道筋を感じさせる。

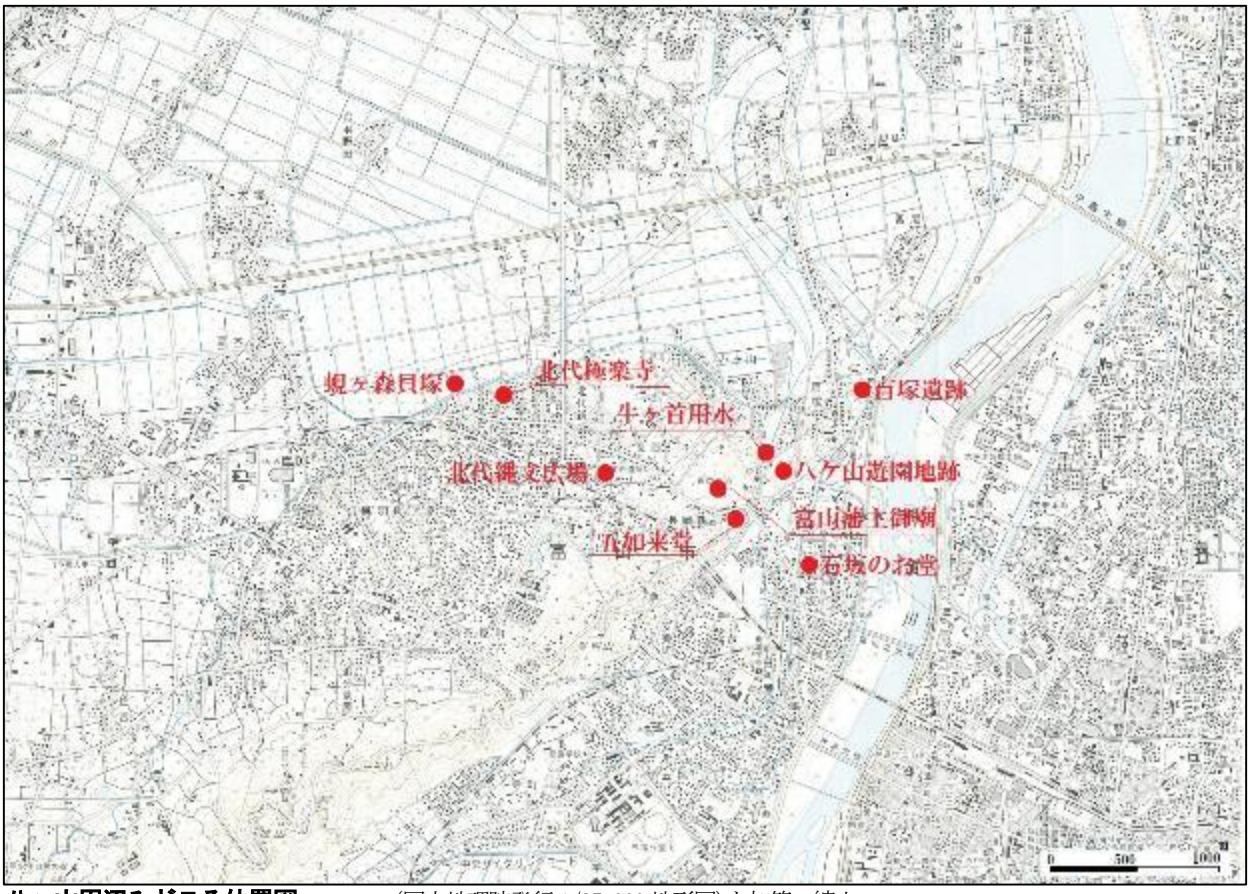
このあと巡見上使道は、射水市黒河へ向かい、西へ太閤山、水戸田、さらに戸出を経て石動、加賀へと続く。今も、主要地方道として小矢部市石動と富山市を結ぶ重要な道路で拡幅や新設の道路改良がなされており、やがて巡見上使道の記憶が無くなるのだろうか？

せめてこのガイドブックが追分茶屋から黒河まで街道の風情を後々までも伝えたいものである。

街道沿いの庚申様のお堂

集められた石碑

６．八ヶ山周辺の探訪



八ヶ山周辺みどころ位置図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

（1）八ケ山周辺のみどころ概要

八ケ山周辺は、呉羽丘陵の一番北側で海にも近く、神通川に接する河岸段丘上の地域である。

この事から富山藩初代藩主前田利次は、富山城を建てる候補地として百塚を考えていたが、財政的に困難となり実現しなかった。

利次の死後、二代藩主前田正甫は、父の夢を叶えようとして父の墓を造ったとされ、以降富山藩主の御廟となった。

また蜆ヶ森貝塚、北代縄文広場、百塚遺跡など縄文から古墳時代までの古墳、住居跡などもあり古くから人が住んでいたことも分かっている。

さらに藩政時代に入り新田開発が重要な政策となった。ここ北代、八町、小竹村では安定した水利を確保するため加賀藩の力を借てり牛ヶ首用水を整備した。

この工事の際、八ケ山を越える区間が難工事となり、「牛の首」を沈めて安全祈願し工事をなしとげたという逸話も残っている。

このほか以前に地鉄射水線が営業していた時の八ケ山遊園地も春の遠足、秋の運動会、冬のスキー場として賑わいをもたらしていた場所もある。

これらを八ケ山周辺の見どころとして紹介する。

八ヶ山公園の入り口部分

（2）八ヶ山遊園地と石原正太郎碑

旧射水線「八ヶ山駅」脇に八ヶ山公園がある。この公園は、百塚出身の実業家石原正太郎(1878～1943)が昭和初期に開通（連隊橋、後の新富山から打出間）した射水線(前身、越中鉄道)の乗客の増加と地元振興のために建設した遊園地跡である。石原正太郎は、明治11年2月百塚に生まれ、そのご東京高等商学校卒業後、若干27歳にして満州に渡り、安東電気、安東瓦斯などの事業を起こし大陸産業の開発に尽くした。大正4年、帰国後対岸貿易の振興に燃え定期航路の開設や水力発電など内外産業の振興を図り、その後大正6年に衆議院議員に当選するなど政界の発展にも尽くした。そして地元では桃林や雑木林であった八ヶ山台地を買収し、西北の斜面をスキー場として昭和4年に開場した。ジャンプ台と貸しスキーを100台用意したので大いに賑わった。その後、通年利用を図るため運動場、保養施設も建て、梅、桜、ツツジ、カエデなどを植えた。遊園地は、四季折々の変化が楽しまれ小学校の遠足や家族行楽の場として親しまれ、戦前に富山市の管理となった。また射水線は昭和55年3月廃止となる。

広場の奥にあるレリーフ入り顕彰碑

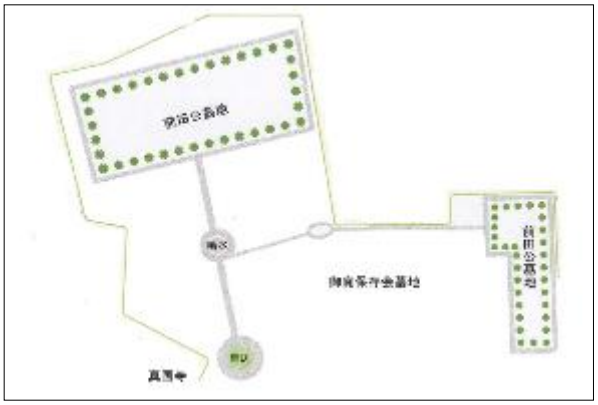
（3）富山藩主の墓と真国寺

富山藩長岡御廟

八ヶ山公園の西側、牛ヶ首用水を挟んで富山藩主の墓がある。富山藩2代藩主正甫公は、父の初代富山藩主前田利次が延宝2年(1674) 7月7日58歳で亡くなった時、父が百塚に築城したいと考

えていた事を思い、百塚に隣接する小高い長岡の地に墓を築いた。そして翌年（1675）にお墓の守役として長岡山御廟真国寺(曹洞宗)を建立し、さらに油肝煎を二人配置して利次公の命日から五夜にわたって燈籠に火を入れる「迎え火」「送り火」の行事を行った。以降、12 代藩主利聲公までの藩主が葬られている。(13 代藩主利同公の墓は東京、音羽護国寺)歴代藩主の墓は、明治８年（1875）まで仏式であったが、明治 17 年（1884）になって神式の官位姓名となり戒名も彫りなおされ神式の行事も取り入れられた。また境内には、藩の重臣から奉納された石燈籠(明治18年の記録では543基)が建ち並んでいる。

昭和 33 年に長岡御廟保存会が設立され「迎え火」「送り火」の行事を新暦の８月８日に行われている。



富山藩御廟への入り口と配置

（4）牛ヶ首用水

難工事とされた牛ヶ首用水

呉羽山の東側に沿って牛ヶ首用水が五福から八ヶ山にかけて流れる。神通川流域の婦負郡、射水郡では、川が氾濫する事が度々あり安定した収穫を得る事が出来なかった。このことから両郡 33 か所の村役人が用水開削と新田開発を加賀藩に願い出た。加賀藩は、寛永元年（1624）願い出た下村長左衛門、八町村　善右衛門、小竹村　久右衛門の 3 人を用水掛主附(ようすいがかりおさづき)に任命し用水開削の許可を出した。 当初は、山田川から水を引く計画であったが井田川からとなる。

新用水が開かれるたびに新田が開墾され新村が誕生した。その後、富山藩が誕生し、さらに新田開発を進めるため神通川の亀ヶ淵から新たに取水して井田川へ水を入れた。こうして牛ヶ首用水は承応 3 年（1654）に完成した。

牛ヶ首用水の名は、代表者の一人である八町村善左衛門が「工事の難所に牛の首を深く埋めよ」との神のお告げを聞き、その通りにしたところ工事が無事完成をしたと云う話に由来している。その難所は、八ヶ山の切り割工事であったとされる。

（5）北代極楽寺址

富山市北代の北側に浄土真宗専龍寺がある。

この境内に金毘羅堂と石碑が建ち、石碑に「禁殺生」「光明山極楽寺」と刻まれている。

『越中旧事記』には、極楽寺を中心に真言宗の寺が 24 もあった事が記されている。

また地元には総門、大門、釈度寺、余慶寺坊守等の地名があり、その広さは広大である。特に石碑から東 100mほど離れた場所に「弘法大師阿字観処碑」が建っており「奥の院」と呼ばれ、ここまでが境内であったと思われる。

極楽寺は、鎌倉時代以前に建てられ、ほぼ現在の長岡全域に広がり、特に北代に多くの信徒を得て栄えていた。

今から約 500 年前、富山を支配した神保長職の支援を受け大いに栄えたが、1560 年上杉謙信が富山攻めをしたときに戦火にあい焼失した。

その後、浄土真宗の勢いに信徒も減り、明治３年、富山市梅沢町の真興寺に併合され廃寺となった。しかし北代では、かっての信徒らが金毘羅堂をたて、今も「こんぴらはん」と云って守り親しんでいる。

石碑と金毘羅堂

（6）長岡新の五如来堂

県道小竹諏訪川原線が呉羽丘陵を横断する入口に五如来堂が建っている。堂内に五如来像と弘法大師像が安置されている。一般的に五智如来（大日如来、阿閦如来、宝生如来、阿弥陀如来、釈迦如来）と言われる金剛界五仏の像容と異なっているが台石に菊花紋が刻まれている。

円盤形の弘法大師像は、周りに梵字で光明真言が刻まれている。また台座には名工と呼ばれた「太田村大字石屋　石工　牧喜右エ門」の名がある。

さらに福井市足羽山から出土する笏谷石を使った香炉台等があり日本海文化の交流が見える。

村境に立つ五如来堂

（7）石坂交差点のお堂

県道小竹諏訪川原線と八尾富山線の交差点脇にお堂が建ち、中に三体の石仏が安置されている。

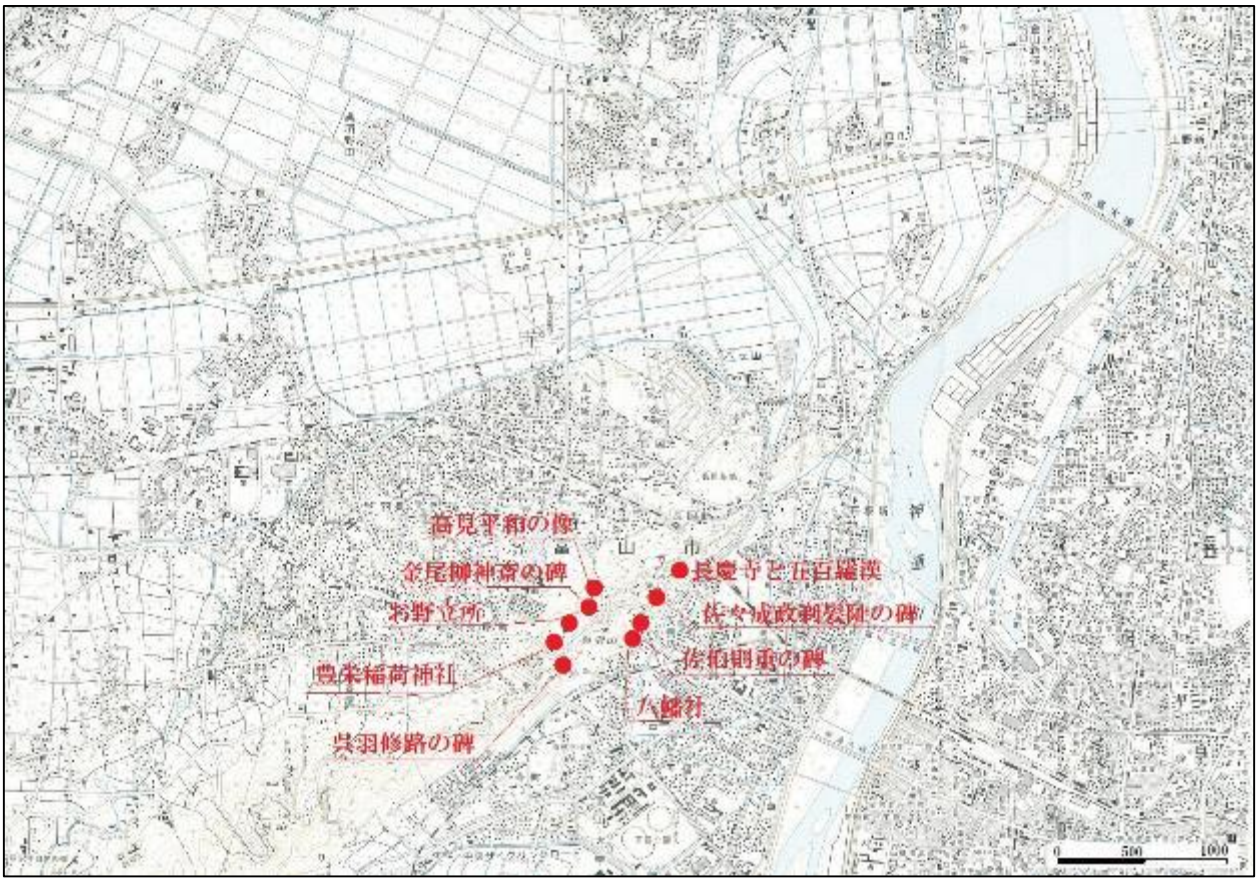
祭壇の中央に円形の胎蔵界大日、右に阿弥陀、左に聖観音である。

阿弥陀と観音像の台座は、道標を兼ねており「右岩瀬道四方道」「左　山道」と別々に刻まれている。

またここにも笏谷石を使った香炉台等がある。

お堂内に安置された石仏

７．呉羽山周辺の探訪



呉羽山周辺みどころ位置図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

（１）呉羽山周辺のみどころ概要

呉羽山周辺は、富山の市街地から最も近く東側の玄関口に富山市民俗民芸村が整備され売薬資料館、陶芸館、美術館など多くの施設が建っている。

江戸時代の富山藩とのつながりの強い長慶寺や「長岡八景」と詠われた桜谷など、古くから桜の名所として市民に親しまれてきたところで、現在も山頂の広場には、茶屋が新たな商売をしながら店を構えている。

さらに木曽義仲の武将今井兼平の軍勢が寿永２年（1183）「御服山」（呉羽山）に陣をとり安養坊の坂道を上がるとき馬から降りて決戦の勝利を祈願した八幡社や富山城主佐々成政が白鳥城に陣をしいていた羽柴秀吉に許しを乞うため剃髪した場所など、戦国時代の１ページをかざる見どころがある。

また呉羽山から眺める立山連峰は、大正天皇のお歌にもなるなど素晴らしく、近年、大きなビルが建つ市街地と北陸新幹線の高架橋が新たな景観を作っている。

これを眺める、「立山開山の佐伯有頼像」はどのように見ているだろうか？

これらの施設、場所を紹介する。

呉羽山から見る市街

（2）「佐々成政」剃髪趾の石碑

民俗民芸村の陶芸館前交差点の脇に「佐々成政剃髪趾」の石碑がひっそりと建っている。

富山城主であった佐々成政は、天正 13 年（1585）8 月、羽柴秀吉に越中攻めを受け富山城を包囲された。城山の白鳥城に本陣を張った秀吉に許しを乞うため、呉服山に陣をとっていた前田利家のもとで髪を剃り、僧の姿になったという。

成政が越中に入る前の天正６年３月、織田信長は、上杉謙信の死により京へ逃れ来ていた神保長住（神保長職の子、信長の義弟）を越中入りさせ上杉勢に対抗した。その時、佐々成政は信長の命により神保長住に代わって指揮をとるため同年９月越中守山城に入った。そして天正 10 年６月、魚津城の上杉勢を陥れ越中統一を成し遂げた。

しかし本能寺の変（天正 10 年６月）により世情が羽柴秀吉に傾き、天正 12 年 12 月厳冬の「さらさら越」をして徳川家康に赴くが願いが叶わず孤立した。その後、成政は家康を通じて秀吉との和議を講じるが実らず、ついに天正 13 年８月、秀吉 10 万の大軍を率いて出陣する。

越中に入った秀吉は、成政恭順の意を知っていたが加越境の八幡峰芹谷野（小矢部市）に仮城を築き指揮を執り、その後黒河山（射水市小杉町）を経て白鳥城の本陣に入った。（黒河山は、のちに太閤山となる。）

その後、成政は、髪をそり僧になって秀吉に許しのお礼に参上したとされる。(最新の調査では、「秀吉が芹谷野（小矢部市）から直接富山城に入城し、数日居たあと城の破却を命じて白鳥城に移った。」とされる。

『富山史壇』第 161 号（2010）より

成政は、新川郡を与えられるが大坂城（大阪）への出仕の身となり天正 15 年、秀吉の九州征討で認められ同年 5 月、肥後国主となる。しかし検地に反対する国人らにより一揆がおこり、秀吉に責任を取らされ天正 16 年 5 月 14 日、摂津尼崎、法園寺にて切腹する。享年 53 歳であった。

佐々成政剃髪趾の石碑

（3）「立山を仰ぐ特等席」と有頼少年像

立山開山の祖・佐伯有頼少年像

この像は、「立山開山千三百年祭、佐伯有頼少年像建立の会」が富山県の童話家「大井冷光氏」の志を受け彫刻家「畑正吉氏」の原型をもとに楢原北悠の彫刻により制作された。

呉羽山に視点場がある。この視点場は、「立山仰ぐ特等席」のキャッチコピーを事業化したもので、立山連峰を一望できる。朝焼け、夕焼けに染まる時間に多くのカメラマンが押し寄せるが、その中央部に立山を開山したとされる佐伯有頼の少年像が今も白鷹を掲げて立山を見入る。（平成 13 年に建立）

立山開山にまつわる物語は、『立山開山縁起』によれば次のとおりとされる。

大宝元年（701）、有頼の父、佐伯有若が文武天皇の命を受け、越中守として新川郡字布施の院に居城（布施城）を構えた。

翌年（702）、息子の有頼が、父の大切にしていた白鷹をもって鷹狩りに出かけ鷹を逃がしてしまった。有頼は一人で白鷹を追って奥山に入り白鷹を探し捕まえた時、突然熊が現れ有頼に襲いかかってきた。有頼はとっさに熊に向かって矢を射ると矢が熊に命中した。熊は血を流しながら立山山中の玉殿窟に逃げ込んだ。有頼は熊の血の跡を追って洞窟に向かうと、そこに金色で生身の阿弥陀如来と不動明王が現れ、そして阿弥陀の胸に有頼の射た矢が刺さっており、血が流れていた。

熊の正体は阿弥陀如来で有頼に立山を開山させようと導いたのである。有頼は仏をあやめた罪を懺悔し自害しようとしたが、その時、薬勢仙人が現れ、それを止め、有頼に僧侶慈朝の弟子になることを勧めた。有頼は慈朝の弟子となり、出家して慈興と改名し、厳しい修行をして立山を開いたとされる。

（4）御野立所と歌碑

大正天皇の歌碑

昭和天皇の歌碑

呉羽山視点場前の丘に「御野立所」がある。

大正天皇が明治 42 年 10 月 1 日（皇太子・東宮の時）富山県を訪問され、五福新道の白壁茶屋から徒歩で呉羽山へ登られ、漢詩「登呉羽山」を詠まれた。その後、この場所を御野立所と呼ばれ、昭和 26 年 10 月（1951）、漢詩「登呉羽山」の一部を歌碑として建立された。現在の歌碑は、平成 14 年 10 月に再建されたものである。

大正天皇御製「登呉羽山」

雨後風無秋氣溫　呉羽峻阪留履痕
維昔秀吉進征旆　敵將力窮降軍門
吾來此地見形勢　中越全景眼中存
立岳衡空向東聳　神通水漲指北奔
兵營一路連城市　海灣直接穲稏原
眺望如此難多得　眞是北國好公園

またその横に昭和天皇が昭和 33 年（1958）富山国体に来られたのを記念し建てられた歌碑がある。

碑文は、昭和天皇が大正 13 年 11 月 3 日（皇太子の時）陸軍大演習統監のさいに詠まれた御歌である。

昭和天皇御製「立山の御歌」

立山の空にそびゆるををしさに
ならへとぞおもふみよのすがたも

（5）富山藩と豊栄稲荷神社

豊栄神社の正面

御野立所を南へ少し下ると右手に赤い鳥居が見えてくる。富山藩と所縁のある豊栄稲荷神社で昭和 48 年に富山市星井町から遷座された。

富山藩２代藩主前田正甫は、富山藩の財政基盤を築くため五穀豊穣と殖産新興を祈願する稲荷神社を京都伏見稲荷大社から分霊を受け、富山藩の米蔵「千石蔵」に隣接する稲荷高で祀ったことにはじまる。それ以降、富山藩社として稲荷大神を主神とし祖先にあたる菅原道真公を神とする「成就天満宮」と医薬の神「少名彦神」と富山売薬の始祖とされる前田正甫公と発展に尽くされた方々を祀る「薬祖社」がある。

廃藩置県により地元住民が世話をしてきたが昭和 20 年の富山大空襲で焼失。その後星井町で簡素な仮社殿が建てられれたが、昭和 48 年富山藩主の御子孫及び藩士の方々により、現在地、呉羽山に遷座された。

（6）金尾柳神斎の碑

呉羽山視点場へ向かう駐車場に金尾柳神斎の石碑が建っている。

富山市が生んだ明治の武道家・金尾柳神斎は、東京で剣術を榊原健吉(将軍家茂の指南)、柔道を嘉納治五郎氏に学び、その後帰郷し鹿島町で道場を開き多くの門下生を指導した。

この碑は昭和 4 年に建立されたもので、碑銘は、嘉納治五郎の書、裏の漢文は東京大学名誉教授塩谷温氏である。

金尾柳神斉の石碑

（7）高見・平和観音像

呉羽山西側「富山緑化植物園」より呉羽山公園に向かう道路沿いに平和観音像がある。

富山市が生んだ明治の政治家「高見之通氏」が昭和 5 年 9 月 1 日に建立した。高見氏は、明治 13 年富山市千石町に生まれ東京帝国大学を卒業し弁護士となる。その後尾崎行雄に奨められ大正 6 年 37 歳の若さで衆議院議員になり 7 回の当選を果たす。昭和初期に大阪遊郭移転の疑獄事件(松島事件)に関与したとされたが無罪となる。この間、京都洛北相国寺で修業し、その後高王白衣観音経(延命十句観音経)を唱え続けた。そして仏恩に報いるため、この観音像を建立したとされる。

平和観音像

（8）桜谷の長慶寺・五百羅漢

長慶寺の本堂内

呉羽山東面に佉羅陀山長慶寺がある。

長慶寺は、もと貞観年中（859～877）大沢野塩野（大久保）に創建された真言宗の寺院で、のちに曹洞宗に改宗した。天明 6 年（1786）　長慶寺の日輪當午大和尚は、富山藩主前田利謙公から呉羽山杉坂一帯の地を受け移転した。

和尚は山や谷に珍しい「如意桜」などを植えたため名所となり、桜谷と呼ばれるようになった。

また和尚は、丈六の延命地蔵を建立し「桜谷の大仏」と呼ばれたが廃仏毀釈のさい壊された。

境内には人麿堂の址があり「筆塚」、「志留丸塚」が建っている。さらに寄進された五百羅漢が整然と並んでいる。

建立の始まりは、寛政 11 年（1799）富山城下の回船問屋等を営む黒牧屋善次郎が 2 人の商人と併せて 16 体の羅漢像を安置した。

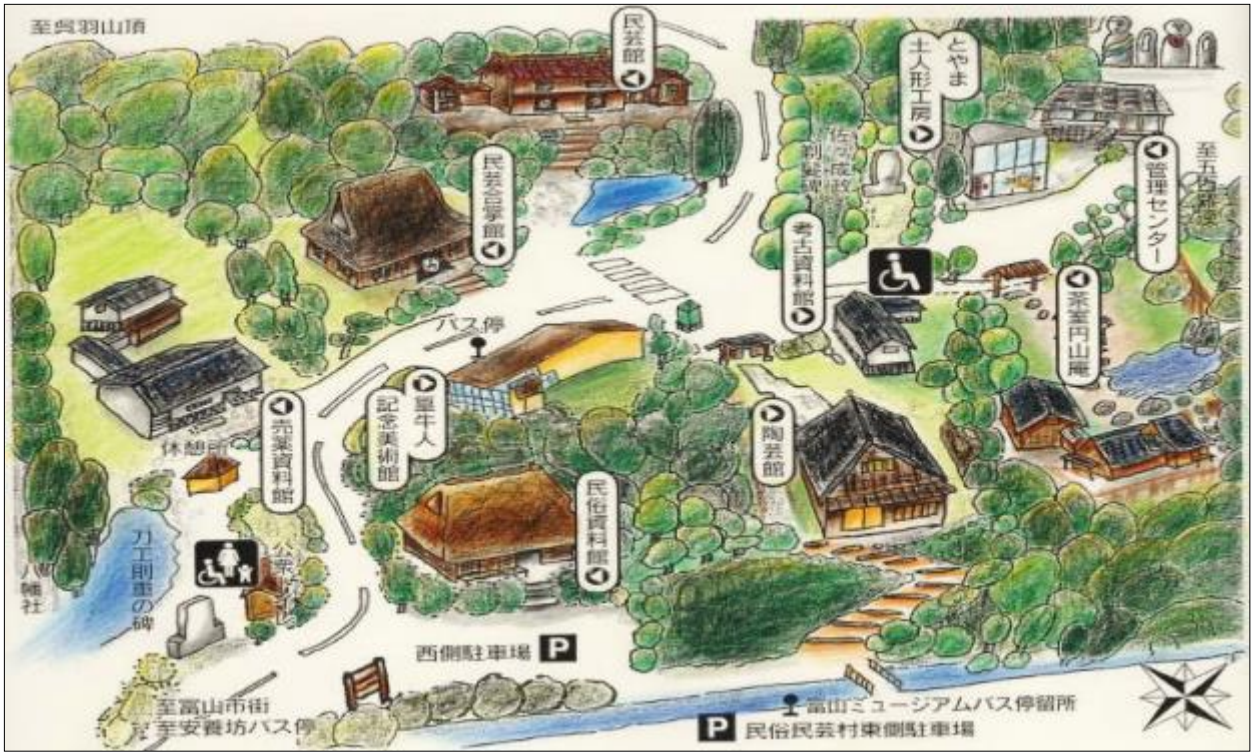
その後多くの人からの寄進が続き善次郎は岩瀬から松前まで米を運んだ帰りに佐渡の石工が彫った石像を持ち帰り桜谷の麓から山上にかけて道の脇に安置した。

寄進は安政 5 年（1858）まで続き全部で 535 体となった。明治の廃仏毀釈では壊されなかったが、土に埋もれた像などがあり昭和 2 年から 3 年に現在の姿に整備された。

現在富山市指定文化財となっている。

整然と並ぶ五百羅漢

（9）富山市民俗民芸村



民俗民芸村施設配置図

呉羽山東面に「富山市民俗民芸村」がある。

昭和 40 年に飛騨市の板蔵が移築され民芸館としてスタートした。その後、民芸合掌館・民俗資料館・考古資料館・陶芸館・茶室円山庵・売薬資料館などが建てられ、そして先人の暮らしの跡をしのばせる出土品や農具・民芸品などを展示している。また郷土の水墨画家、篁牛人（たかむらぎゅうじん）の作品を展示する篁牛人記念美術館やとやま土人形の工房などがあり施設全体を観光、学術研究の場として利用されている。

板蔵が移築された民芸館

（10）佐伯則重の石碑

呉羽山東側、民俗民芸村の入口に佐伯則重の碑がある。則重は、正宗の十哲の一人と言われ鎌倉時代の正応 2 年（1289）婦負郡呉服村で鍛冶屋の子として生まれた。30 歳のとき郷義弘（ごうのよしひろ）（越中国、新川郡松倉郷出身、現在魚津市）に入門、その後相模の国へ行き、岡崎五郎正宗に師従し相州流の秘伝を受け 40 歳で帰郷した。

多くの名刀を残し「呉服郷」と称せられたが正平 21 年（1366）78 歳で亡くなった。

以前、工業高校の北側に刀を鍛えた泉や宅跡が残っていたが都市化が進んだことから、この地に石碑のみが移された。

公園入り口に立つ「則重鍛刀之碑」

(11) 八幡社と武将との関わり

今井兼平が戦勝祈願した八幡社

呉羽山の東側、民俗民芸村の入口に八幡社がある。

『源平盛衰記』巻 28 では、木曽義仲の武将今井兼平の軍勢が寿永２年（1183）「御服山」（呉羽山）に陣をとったとされる。

呉羽山観光協会の案内板では、「信濃に兵をあげた木曽義仲は、平氏を追って京都に攻め上がるとき加賀の戦地から援軍を要請され、直ちに今井四郎兼平を遣わした。兼平は、八幡社のある安養坊の坂道を上がるとき馬から降りて決戦の勝利を祈願した」との伝説が記されている。

(12) 五福新道と「呉羽修路の碑」

呉羽修路の碑

五福地内で旧北陸街道から分かれて牛ヶ首用水を渡り、JR 高山線の踏切を超え県道富山高岡線へ向かう市道が「五福新道」で「安養坊新道」とも言う。

明治天皇の北陸巡幸（明治 11 年 1878）のさい、峠茶屋を越えていた北陸街道が急なため新たに整備（約 1.2Km）された道である。

明治天皇は、五福の「皇恩軒」から輿に乗り替えられ呉羽山の峠を越え、そして中茶屋の「島崎家」まで進まれた。

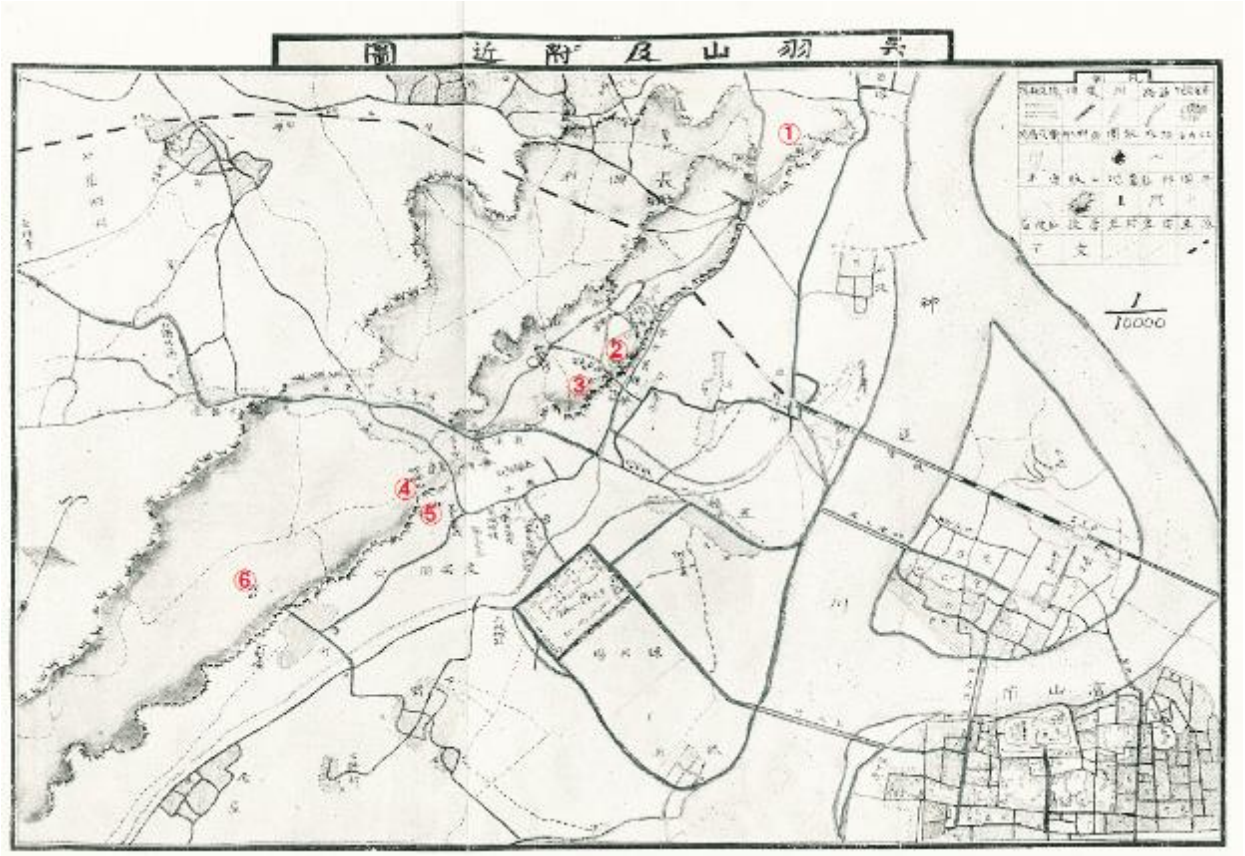
そのご五福新道は、何度か拡幅改修され荷馬車等が越えられるようになり、旧国道８号(現在県道富山高岡線)が開通するまで呉羽山越えの本道であった。

途中の山側に大正８年（1919）の大改修で活躍した県会議員角島吉明氏を顕彰する「呉羽修路の碑」が建っている。

８．明神山周辺の探訪

明神山周辺みどころ位置図　　(国土地理院発行 1/25,000 地形図) を加筆、縮小

（１）明神山周辺のみどころ概要



小柴直矩著の「呉羽山」の地図　　大正２年９月に発行された小柴直矩著「呉羽山」に掲載された地図で、北から①八箇山、②道心山、③丸山、④明神山、⑤五時谷、⑥城山、の位置が表記されている。

旧国道８号（県道富山高岡線）工事が行われる以前は、呉羽丘陵も尾根伝いに呉羽山から城山まで縦走することが出来た。

大正２年９月 20 日発行の小柴直矩著の『呉羽山』では「呉羽山とは、全山の総名にして、連峰の部分により城山、明神山、五時谷、安養坊山、道心山、桜谷、長岡、八箇山等の称なり」と記されている。さらに「五福新道の白壁茶屋より近道して山上長久院（現、七面堂）の坂道を上り、それより西に向かい坂を下れば旧北陸街道の峠路に出る。」とし、「明神山を越えれば、・・十余町にして城山に達す、城趾なり」とも記され呉羽山一帯を紹介されている。

また明神山では、「五時谷の武運山長久院、さらに峠路のした左側に長久院を参拝する通路あり、足立塚と中田文敬の記念碑も立つ」と紹介されている。

今は、当時の面影がないが七面堂や峠が静かに佇んでいる。

こんな城山までの尾根道を紹介する。

（２）峠茶屋と旧北陸街道

旧北陸街道が呉羽丘陵を越える峠（標高、約 50ｍ）が峠茶屋である。

街道は、時代の変遷に伴い浜街道、山街道などが整備された。この街道は古代から勅使が使用した街道で、西から今石動、戸出、中田、水戸田、峠茶屋、そして富山町に入る道であった。

寛永 10 年(1633)、加賀藩から家立が許されて茶屋が建ちならび、今も「アメヤ」「マンジュウヤ」などの屋号が残っている。

特に富山藩が誕生してから、七面宮などの神社仏閣で賑わい共に栄えたところであったが、明治 11 年、明治天皇の北陸巡幸にあたり、新たに「五福新道」が整備されてから通行人も少なくなり北陸街道としての使命を終えた。

峠の地蔵堂と明神山へ向かう石段

（３）七面堂

県道富山高岡線が呉羽丘陵を横断する切り割の南側に七面堂がある。

現在の七面堂は、約 350 年前の万治年間（1658～1660）呉羽丘陵の明神山(稲荷社付近)一帯に創建されていた七面宮(明治３年、合寺令で取壊される)をこの地に移転・再建、しかし昭和 19 年火災で焼失したため再々建されたものである。

お堂には、後年奉祀された神仏が安置されており、さらに参道の登り口に当時の石塔や裏山に法華塔、常夜燈が移設されている。

七面堂の正面

裏手に残っている常夜燈

（4）七面宮と稲荷社

妙法山立像寺に奉納されている七面宮絵図
富山稲荷神社の前宮司、五十嵐精一氏が祖母、さとさん（91 歳）の記憶をもとに描かれた絵図。

旧北陸街道の峠から城山に向かう入口に稲荷社があり一帯を明神山と云う。明神山の由来は、富山藩初代藩主前田利次公から、この山を拝領した富山藩士奥村蔵人が七面宮を建立し、甲州身延山の七面大明神と同形の木像を祀ったことに始まる。

その後二代藩主前田正甫公が建立した武運山長久院や九代藩主利幹公建立の妙見堂などが建ち並んだ。山上には三重塔が高くそびえ富山沖からも灯りが望遠出来たという常夜燈が置かれていた。

当時の賑わいは、今も残っている絵図、絵馬などからうかがう事が出来る。妙法山立像寺に納められている七面宮絵図をみると技術的に大変高度な七面造の建物で、また神門にも格式の高い軒唐破風が描かれている。

七面宮跡地周辺に建つ稲荷神社

（5）木俣修の歌碑　（芝生広場）

稲荷神社から城山に向かう尾根道を進むと芝生広場に出る。この一角に「木俣修」の歌碑がある。

木俣修は、昭和９年から 10 年間旧制富山高等学校で教鞭をとり多くの師弟を育んだ。若い時から歌人として北原白秋に師事し、後に宮内庁御歌会始の選者を務めるなど歌壇に巨星した。この歌碑は、昭和 58 年８月旧制富山高等学校同窓生有志と歌誌「形成」の同人らによって建立された。

「鷺の群渡りをへたる野の上は
　　たゝうすうすに青き雪照」

木俣修の歌碑

９．城山周辺の探訪

城山周辺みどころ位置図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

（１）城山周辺のみどころ概要

峠茶屋の旧北陸街道峠から明神山を越え、浅田の丘、芝生広場を経て城山に着く。

城山は、呉羽丘陵の最高峰で 145.3mの高さをもっている。頂上は、「白鳥城址」の本丸広場となっており東は富山市街地、西は、新湊大橋が眺められる絶好の場所である。

それだけに、昭和 33 年富山国体の開催に先立ちＴＶ放送が始まった時、ＮＨＫテレビ塔が建ち、その後、民放のテレビ塔も並び、さらにスカイラインの道路や呉羽ハイツの宿泊施設が出来て多くの人々から親しまれてきている。

また山頂付近を通る「富山県中央サイクリングロード」ではロードバイクのトレーニングにも利用されている。

こんな城山は、江戸時代の『従加州金沢至武州江戸道中図』に「呉服山」と記されている。

また明治 22 年の町村制度が出来た時、東側を東呉羽村（現五福）、西側を西呉羽村（現呉羽町）と呼んだことなどから一帯が機織りに縁の深い地域と思われる。

ここでは、そのふもとの神社、仏閣をも含めて紹介する。

城山付近から見た西側、新湊大橋

（2）白鳥城址

呉羽丘陵の最高峰城山(145.3m)を利用した中世の山城・白鳥城で、今も空堀や井戸跡が残っている。

越中平野の東西を見渡せる軍事上の要衝として戦記に多く名が出てくる。なかでも天正 13 年（1585）８月､羽柴秀吉が佐々成政を攻めたとき、この城に入った事がよく知られている。

このほか源平盛衰記において「今井兼平が寿永 2 年（1183）御服山に陣を張った」。また天文元年（1532）、神保長職が上杉との戦いため築城したことなどが伝えられているが慶長 4 年（1599）頃まで存続していたと云う。

昭和 51～57 年にかけて富山市教育委員会が城跡の発掘調査を実施し、戦国時代の遺構の下に弥生時代末期･古墳時代初期の土器や住居跡(竪穴遺構)などを発見し県内初の「高地性集落」の存在を確認した。

この頃から軍事上重要な役割を果たしていたことが判る。

城山登り口に立つ「白鳥城址」の石碑

（3）旧五福小学校・大峪（おおがけ）城跡

五福小学校が建っている小高い丘が大峪城の本丸跡である。

大永年間（1521～1528）越中守護職畠山氏の守護代であった神保長職が築城したとされる。

その後、羽柴秀吉の越中攻めのさい、安田城と同様に白鳥城の支城として使われる。

廃城の時期ははっきりしないが安田城と共に運命を同じくしたのではないかと思われる。

五福小学校も現在、移転先の旧市民病院五福分院跡地で工事が進められており平成 27 年 4 月の開校を待っている。

五福小学校入口に立つ説明板

（4）白鳥神社

県道富山庄川線がＪＲ高山線を横断する北隅に白鳥神社がある。

この白鳥神社の祭神は日本武尊で、同社に保存されている棟札の表上部に「日本武尊」、下方に「白鳥大明神」、裏面に「寛保二壬戌歳（1742）三月九日再興遷宮」と記されている。

日本書紀に仲哀天皇が「父、日本武尊の御霊が白鳥となって天高く飛び去った。父を慕い諸国に白鳥の献上を命じた。」とある。越の国からは4隻を献上したが、その白鳥捕獲の伝承地が当地とされ白鳥神社の由諸となっている。

江戸時代の神社記録には、寺町の白鳥神社は延喜式内社(平安時代に選定・婦負郡では７座)と記され、その可能性が高い。

また戦国時代、城山に山城が築かれた時、ふもとの白鳥宮から名前を頂き「白鳥城」と名付けられたとされる。

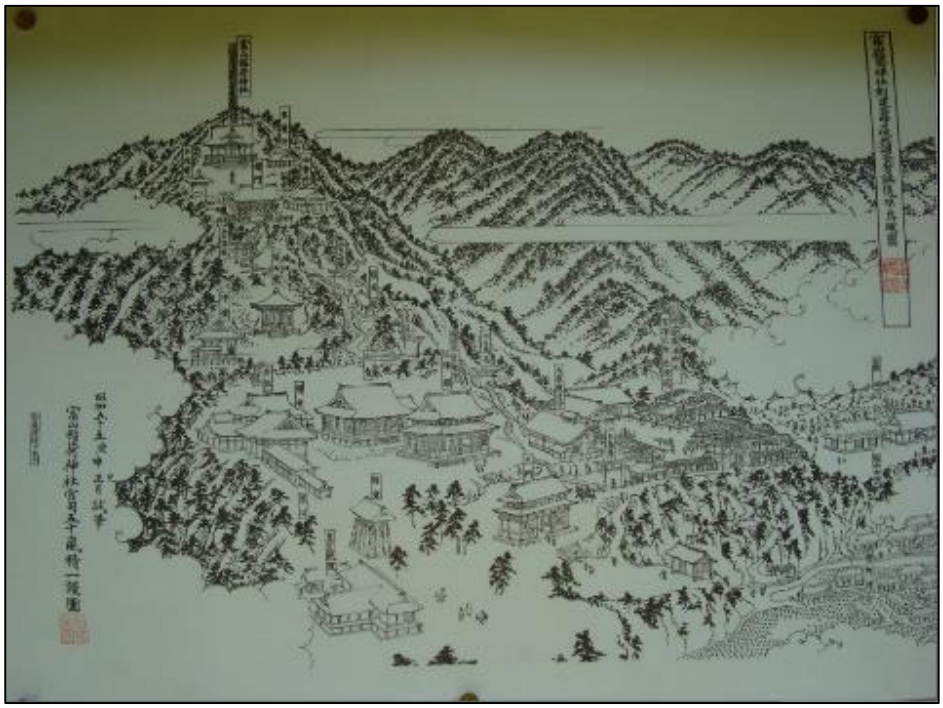
白鳥神社は､城山のふもとに建てられていたが、大正３年(1914)４月９日、現在地へ城山の白鳥城址と対峙するように建てられ遷宮された。元の宮跡は､この地から北へ２ｋｍほどの JR 西富山駅の近くで、昭和２年（1927）飛越線が開通した時、

大半が線路の一部にかかり、残地に石塔が立っている。石塔には「白鳥明神之趾」、「紀元二千六百年記念」と記されており、地元では、この跡地を「古宮」と呼んでいる。

県道ぎわに建つ白鳥神社

JR 西富山駅付近に建つ「白鳥明神之趾」の石碑

（5）富山稲荷神社



描かれた絵図
絵図は、鎌倉時代の様子を描いており、山頂の城山付近に「富山稲荷神社」、そして裾野に「万松山崇聖寺」が見える。

城山の東面、富山大学新樹寮の裏手側、水道局「寺町ポンプ場」のおくに富山稲荷神社がある。

京都東福寺の史料によると鎌倉時代の弘長 2 年（1262）伏見稲荷大社から分霊を受け城山に稲荷大明神を祭り、山麓に末寺、万松山崇聖寺（そうしょうじ）を建立したとされる。稲荷神社は、室町、戦国時代に入り城山が軍事要塞となり駒見に移転した。その後、神通川の変遷に伴い転々としながらも江戸時代には、富山城内に祀られていた。

享保 15 年（1730）神託により城外へ移転し、その後、大正 2 年（1913）内幸町を経て昭和 57 年(1982)この地に戻る。

寺跡地から明治の末期に神器、仏器などが出土し国立東京博物館に保存されている。

また創建時代の建物群の絵図が昭和 55 年、前の宮司五十嵐精一氏によって鳥瞰図として描かれており、当時の賑わいをしのばせてくれる。現在も寺町として地名が残る。

呉羽丘陵に抱かれるように建つ富山稲荷神社

（6）西斜面に広がる呉羽梨

白いジュウタンのように広がる梨の花

呉羽ハイツ周辺から西斜面を見ると、春は白色、夏に緑色に変わるジュウタンが広がる。「呉羽なし」の生産地で生みの親は土池弥次郎である。明治30年～40年頃、特に関東方面（東京・埼玉・千葉）の農村視察に出かけ、吉作の地に適する作物の苗、７種類を持ち帰り何回となく試作した。

その結果、長十郎梨の栽培が一番良い事が分かり村人に推奨し普及した。

現在、「幸水」や「豊水」など新たな品種を栽培するようになり、昭和９年（1934）頃「呉羽梨」としてブランド化し耕作地も吉作以外の老田、池多などに広がり一大産地となった。

（7）住吉金草窯跡及びたたら遺跡

呉羽丘陵の西側に金草、金屋、金糞など製鉄の仕事にかかわる地名が残っている。

６世紀後半、この地に須恵器づくりが始まり、その窯跡が13基確認されている（西金屋センガリ山古窯跡、金草1～3号、吉作１・２号、古沢１・２号など）。

中でも北陸電力試験場に入る西側に案内看板が立っている「金草第一古窯跡」は、呉羽山麓で多く確認されている窯跡のなかで本格的に調査されたもので須恵器の杯、壺、甕など約８千の破片が出土した。

須恵器づくりは、５世紀に朝鮮半島から渡来した工人によって伝えられたが出土した破片は、藤原京から出たものと類似しており７世紀末の窯と云われている。他の窯跡(吉作、古沢)からも須恵器が出ており広い範囲で生産されていた事がうかがえる。

また畑から焼けただれた赤色の鉄滓が出て来るところがある。また遺跡として確認されているのは、８世紀前半のもので北代遺跡、８世紀後半のもので北押川遺跡、古沢A遺跡、西押川上提池遺跡、御坊山遺跡がある。これらは、炉跡（たたら）炭焼き窯跡、鉄滓及び捨て場所跡などで奈良、平安時代のものである。

（「呉羽の里」より抜粋）

（8）呉羽の守り神、姉倉比賣神社

姉倉比賣神社の参道

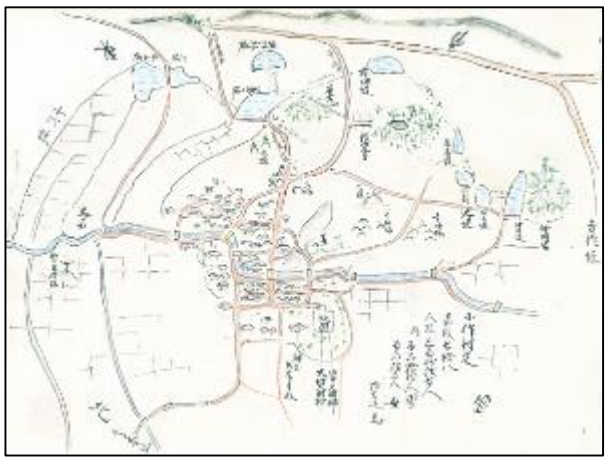
城山の西斜面は、茶屋町や追分茶屋、吉作、住吉などの畑地が広がるが、呉羽ハイツや富山観光ホテル付近まで呉羽町(旧小竹村)の畑地が食い込んでいる。これは旧小竹村の人たちがまきや炭などを採取するため開墾した入会地と思われる。

その後茶畑や桑畑に利用されたが、すそ野に「若宮の堤」という溜池と「若宮山」と呼ばれる山（現在の墓山）があった。このような旧小竹村に村社「姉倉比賣神社」（宮司、若宮家）が鎮座する。

姉倉比賣神社には創建前史の物語が次のように伝えられている。太古の昔、越中の国を治められていた船倉山の姉倉比賣は、能登の神、能登姫と争いになった。それが故に大竹野(現呉羽町)へ流され姉倉比賣に「布を織って貢とし、越中の女たちに糸を紡ぎ機を織る業を教えよ。」とのご命令が下された。やさしい比賣は、娘たちに機織りを教え、村人たちへ仕事に精を出すよう励まされたので誰もがお慕いするようになった。やがて「ここはいずこぞ大竹野よ、機を織ります私は、心もともにトンカラリ　トンカラリ」と明るい歌声が村中から聞こえ、蜆ヶ森から貝が蝶となって飛んできて比賣の仕事を助けた。このようにして大竹野は豊かな村となった。宮の創建は明らかではないが若宮家の社伝によると次の通りとされる。第11代垂仁天皇の御代、大若子命が越の国の悪者を懲罰された。

その時本社祭神のお告げによって陣所を若宮山中心に東に諏訪社、南に神明社、北に田中社を建て、天神地祇を祀り、戦勝を祈願された。また本社の大竹四本を旗竿に用いて軍を進めたところ輝かしい勝利を得られた。（阿彦の乱）大若子命は、一族である伊呂倶にこの宮に奉仕するよう命ぜられた。これより後、若宮伊呂倶と名乗り、その子孫が今に続いていると伝えられている。また姉倉比賣神社は、婦負郡の式内社七座の一つと言われ、婦負の郷名も社号からとったものとされている。

神社の近くに馬面、獅子舞坂、獅子見森、来舟牧など旧地名が残っているが、これらもみな祭りの神幸の行事に関係しているものである。



小竹村絵図　（富山県立図書館蔵）
若宮堤や若宮山、神明宮などが記されている江戸時代の絵図

（9）大徳寺の歴史―蓮如上人ゆかりの寺

大徳寺は、古い歴史を持つ寺院であるが、その詳細を知っている人は少ない。

大徳寺は、明治 39 年に現在の地に本堂を建設しており、呉羽東町で最も古い存在で寺の歴史が戦国時代にまでさかのぼる。

初代が源氏の流れをくむ武士で、第四代が蓮如上人直系の方で蓮如上人ゆかりの寺としても知られる。大徳寺は浄土真宗本願寺派（お西）の寺院で、山号源廟山、本尊が阿弥陀如来である。

その起源は、文明の頃、近江源氏の一色義直が応任元年細川山名合戦の後、父とともに越中国婦負郡小竹村に来て、太子堂に住んだ。

父の死後、文明３年（1471）蓮如上人に謁見して出家し、開基、圓澄となる。この時、本山より源廟山大徳寺の山号が許された。

寺の系統としては、木越光徳寺（現石川県七尾市）とかかわりがある。３代目に子がなく、井波瑞泉寺より蓮如上人の流れを汲む山田光闡坊（こうせんぼう）の子、少貳（しょうに）が入寺し、圓順と名乗る。

７代目圓誓のとき、慶長５年（1600）、小竹村から富山舟橋大嶽町に敷地を拝領して移住した。ただし小竹の歴代墓山や敷地などは領主前田利長によりそのまま認められた。

寛文３年（1663）富山藩初代藩主前田利次より寺地 600 歩を拝領し富山町寺町（現富山市梅沢町）に移住した。

その後、本堂など立派に完成して信仰を集めたが、明治維新の合寺令により寺地本堂共に没収され、小竹村の寺有地も大部分を庶民に解放した。

明治 11 年（1878）、明治天皇巡幸の際、再建を許されて梅沢町 132 番地に本堂を再建した。

しかし、明治 32 年（1899）８月、大火が発生して焼失し、小竹村の禅宗報恩寺に仮住まいで３年を過ごした。そして門徒山口紋平所有の山崎山に仮本堂を建設して移転し、ここを本拠と定めた。また、富山の門徒の墓も大徳寺の墓地であった若宮山に移転した。

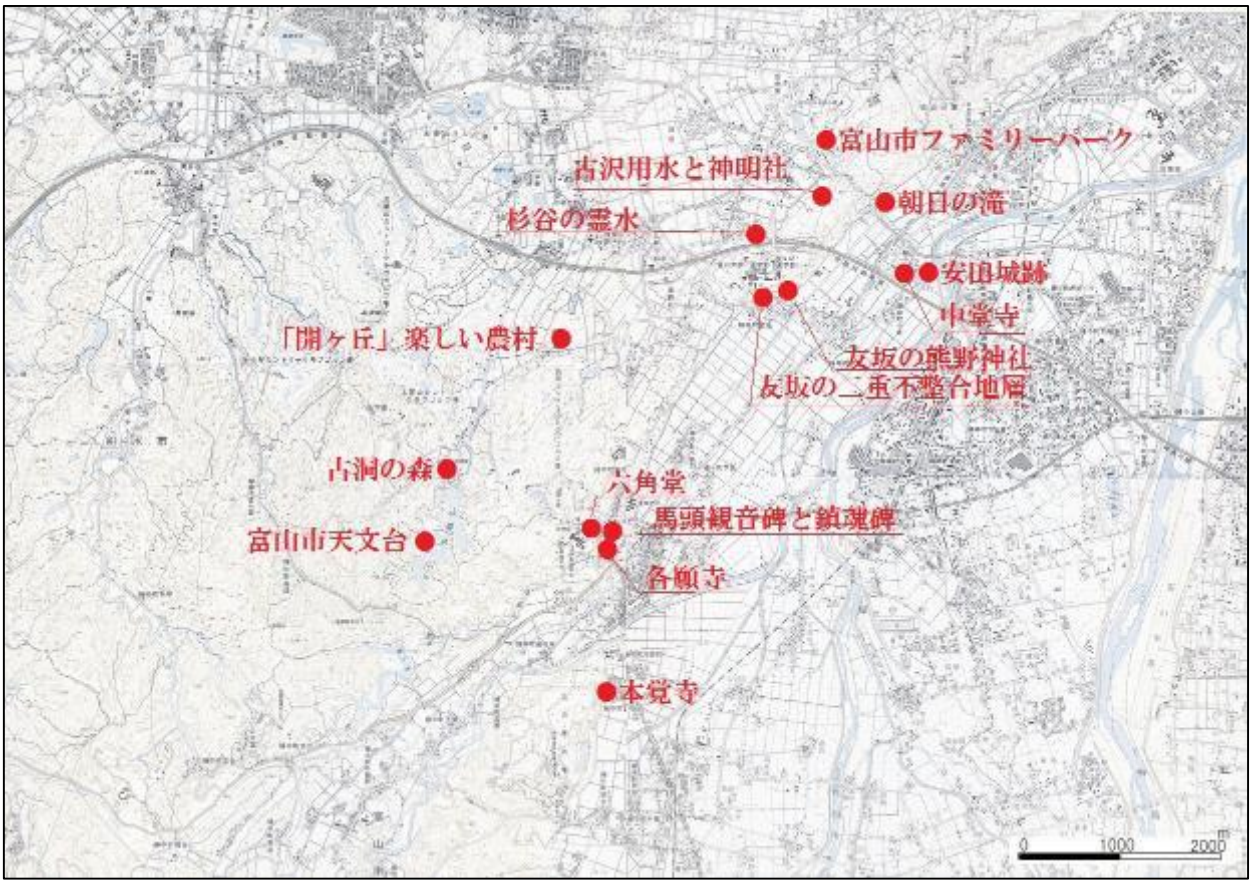
本格的な本堂を再建したのは第二次大戦後であったが、大正期に第 16 代圓融（現住職の祖父）、戦後になって第 17 代圓淳がそれぞれ相続した。現在は、第 18 代圓真が住職となっている。

寺宝として伝えられて来たものに「蓮如上人の御文」、「秀吉の陣太鼓」、「藤原家政の梵鐘」などあったが火災などにより失われてしまった。現在所蔵されているもので重要なものは、「准如上人御消息」である。これは慶長 12 年（1607）６月２日付の「越中富山二十八日講」宛てのものである。

門徒は地元呉羽地域をはじめ富山市内・大山町・立山町・婦中町・大門町・新湊市などに広く分布している。

大徳寺御堂

１０．古沢、池多、朝日、古里周辺の探訪



古沢、池多、朝日、古里周辺みどころ位置図　（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

（1）古沢、池多、朝日、古里のみどころ概要

呉羽丘陵の最南端に位置する古沢、池多などの地域は、古墳の多いところである。

また呉羽丘陵の東側婦中町と西側古沢、池多地区は、行政区域が違っていたことなどから交流の少ない地域であったが、県道富山小杉線（呉羽トンネル）の開通と富山大学医科薬学部や附属病院、富山市ファミリーパーク、ガラス造形研究所、さらに高速道路富山西インターなど近代的な施設が集中してから大きく様変わりをした。

特に県道富山小杉線の沿道に飲食店が進出してから人の往来が色濃く見える地域である。

このような地域の遺跡、神社仏閣、さらに公共施設などを含めて人々の営みの痕跡を紹介することとした。

（2）富山市ファミリーパーク

富山市ファミリーパークは、郷土の動植物の様々な知識を普及するため、富山や日本の動物たちを中心に 100 種 1000 点を飼育し展示している。

またホクリクサンショウオやホタルなどの希少生物の生息環境の調査と保全を行い、近年は、二ホンライチョウの保存事業に参加し地球の生物多様性の大切さを伝えている。さらに「呉羽丘陵の里山を残していこう」と地元の自治振興会・小中学校・団体・施設と「悠久の森実行委員会」を組織し、イベントや体験ツアー等を通して「新しい里山」をつくり出す活動に参加している。

今後も、「森を元気に、人を元気に、いのちを元気に、地域を元気に」のコンセプトのもと、ファミリーパークと呉羽丘陵を一帯化した「いのちが集う里」づくりを目指している。

（3）古沢神明社

古沢神明社の拝殿

「古沢神明社」は、むかし高木の神社であったと次のような由来が伝えられている。

およそ 300 年前、古沢村が誕生したころ、すでに土代村(小杉)が「下東野」を開墾（1650 頃）し水田にしていた。また鷹狩制が廃止になった元禄6年(1693)のころ高木村(呉羽)も法尻山(ほじりやま)(神明社の裏手の山)を土代村から譲り請けて「上東野」を開墾していた。この辺りは、「ため池」だけでは水が不足するため、高木村が法尻山の中腹に「高木神明社」を勧請し、水の確保を祈願するなどしていたが多くが畑のままで新田開発が進まなかった。

その後、宝永元年(1704)、富山町の仁右衛門が畑地であった百石場所・西野・大割・東野・金草を水田(畑直新開という)にするため、山田川から水を引くことを富山藩に願い出た。宝永 3 年(1706)用水の開削工事が始まると、「高木神明社」は「古沢用水」の工事の安全を守る守護神となり、「古沢用水ほじり宮」と呼ばれた。(1722 以降)

「古沢用水」が完成してから約 50 年後の安永 2 年(1773)、古沢村は「法尻山」を高木村から譲り請け、さらに約 45 年後の文政元年(1818)に、「高木神明社」も譲り受けた。(この間、神社の守料(桟敷料)として、毎年米 5 斗づつ高木村より古沢村が請け取っていた。)

そして新しく本殿を現在地(旧社は左手上の高い場所)で造り名実ともに、古沢村の「御高並用水守護神明宮」＝「古沢神明社」となった。

これを祝って毎年、秋祭り(９月６日)に奉納相撲が始まった。この相撲は「法尻の相撲」と呼ばれ花相撲・草相撲があり、地区はもちろん、遠く石川県の能登や氷見方面からの参加があった。

しかし昭和 32 年、古沢土改良区の発足をもって終了した。

(祭神) 天照皇大神、豊受大神

(変遷) 本殿は、圃場整備事業後の昭和 53 年（1978）に建替

拝殿は、用水改修と耕地整理後の大正４年（1915）に造営。

(地名の由来) 東野（1700 年頃命名）が古い時代「古沢野」と呼ばれていたことによる。

（4）古沢用水

古沢用水の記念碑　（古沢神明社境内）

古沢用水は古沢・池多・呉羽・老田・古里・朝日の水田 260ha(以前は 300ha)を灌漑している。山田川の上瀬袋谷取水口～末尾の花ノ木まで全長 12.5km あり、標高 60m から標高 20m を流れ下っている。勾配は 0.00067～0.0015(平均 1/1,000)と大変緩やかであり、途中の落差調整はドンドコ(堰)でなされている。この用水が造られたのは江戸時代のことである。

神通川から取水の牛ヶ首用水新江(1652～54)が完成し、井田・山田川に余裕ができて以来、富山藩では河川から引水の大掛かりな新田開発が数ヶ所行われた。それまでの開墾地は、灌漑が溜池のため水不足をきたし、畑のままであった。

その水不足を解消するために河川からの用水が開鑿され、畑を水田にする畑直新開(=新田開発)が行われた。呉羽丘陵西側古沢村も例外ではなかった。

宝永元年(1704)富山古鍛冶町の商人、仁右衛門が古沢野の新開を願い出た。翌年 2 月藩主正甫より許可をもらい、その翌年３年(1706) ３月から用水の開鑿と畑直新開が始まり、10 年後の正徳５年(1715)に一応完成した。

この用水は自普請であるから「仁右衛門用水」と命名された。しかし難所の辺呂川の横断が木製の台で水圧、風圧による揺れが大きく載っている木樋の継ぎ目から漏水し、古沢へ水が届かなかった。

そこで仁右衛門は、①辺呂川の横断のための築堤工事 ②山肌を削って流れる用水路のかさむ修繕の維持管理、この二項目を富山藩でしてほしいと願い出て承諾された。藩がかかわる以降、用水は御普請となり、「古沢用水」に替わった。

享保７年(1722)、藩士の藤江久兵衛の指揮のもと、３年がかりで土堤が完成し、「築留(つきどめ)」という地名になり、以後久兵衛は「築留番人」として傍近くに住んだ。これで漸く古沢へ通水し、畑直新開が完了し、石高は 2,011 石となった。

現在、用水路は護岸のため全線コンクリート化

され、古沢用水土地改良区(昭和 33 年発足)が維持管理をしている。また大正 15 年 8 月、古沢用水記念碑が古沢神明社境内に建立され、その後昭和 58 年 11 月に古沢やすらぎ苑に仁右衛門と与四兵衛の偉業を讃える石碑を建立し後世に伝えている。

（5）杉谷の霊水

杉谷の霊水

富山大学付属病院へ入る手前の北陸自動車道のわきに四阿屋と小さな祠が建ち霊水が沸いている。

呉羽山観光協会の案内板によると、「昔、この地に住む民が大和王朝に攻められたとき一族の皇子、建御名方命が明神池間近に神籬(ひもろぎ)を設け一族の子孫繁栄を願い白蛇に化して池底に姿を消した。その時、神籬の岩が割れ湧水が溢れ出た。人々は、恐れ恭順して神が宿る岩として神聖に祭った。」とされ、これが若宮大明神である。

また富山藩時代には前田利次が杉谷山で鷹狩、矢の訓練に来たおり飲料したため住民に使用を禁じ、また城に持ち帰ったとされ、これらから「殿様清水」とも呼ばれている。

この霊水は今も変わることなく流れ出て、力の源、百薬の水、霊水として親しまれている。

（6）安田城跡

安田城跡の空中写真

この城は、井田川左岸の扇状地に立地する平城で、堀を含め東西 150m、南北 240mの規模を誇る。

「本能寺の変」以降、天下統一を目指す羽柴秀吉が織田の家臣であった佐々成政を討つため天正 13 年（1585）10 万の大軍で越中攻めをした。

これに先立ち先鋒隊の前田利家が白鳥城の支城として安田城と大峪城(おおがけじょう)を造ったとされる。

成政降伏後も成政監視のため前田家の岡嶋一吉や平野三郎左衛門などが居住し前線拠点として使われたが、前田利長が富山城主になると役目も薄れ慶長年間に廃城されたとされる。

富山県を代表する戦国時代の平城として昭和56年、国の史跡指定を受けた。その後の発掘調査では、油を燃やして明りをとる灯明皿、瀬戸美濃の天目茶椀や中国製の染付皿などの陶磁器や短刀、銅銭などが出土した。

これらを経て平成２年から３年間をかけ濠や土塁を復元され、その後、資料館も建設された。

地元では、平成５年より安田城跡を会場としてイベント「月見の宴」が毎年開催されている。

イベントの開催状況（安田城跡資料館のパンフレットより）

（7）朝日の滝

県道富山小杉線が呉羽丘陵を横断するトンネルの入り口、北側に朝日の滝がある。

この滝は、立山の御来光が当たる霊験あらたかな場所にあり、難病であるハンセン病を治したと云われる。全国から滝に打たれに来る者が大勢あり、江戸時代に茶店や旅館もあって大変賑わったところである。境内にはお堂があり阿弥陀如来、薬師如来、不動明王、賓頭盧尊者（なでほとけ）の４体が祀られ、また大きな欅の木が生い茂っている。

大きな欅の木が立つ御堂境内

（8）根本山中堂寺

根本山中堂寺正面

浄土真宗大谷派寺院。中堂寺古文書寺歴によると、文治年中（1185～90）、木曽義仲に仕えていた五十嵐民部少輔定綱が越前疋田の地で亡くなった。文正年中(1466～67)になり、定綱の末裔で九代孫、助太夫乗清が越前城主朝倉敏景に仕えたあと、比叡山にて勤学し、定綱菩提のため疋田で天台宗中堂坊を営んだことにはじまる。

文明５年(1473)、乗清が吉崎御坊の蓮如上人に帰依し、天台宗から浄土真宗に改宗して乗法と称した。永禄５年(1562)、神保長職が金屋村で上杉勢と戦って敗れる。神保方についた二代乗貞(室は長職の娘)は疋田に逃れたが、やがて越中倶利伽羅辺りに移り、のちに安田村に一宇を建てる。中堂寺は神保長職の準菩提寺となる。天正元年(1573)、三代浄法の時、東西分派の際にしばらく新川郡舟倉村に住む。天正 18 年(1590)、安田城主岡嶋帯刀左衛門尉から小泉村で二町歩の地を受ける。

文禄２年(1593)、本願寺分裂の際、教如についたため弾圧され舟倉に難を逃れる。慶長 19 年

(1614)、舟倉の地で火災に遭う。加賀藩二代藩主前田利長から安田村に 1252 歩を拝領して当地へ移り(この間に一時金屋村に居住)現在に至る。同寺には、南北朝時代の越中守護桃井直常にまつわる開基伝承もある。富山藩主二代正甫公、八代利謙公、九代利幹公からの拝領品あり。

中堂寺は城への通行の際、助作御門を乗物での許可が認められていた。

寺宝として富山城本丸御殿(あるいは千歳御殿とも)から移された欄間がある。扇子模様の欄間は富山城の数少ない貴重な遺物である。ほかにも、秀吉から「天下一」の称号を許されていた辻与次郎作の雪見燈籠（天正元年、1573）など多数ある。

（9）熊野神社（友坂）

富山大学付属病院裏の県道を下ると熊野神社がある。当社は、延喜式内社の論社として取り上げられている古くからの神社である。式内社の多くは古墳時代からの有力な豪族が信仰していた神社を元に平安時代の朝廷が認定した神社で、また熊野神社の信仰の系統には、出雲の熊野大社を元にするものと、紀州の熊野三社（本宮、速玉社、那智社）を元とする二つがある。当社は、創建が大宝２年(702)とされ出雲大社の系統と言われている。友坂は古代より射水平野から呉羽丘陵の峠を越えて富山平野に抜ける交通の要衝で、杉谷古墳群の 4 号墳もあることから出雲と関係の深い豪族が、この地域を支配していたことが考えられる。杉谷古墳群と併せて出雲とのつながりの強い事がうなずける。

友坂の熊野神社

（10）友坂の二重不整合地層

呉羽丘陵南端に位置する富山大学付属病院の南側道路の崖面に 1000 万年～100 万年前までの地殻変動による二重の不整合な面が出ている。1000 万年前の海底火山の爆発により出来た不整合な面(軽石質、凝灰岩など)の上に砂の層、礫層などが重なっている。これは海底であった地層が隆起し、そこに河川が流れ込み砂や石などを堆積させたもので古い神通川の跡とされる。その後、さらに隆起し神通川は、呉羽丘陵の東面へ移動した。このような地層を見ることは大変珍しく、県指定(昭和 55 年 4 月 11 日指定)の天然記念物となっている。

現地の不整合面

（11）婦中町ふるさと自然公園

呉羽カントリーやかんぽの宿・富山に隣接した丘陵一帯（27.8ｈａ）が県の指定を受けた「ふるさと自然公園」となっている。付近一帯は羽根山と称され、８世紀初頭に開基された各願寺や国の史跡指定を受けた「王塚」、「勅使塚」、「五ッ塚」などの古墳があり歴史豊かで、かつ立山連峰も眺められる風光明媚なところである。公園内は管理棟の「ふるさと創生会館」や大池、中池を中心に四季を通じて菖蒲の花やザゼンソウ、ミズバショウ等が楽しめ、また隣接する古洞池や史跡長沢城跡などへも行ける遊歩道が整備されており森林浴にも多くの人が訪れている。

(12) 北叡山各願寺

各願寺の山門

婦中町ふるさと自然公園の東側入口に各願寺がある。

この各願寺は、大宝元年(701)文武天皇の勅命により佛性聖人(ぶっしょうしょうにん)(天武天皇第7皇子、自信院一品親王)が帝都勅願所として創建された。

法燈榮えしころは、寺坊が3千余りを有し北叡山と号し勅額を賜った。南北朝の建武年間(1334～1337)の頃、北陸地方に勢力を伸ばしてきた京の比叡山とたびたび勢力争いを起こし、ついに争乱出火の災厄に会い、一山灰燼に帰し次第に衰えた。

その後秘めたる幾つかの伝説を残すのみとなったが大永3年(1523)玄弘僧都が真言宗の寺として再興した。江戸時代に入り歴代富山藩主の復興帰依の意を受け、特に2代藩主正甫公が度々訪れるなど再び栄え境内で曲水の宴「観桜の宴」が開かれた。

しかし明治3年(1870)に合寺令により寺号を廃し、明治 11 年(1878)復寺が認められ今日に至る。宗派は弘法大師を宗祖とする高野山真言宗で、御本尊は薬師如来像である。

また平成元年(1989)4月 16 日に 300 年ぶりの「曲水の宴」が再現され毎年開かれるようになった。

300 年ぶりの曲水の宴　(平成元年４月１６日)

(13) 六角堂

石仏の厄除大師がまつられる六角堂

婦中町ふるさと自然公園の東面の頂きに立山連峰と対峙するかのように「六角堂」が建っている。明治 42 年、各願寺の秀泰住職がアメリカに移民する同胞の渡米にあたり、船旅の安全と真言宗の布教を合わせて祈願し創建したものである。

祀られている石仏は厄除大師。また周囲に安置されている石像は西国三十三カ所の観世音菩薩の分身で日露戦争において戦死した兵を弔うもので門信徒の方々から寄進されたものである。

また建物は「ふるさと自然公園」に指定された時、門信徒や地区の有志が浄財を集めて新しく建立した。

(13) 馬頭観世音碑と鎮魂碑

婦中町ふるさと自然公園の東面に「馬頭観世音菩薩」と「鎮魂碑」の石碑が並んで立っている。

この新町地帯は、昔から桑を育て八尾へ運んで生計をたてていた。やがて時代が荷車から荷馬車に発達していく中で馬が大事にされ、馬の健康を願って各地で馬頭観音菩薩碑が建てられた。

この「馬頭観世音菩薩碑」は、大正 11 年古里荷馬車組合が県道沿い古沢用水路の近くで建立したものを道路改良に合わせてこの地へ移転したものである。また横に立つ「鎮魂碑」は婦中町畜産協議会が昭和 53 年 12 月に建立したもので、数多く賭した家畜の霊を慰めるものである。

「馬頭観世音菩薩」と「鎮魂碑」の石碑

（14）神保山本覚寺

本覚寺の御堂

婦中町富崎集落の丘陵東面に本覚寺がある。本覚寺は、康永２年（1343）明雲上人が飛騨の国で寺基を建立した真宗大谷派の法覚寺が始まりとされる。

その後、永正２年（1505）婦中町に、永禄５年（1562）に現在の富崎に移転し越中守護代神保氏の菩提寺となる。

境内には、本堂、庫裏、鐘楼、山門等が建ち、特に本尊は、奈良時代後期の銅造楊柳観世音菩薩立像（身の丈 46ｃｍ）で国の重要美術品とされ、次の話が残っている。

９世住職が石山合戦に出向くとき、兵火で焼失するのを防ぐため石ひつに入れて土中へ埋め出発した。その後、住職が大阪で戦死したため本尊の行方が分からなくなった。

その後 130 年余り後の宝永６年(1708)、14 世住職の時、寺地拡張の際に山裾から本尊が発見されたと云う。

また「砂付き梵鐘」が寺の宝とされる。神保安芸守が寄進した梵鐘は、佐々成政が富山城中の時鐘より良い音色を出すと云う事から砂を付けさせたと伝わっている。

「砂付き梵鐘」と云われる鐘楼

(15) 「古洞の森」と県民公園「野鳥の園」

古洞の池　（ドングリ橋より）

富山市三熊に「古洞の森」と県民公園「野鳥の園」がある。

古洞の森は、富山市が農業用水用ダム、古洞の池を活用し農業体験が出来る施設を整備したもので大駐車場、畜産処理加工施設、水辺公園、自然活用村（研修会議室、ケビン、古洞の湯、バーベキュー、レストランなど）がある。

野鳥の園は、富山県置県百年を記念して古洞の池の周辺約 73ｈａを野鳥の保護と自然の探勝を目的に整備したもので、園内に野鳥の観察や自然散策のできる歩道が設けられており、四季を通じ、多くの鳥や樹木の花や実などを観察することができる。

また富山市天文台があり天体観察をはじめ野鳥観察などが体験できる。

〈主な施設概要〉

「散策コース」

・一周コース　　5.7ｋｍ

・半周コース　　2.7ｋｍ

「古洞の池」（農業用灌漑ダム）

昭和 57 年 3 月、富山市、婦中町、小杉町の丘陵部の畑、田など約 756ｈａを対象に農業用かんがい排水事業で整備されたアース式ダムである。

最大貯水水量　　3,495 千m^3

有効貯水水量　　3,320 千m^3

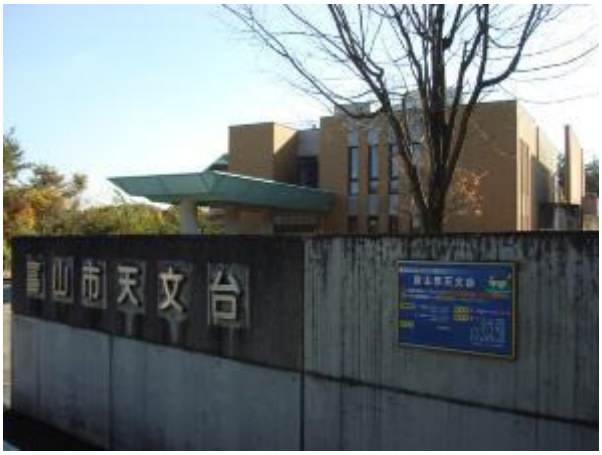
古洞の森管理棟

「古洞の森」（富山市自然活用村）

地下2500mからの温泉を持つ施設で研修、会議、バーベキューレストラン、ケビン（宿泊）など多目的に利用できる。

「天文台」

１mの反射望遠鏡を持ち定期観測及び特別観測などで四季の星空を昼間、曇り空でも紹介している。また展示コーナーでの企画展や野鳥観察も行われている。



富山市天文台

（16）新しい農村住宅「開ヶ丘」

開ヶ丘の市民農園　（遠くに立山連峰が見える）

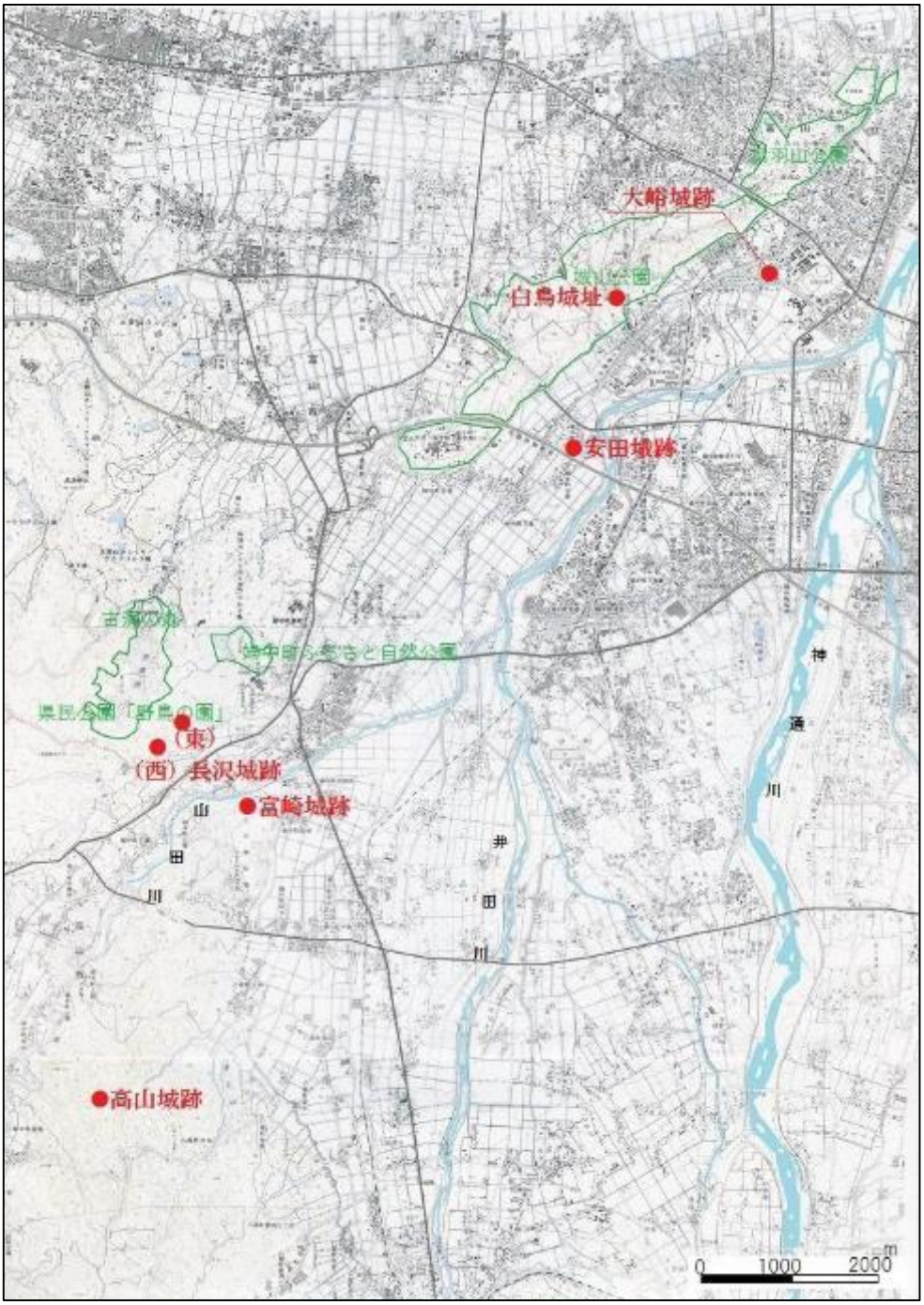
富山市池多地区の開ヶ丘は、呉羽カントリーの北側に位置する畑作地でサツマイモなどが栽培されてきた。この開ヶ丘は、埋蔵文化財の包蔵地でもあった事から、畑地の構造改善事業が後回しとなっていたが灌漑排水事業（古洞の池）の完成などから平成15年より事業着手された。

構造改善事業の完成により、生まれた保留地が優良田園住宅建設計画の認定（「優良田園住宅の建設の促進に関する法律」（平成10年7月施行））を受け新たな農村住宅地となった。

また合わせてＮＰＯ法人による豊かな自然環境を活かした富山市民農園で各種研修会、講習会などを通して里山再生をめざす啓蒙活動事業、そして子供達に土と触れ合い、収穫の喜びを伝えていく教育事業等が行われている。

１１．呉羽丘陵と城（山城と平城）

（1）呉羽丘陵と城のみどころ概要



城の見どころ位置図　（国土地理院発行、1/25,000 地形図）を加筆、縮小

富山県内に城と名がつく数は相当数あると思われる。それは県内が戦争の場になった歴史からも頷ける。

特に有名な戦いは、寿永２年５月（1183年）木曽義仲と平家の戦い「倶利伽羅合戦」、建武２年10月（1335年）「石動山の合戦」その時の勢力者、足利尊氏に対抗した地元越中の武将と越中国司（天皇方）との戦い、そして天正13年８月(1585)羽柴秀吉と佐々成政との戦いなどがある。

このほか一向衆或いは上杉謙信の越中攻めなどを加えたら県内の各地で戦いが行われたことが分かる。

呉羽丘陵がこれらの戦いとどのように関わったか、次の城跡を探ってみる。

- **白鳥城址**　（山城、城山頂上）
- **大峪城跡**　（平城、五福小学校内）
- **安田城跡**　（平城、安田）
- **長沢（東、西）城跡**　（山城、婦中無常山）
- **富崎城跡**　（山城、婦中富崎）
- **高山城跡**　（山城、婦中高山）

（2）白鳥城址

白鳥城址の縄張図

呉羽丘陵の最高峰城山(145.3m)を利用した中世の山城・白鳥城は、今も空堀や井戸跡が残っている。

越中平野の東西を見渡せる軍事上の要衝として戦記に多く名が出てくる。

なかでも天正13年(1585)8月、羽柴秀吉が佐々成政を攻めたとき、この城に入った事がよく知られている。

このほか、源平盛衰記において「今井兼平が寿氷2年（1183）御服山に陣を張った」、また天文元年（1532)、神保長職が上杉との戦いのため築城したことなどが伝えられ慶長4年(1599)頃まで存続していたと云う。

昭和51～57年にかけて富山市教育委員会が城跡の発掘調査を実施し、戦国時代の遺構の下に弥生時代末期・古墳時代初期の土器や住居跡(竪穴遺構)などを発見し県内初の「高地性集落」の存在を確認した。

この頃から軍事上重要な役割を果たしていたことが判る。

現在は、本丸跡広場に天測点や1等三角点が設置されるなど城山公園の中心的な場所として市民からハイキングや散策など身近に使われている。

また城址の入り口付近を通る「富山県中央サイクリングロード」でロードバイクのトレーニングをする者の休憩所としても利用されている。

本丸跡に立つ標柱

（3）旧五福小学校・大峪（おおがけ）城跡

五福小学校の建っている小高い丘が大峪城の本丸跡である。

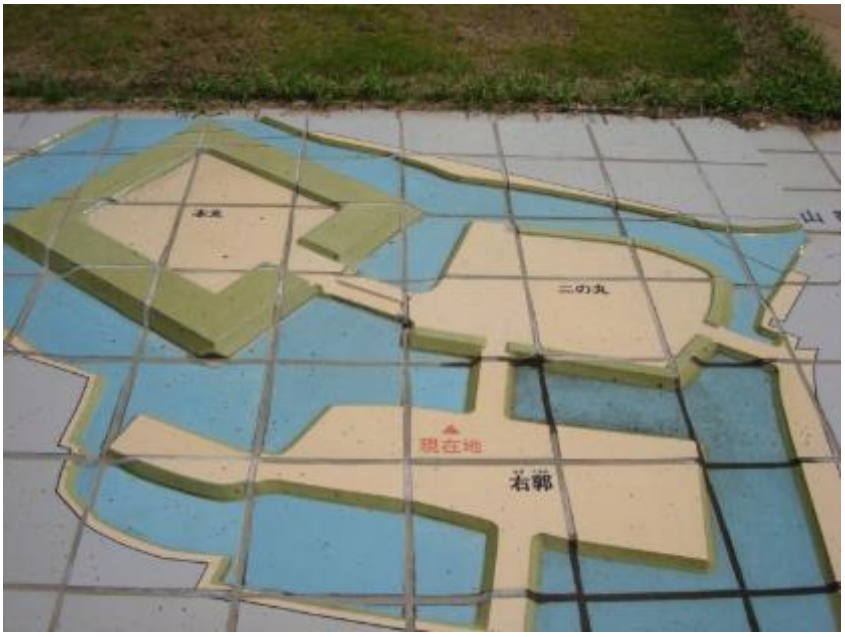
大永年間（1521～1528）越中守護職畠山氏の守護代理であった神保長職が築城したとされる。
その後、織田信長の勢力が拡大し天正９年(1581)佐々成政が富山城に入ってから上杉謙信が、しばしば富山城や白鳥城を攻め（1582）ており、この城も戦禍を受けたと考えられる。やがて佐々成政は越中を制覇するが本能寺の変以降前田利家との戦いや「さらさら越」（天正 12 年 12 月、1584）などをするが孤立し、羽柴秀吉の攻めに降伏することとなる。

この間大峪城は、前田利家が保塁を築いて堅固な平城とするなど白鳥城の支城として役割を果たし、その後、前田利長の時代となり片山伊賀延高が居城した。

廃城の時期ははっきりしないが安田城と共に運命を同じくしたのではないかと思われる。

旧五福小学校が建っている大峪城址

（4）安田城跡



城内の配置図　（配置図がある場所は右郭）

この城は、井田川左岸の扇状地に立地する平城で、堀を含め東西 150m、南北 240mの規模を誇る。

「本能寺の変」以降、天下統一を目指す秀吉が織田の家臣であった佐々成政を討つため天正 13 年（1585）10 万の大軍で越中攻めをした。

これに先立ち先鋒隊の前田利家が白鳥城の支城として安田城と大峪城を造ったとされる。

成政降伏後も成政監視のため前田家の岡嶋一吉や平野三郎左衛門などが居住し前線拠点として使われたが、前田利長が富山城主になると役目も薄れ慶長年間に廃城されたとされる。

富山県を代表する戦国時代の平城として昭和 56 年、国の史跡指定を受けた。

その後の調査では、油を燃やして明りをとる灯明皿、瀬戸美濃の天目茶椀、や中国製の染付皿などの陶磁器や短刀、銅銭などが出土した。

これらを経て平成２年から３年間をかけ濠や土塁が復元され、その後、資料館も建設された。

地元では、平成５年より安田城跡を会場としてイベント「月見の宴」が毎年開催されている。

（5）長沢西城跡

井戸が残る広い曲輪

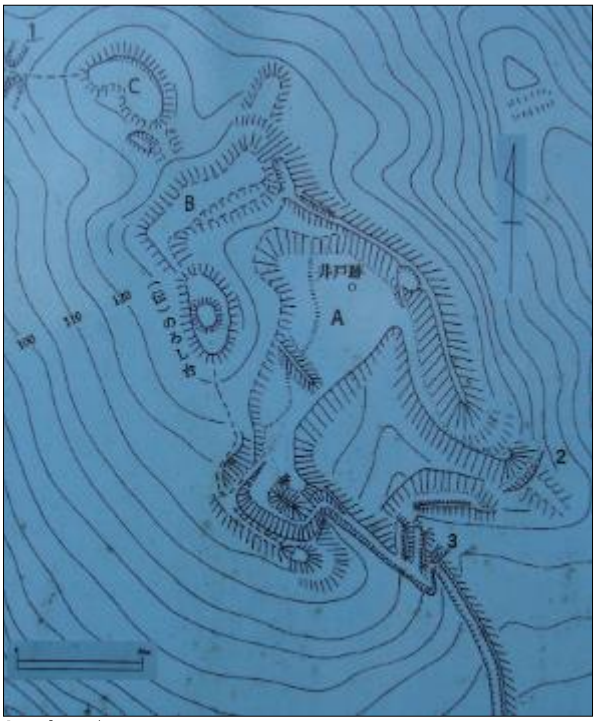
長沢の通称、城山（または石山）と言われる海抜130mくらいの尾根に西長沢城の跡がある。

一般的に東の無常山にある長沢東城と合わせて長沢城と言っている。この城は、東の山裾を流れる辺呂川からの大手口を経て場内に入り、最も広い曲輪（井戸跡がある）から最も高いところの狼煙台に至る。城内は、三回の屈折（枡形）と土塁や平場（武者隠し）の跡が残っており堅固な備えとなっている。しかし山頂から東城及び背後地へ尾根道で繋がっており他の城との連絡路であったと思われる。この城は、何時、誰が築き、どう使われたかはっきりしていないが、『越登賀三州志』『肯搆泉達録』等の記録によれば、南北朝時代（14世紀中期）に構築され、その後、戦略上必要なとき一時的に使われてきたものと思われる。

なかでも中院定清や桃井直和がこの地で戦を繰り広げており、また佐々成政の頃、寺嶋牛之助が居城していたとも伝わっている。

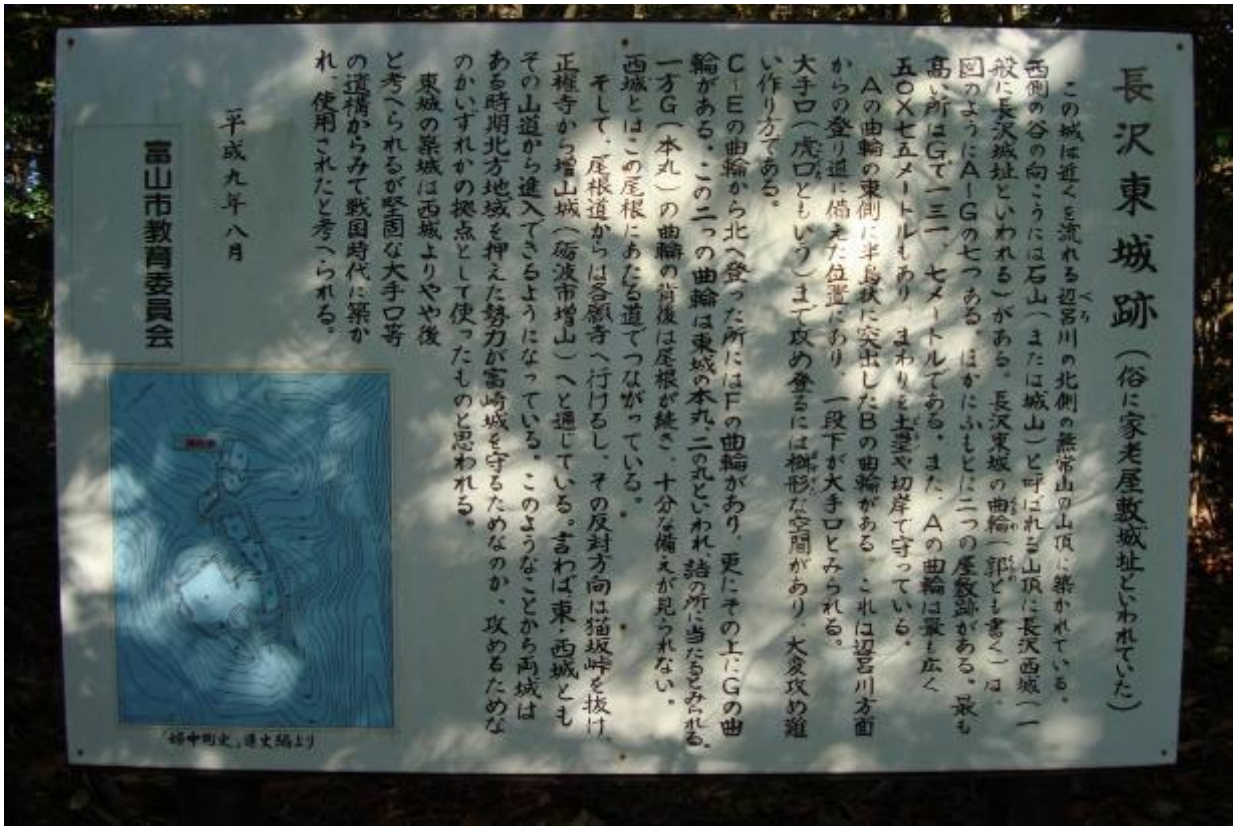
「肯搆泉達録」では、次のように伝えている。

「薬師堂の後ろ、要害の地にて実に建武康安の頃の城地と見えたり、坤（南南西）の方にある山城は境目などの如し、南東は辺呂川を帯び西北は山続きにて谷深き険路なり、古城蔵屋敷跡あり今に焼き米土中にあり、また古井戸石にて甃、今は習す。薬師堂の上の山に勅使塚があり、また外に五つ塚あり首塚なりや後に、寺島牛之助住むとも云う。」



案内板の縄張図　（現地案内板より）

（6）長沢東城跡



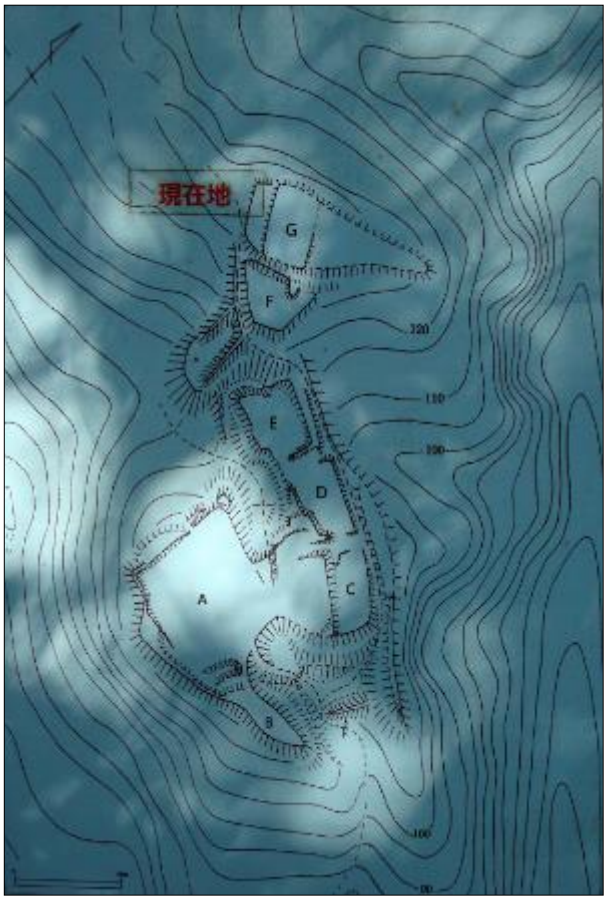
現地の説明案内板

長沢の通称、無常山（海抜約 130m）に長沢東城趾（地元では家老屋敷城址とも云う。）がある。一般的に長沢西城と合わせて長沢城と呼ばれている。

この城は、長沢西城と同じく山裾を流れる辺呂川（山田川の支流）からの登りに大手口（虎口とも云う）があり、上へ昇って曲輪（郭）が７カ所に配置され、最も高い２か所の曲輪が本丸と二の丸跡と言われている。

その背後は、尾根道で長沢西城と繋がり、東へ各願寺、北へ猫坂峠を経て砺波の増山城とも繋がっている。

この城は、長沢西城より後に築城されたと考えられており、南にある「富崎城」を守るため、あるいは攻めるために造られたものと考えられている。

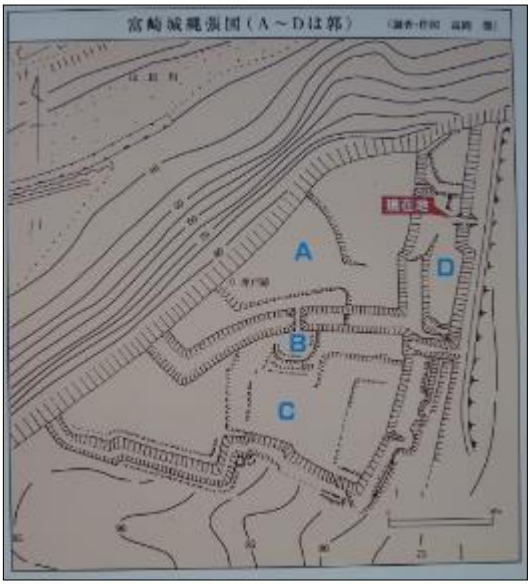


案内板の縄張図　（現地案内板より）

（7）富崎城跡

富崎城跡を示す石碑

山田川が平野部に出る地点の右岸山頂（海抜、92.5m）に富崎城跡（別名滝山城、または福山城とも云われている）がある。付近一帯は「富山県夢の丘牧場」に開発され、富崎墳墓群とも隣接する。この城は、「越登賀三州志」によれば、嘉吉元年（1441）に神保八郎左衛門が居住したとされ、それから 100 年後の天文年間（1532～1552）に神保長職が本格的に築城し神保支配の有力な支城とする。



富崎城の縄張図　（現地案内板より）

この地に城が築かれたのは、南北朝時代から重要な地点で、かつ飛騨へ通じる街道の要所であった事によるものと思われる。伝承によれば神保長職は、永禄年間（（1558～1570）に上杉輝虎（謙信）に攻められ、近くの蓮花寺で討死したとされているが、しかし長職は、天文 12 年（1543 年）に富山城を築城して本居地とし、その後、永禄３年３月（1560）上杉輝虎に富山城を攻められ増山城へ逃げ、永禄５年 10 月（1562）に五福山城（白鳥城）を攻められ、ついに降伏している。

いずれにしても、この富崎城は、神保長職の支城として大きな役割を果たしている。富崎城は、長職の死後（元亀２年 12 月、1571）長職の家臣であった水越氏が一向衆と共に立て篭もり上杉勢に抗したが、翌年９月に上杉謙信に攻められ落城し、焼き払われたと言う。その後、上杉氏が支城として使い天正９年（1581）神保長職の家臣であった寺島牛之助が、ここを拠点に織田勢に対抗したが同年５月、焼き打ちに合い五箇山に逃げている。

上杉謙信の死後、織田信長が勢力を増し佐々成政が富山城に入り富崎城を支城として使い、八尾城生城の斉藤氏攻めの拠点となったとされるが不明である。

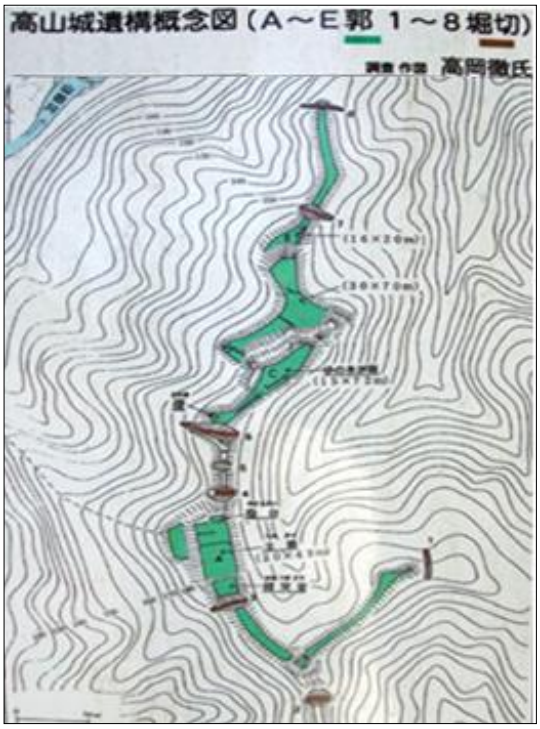
また廃城されたのは、佐々成政が豊臣秀吉に降伏した天正 13 年（1585）頃と考えられている。

富崎城は、山城として高い場所にあるわけでないが、山田川に面して断崖で守られ、二重の堀や広い郭、井戸を備え、馬出も設けている事が注目される。今も遺構をはっきり残しており、近年まで主郭（本丸）付近から焼米が出土したとされる。

（8）高山城跡

高山城跡山頂、ゆのきが原から眺める風景

山田川が平野部に出る前の右手山頂（海抜、約 190m）に高山城（別名三瀬城、または榎城とも云われている）がある。付近一帯は、婦中町で一番高いところで山頂に大きな榎木があり富山平野はもちろん砺波の方まで眺望できる。また山田川を下った地点に神保長職が築城した富崎城跡がある。城内の縄張りは、尾根伝いに５カ所の曲輪があり、三重の堀切で分断し一郭別城の形を取っている。切崖も急で堀切も深く南北 460mの守りが固い城域となっている。当時重要であった富崎～三田関所間の道路を守り、かつ富崎城より高い位置にある事など詰城の働きをしていたものと考えられている。また中腹では、集落跡があったと思われ、今でも「町ヶ平」と云う地名や茶畑が残る。地元では、高山集落の山岡家屋敷に神保氏の重臣であった寺島牛之助の墓があるとされることから高山城に居城していたと云われている。



高山城の縄張　（現地説明板より）

１２．呉羽丘陵と遺跡（遺跡の宝庫）

（1）呉羽丘陵と遺跡のみどころ概要

遺跡分布位置図
（国土地理院発行 1/25,000 地形図）を加筆、縮小

呉羽丘陵の裾野は、水田が広がる地帯で圃場整備が進んでいる。これらの工事に合わせて埋蔵文化財の調査が各地で行われ多くの集落跡や古墳、窯跡などが発見された。

その分布をみると丘陵部に古墳が多く、平野部に貝塚や集落跡、窯跡が見られる。

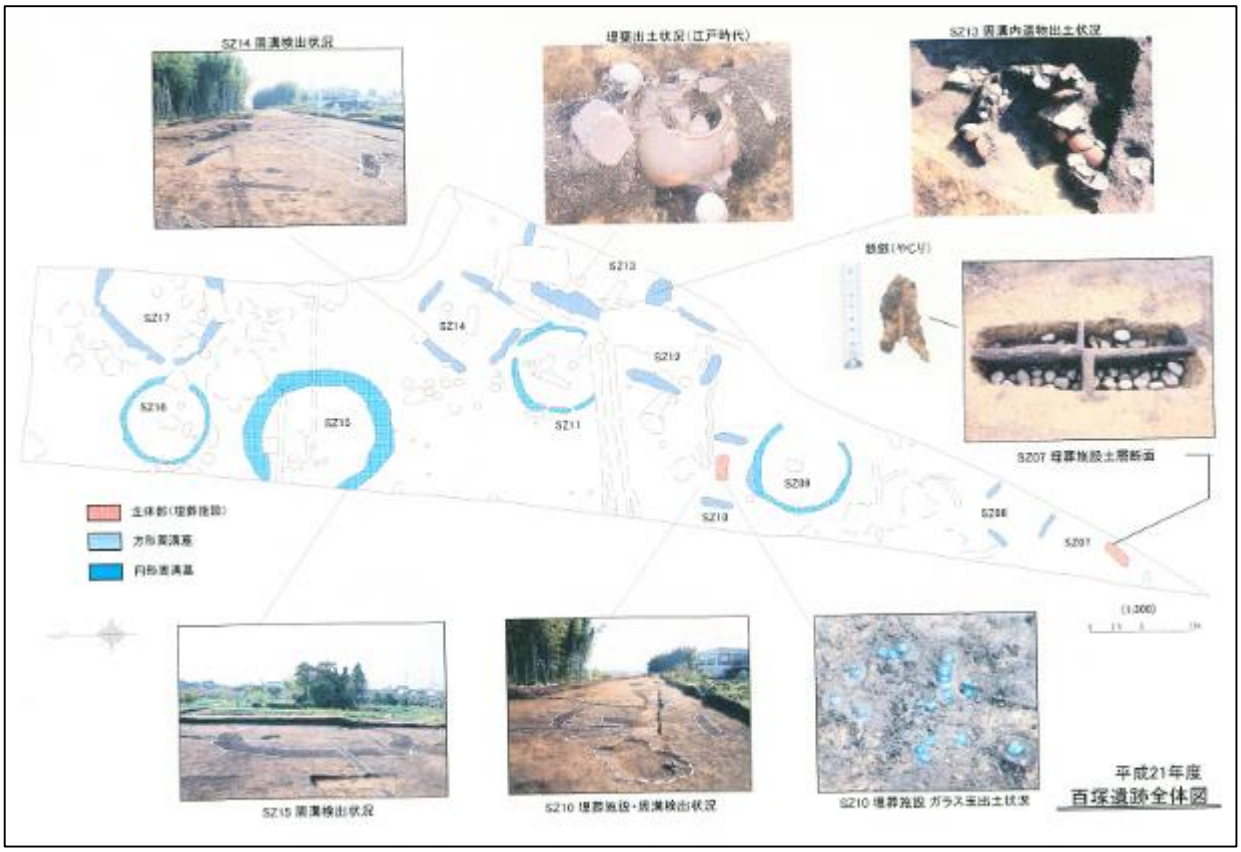
特に注目されている遺跡は、新幹線工事などで調査された「小竹貝塚」で、貝が堆積している厚さ 2m におよぶ貝層と共に縄文人の人骨 91 体が発見された。これは全国で発見されている総数を上まる数である事から全国的に注目を浴びている。

また出土した土器類には、地元で作られたものの以外に近畿、関東、東北で作られたものや長野、岐阜、新潟産の石材のものがあった。住居跡も想定されることから他の地域との交流を示すものである。

もう一つ特長的なものに、杉谷 4 号墳に代表される四隅突出型古墳である。これは出雲地方に集中する古墳形態であるが杉谷から長沢地区にかけて 7 基確認されている。

さらに国の史跡指定を受けている王塚・千坊山遺跡群などがあり、これらを紹介する。

（2）百塚遺跡



平成 22 年、発掘調査説明会資料より

富山市百塚の神通川河岸段丘上の牛ヶ首神社付近で弥生から古墳時代（約 2000～1800 年前）に築かれた方形周溝墓や円形周溝墓など 11 基、ほかに前方後円墳などが多数発見された。なかでも方形周溝墓の埋葬施設からガラスの小玉が 96 点も出土するなど集団の有力者の墓と考えられる。また近畿地方に多い前方後円墳からも広域的なつながりがうかがえる。

この調査は、都市計画道路草島西線の整備に先立ち平成 17 年、18 年と行われた。

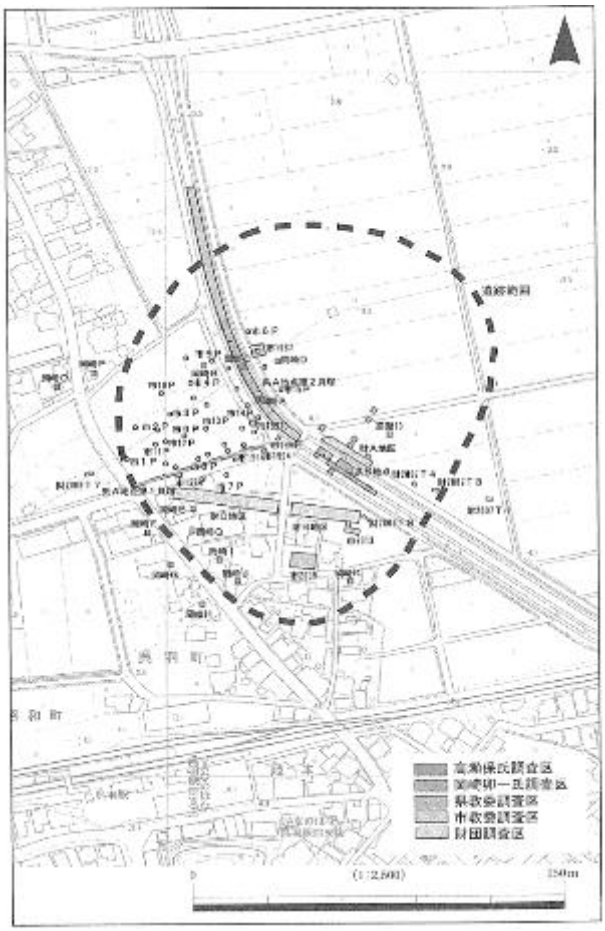
（3）蜆ヶ森貝塚

富山市北代、北側に白鬚神社があり、境内から貝塚が発掘された。この貝塚は、小竹貝塚の東方約 200m、北代の白髭神社境内にある淡水産貝塚で、縄文時代前期（6000 年から 5000 年前）の北陸地方を代表する貝塚の一つである。縄文海進の際広がった旧放生津潟べりに貝塚が形成され、出土する貝殻のほとんどが蜆である。そのなかでもヤマトシジミが 79%を占め、ヒメニホンシジミ、マシジミ、サルボウなどが確認されている。他にもシカ、イノシシ、アナグマの獣骨や骨角器・人骨・石器・縄文土器などが出土している。出土した縄文土器の胴部は羽状文で、口辺に無文帯がつくられ微隆起線文をひいた特徴的なもので、このような特徴をもつ土器から縄文時代前期後半の「蜆ヶ森式土器」として標識化されている。また姉倉比賣神社に伝わる伝説では、蜆ヶ森の貝が蝶となって姉倉姫の機織りを助けたとされる。

田んぼの中にたたずむ白鬚神社

（4）小竹貝塚

現地説明会の風景



小竹貝塚の範囲図

小竹貝塚は、呉羽昭和町から高木地区で、井戸掘削や送電線鉄塔工事などで、貝殻が出土することで、その存在が想定されていた。

昭和 33 年、地元の方々の協力を得た高瀬保氏の調査でその存在が確認され、この成果を基に昭和 39 年の岡崎卯一氏の調査で、日本海側では数少ない縄文時代前期（約 5500～6800 年前）の貝塚であることが判明した。

現在貝塚は、海岸線から約４㎞内陸で標高約３ｍに位置している。

しかし貝塚が営まれた頃は、世界的な温暖化傾向で海水面が現在より５ｍほど高い状態（縄文海進）であった。

このため射水平野は、水没し貝塚のすぐそばまで潟湖（後の放生津潟、現 富山新港）が広がっていた。

本格的な調査は、昭和 46 年の新鍛冶川の用水路掘削に先立つ調査である。

大量の出土遺物と共に、1 体の縄文時代前期の埋葬人骨が発見された。

その後、平成３年の調査で２体、平成 20 年の調査では６体の埋葬人骨が発見されている。

平成 21･22 年の北陸新幹線の建設工事に先立つ調査では、現地表下約２ｍに、最大厚約２ｍの貝層の広がりを確認した。

大量の遺物と共に一挙に 91 体の埋葬人骨が発見された。

これまで国内で発見された縄文時代前期人骨の総数が 80 体ほどであり、小竹貝塚だけでこの数を上回ることから全国的に大きな注目を集めた。

埋葬人骨から様々なことが分かった。年齢構成は「青年期」が最も多いこと、身長 165 ㎝を超える大柄な男性（縄文時代男性の平均身長 158 ㎝）も確認され、体格的にも個人差が存在することが分かった。

また、副葬品には男女差が見られ、男性は磨製石斧や石匙（いしさじ）などの実用品、女性は耳飾りや垂飾などの装飾品が副葬されていた。

人骨の食性分析では、陸上生態系と海洋生態系の双方の食物を取っており、食生活の違いが男性で大きいことが明らかとなった。

また、人骨のそばからイヌの骨が出土しており、「飼いイヌ」の可能性がうかがえる。

その他の出土品として、縄文土器は地元で作られた土器だけではなく、近畿・関東・東北で作られた土器や、漆が塗られた土器が出土している。石器も長野・岐阜・新潟産の石材が使われ、国内最古級のヒスイの加工品も見つかっている。

骨や貝殻を加工した骨角器には、九州・伊豆諸島以南でしか生息しない「オオツタノハ」の貝輪も含まれていた。

小竹貝塚は地下深く低湿地にあるため、空気や細菌などの腐敗要因が遮断され、そこに貝層のカルシウム分が加わり、通常であれば腐敗する埋葬人骨をはじめ木製品などの有機質の製品が非常に良好な状態で残っていた。

これら発見された遺物は多種多様のもので、他地域との交流を示すものも多く、小竹貝塚が多くの人々が集散する多様な側面をもつ遺跡であったことを物語っている。

今回の調査では貝塚全体の 1 割程度しか発掘を行なっておらず、その大半は現在も、地下深くに非常に良好な状態で残っていると考えられる。

規模・内容とも「日本海側最大級の貝塚」の様相が垣間見えてきた。今後の調査により新たな発見が期待される。

出土した石鏃など

貝塚の貝層

出土した埋葬人骨

（富山県埋蔵文化財センター資料より）

（5）北代縄文広場

再建された竪穴住居など

出土した土器（深鉢）

富山市北代、あいの風鉄道北側に北代縄文広場がある。

この遺跡（東西 280m、南北 200m）は、縄文時代の 1000 年も続いた集落跡で高床建物跡が４棟以上、竪穴住居あとが 75 棟以上見つかっている。

集落の中心に広場があり、高床建物を建て、広場を囲むように竪穴住居が建てられていた。北側に谷があり、水が湧き出し飲み水やドングリのアク抜きなどに利用されたと考えられる。

また縄文人が使った道具（土や石、動物の骨で作られたもの）や土偶・三角形の土製品・タカラ貝形土製品などおまじないやお祈りに使ったと思われる遺物が見つかっている。

昭和 59 年に国の史跡に指定され当時の住居などが復元され体験施設や展示場などもある。

（6）番神山横穴墓群

呉羽山民俗民芸村の通称番神山に番神山横穴墓群がある。

昭和 3 年の土砂採取（富岩鉄道の盛土）工事中に 8 基の横穴墓が発見され、また昭和 40 年の工事で 7 基の横穴墓が確認、調査された。

横穴墓は、古墳時代中期から終末期（飛鳥時代）の墓制の一つで丘陵の斜面に横穴を掘って墓室を作るもので、特に横穴式石室をもつ古墳は少なく、番神山で３基確認されている。

富山県内では、氷見の丘陵地や高岡二上山周辺地域に集中しており、呉羽丘陵の番神山横穴墓群と、金屋陣の穴横穴墓群は県内最東端に位置するとともに、日本海沿岸地域の最北端の横穴墓でもある。墓室からは、４から５体分の遺骨が残っていた横穴墓もあったが須恵器、大刀、刀子、管玉、耳環などが出土している。これらは戦災により失われ、その後採集等された須恵器や鉄製品の年代から、6 世紀後葉から 7 世紀後葉にかけて造営されたと考えられている。

（7）呉羽山古墳群

呉羽丘陵一帯は、北端の百塚遺跡から南側境野新、開ヶ丘、富崎墳墓群まで多くの遺跡や古墳が確認されている。

なかでも金屋から杉谷の東斜面に集中して墳丘の主軸を方位に合わせた古墳発生期（土器が出土）の方墳系古墳群が並んでいる。

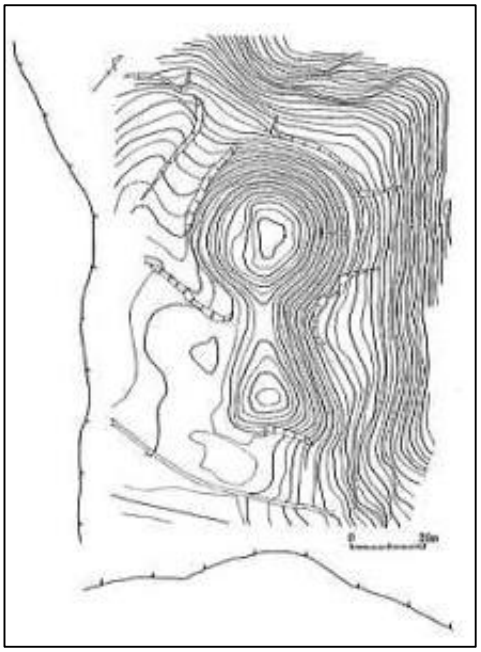
（8）古沢塚山古墳

県道富山小杉線のトンネル山頂部、海抜 95mに位置する古沢塚山古墳は、昭和 50 年に発見された。

この古墳は、前方部と後方部の高低差がほとんどないことから 5 世紀前半古墳中期の未発掘の古墳で、全長 40.95mの前方後円墳で前方は長さ 16m、幅 11m、後円は直径 25mの大きさ、また北と東の墳裾にテラス面を持っている。

富山県にある前方後円墳の東端と云われ、また呉羽丘陵周囲の前方後方墳(杉谷一番塚、婦中町勅使塚、王塚古墳など)の中で最も新しいものとされている。

前方後円墳がある古沢塚山周辺



古沢塚山古墳実測図

（9）古沢遺跡

この遺跡は、旧石器時代から奈良・平安時代まで人々の生活が営なまれた場所である。

6 回にわたる調査で、縄文時代に属する多くの遺構と、奈良・平安時代の竪穴住居跡 6 軒や製鉄に関わる遺構などが発見された。

直径 1.5m ほどの縄文時代後期(約 3500 年前)の穴からは、炭化したドングリやトチの実が発見され食糧貯蔵用として使われていたことがわかる。

また中期から晩期にかけて、祭祀を行ったと推定される施設をもつ大型の袋状の穴、縄文土器を 10 個分も埋めた穴、石刀や笛と考えられる土版を埋納した墓穴など、いろいろな用途の穴がくりかえし築かれていた。

遺構からは、縄文土器や石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹み石、石皿など狩猟・漁ろう・植物加工の道具、土偶、土版、三角とう型土製品、石棒、石冠などまつりの道具が数多く出土した。

古沢遺跡に住んだ人々は、呉羽山丘陵の豊かな自然の恵みを祈りながら長い間生活を続けたことがわかる。

古沢遺跡の現況

（10）境野新遺跡及び向野池遺跡

向野池遺跡から出土した瓦塔

富山西インターチェンジ及び周辺の企業団地周辺に境野新遺跡及び向野池遺跡がある。

調査は昭和 47 年度の圃場整備に先立って行われた調査から、平成 12 年以降の富山西インターチェンジ設置工事に伴う調査まで数次にわたって行われた。

境野新遺跡は、昭和 47 年の発掘調査で古墳時代の竪穴住居が見つかり、現在遺跡公園として整備されている。平成 12 年調査では、南北に横切る大小の溝や、穴を検出した。遺構の時期は特定されていないが、溝の中からナイフ形石器・剥片「旧石器時代後期」・縄文土器・石錘「縄文時代晩期」、須恵器「奈良から平安時代」、越中瀬戸焼・伊万里焼の陶磁器片「江戸時代」が出土した。また石器を作るための原石などが発見されており、この地で石器が製作され生活を営んでいたものと想定されている。向野池遺跡は、かつてのかんがい用溜め池「向野池」の北東に位置し、旧石器・弥生・平安時代の集落・生産遺跡である。

最初の昭和 47 年調査では、平安時代（約 1100 から 1000 年前）の土師器焼成坑４基、井戸３基、大型建物を含む掘立柱建物 15 棟以上、製炭土坑などが見つかり、甕や鍋などの日常容器とともに、瓦塔（仏具）が出土した。その後平成 12 年度調査では、土師器焼成坑４基、井戸２基、掘立柱建物４棟以上などを発見した。

瓦塔とは、寺院の五重塔などを部分ごとに焼いて組み合わせた、高さ１～２ｍほどの瓦の塔で、仏教的色彩の強い遺物である。奈良～平安時代に多く作られ、集落の小さな祀堂などに納められたと推定されている。

平成 18 年度調査では、平安時代の掘立柱建物８棟、井戸１基、鍛冶炉１基、製炭土坑 21 基、弥生時代の竪穴住居２棟、縄文時代の竪穴住居１棟、土坑などが発見された。

集落の建物の配置は軸方向がほぼ同一で、計画的に配置されていた。そして柱穴からは、多量の鉄滓、ふいごの羽口、鍛造剥片、製炭土坑からは、炭化物が出土した。また旧石器時代の尖頭器・凝灰岩質の剥片２点・安山岩の剥片、縄文時代の打製石斧も出土した。

このように両遺跡では西と東の旧石器技法で製作された石器が見つかっており、当地が約１万５千年も昔から東西旧石器文化の交流地域であったとうかがえる。

(11) 栃谷南遺跡

出土した同じ笵の軒丸瓦

出土した鐘鈴

栃谷集落の周辺に広がる水田中央部に栃谷南遺跡がある。

圃場整備に先立ち平成 10 年から行われた発掘調査で白鳳時代末から奈良時代前半（約 1300 年前）にかけての須恵器の窯跡 1 基と、須恵器と瓦を焼いた窯跡（瓦陶兼業窯）1 基が発見された。

また、建物の柱穴跡、粘土を掘り出した採掘穴、井戸跡が発見されたことから、遺跡は粘土を採掘し、窯の築造から、土器や瓦を焼成するまで一連の作業を行う生産工房であったと思われる。

出土した瓦類は、数千点（軒丸瓦・丸瓦・平瓦）におよび、中でも「単弁八葉蓮華文軒丸瓦」が 130 点以上で、これだけ大量の軒丸瓦が発見された例は、全国的に数少ないものである。

また、軒丸瓦は、同じ笵（木版に文様を刻んだ型）を用いて作っており、短い間に集中して生産していたものと思われる。

一方、平瓦は、出土した数がわずかだが、凸面を縄巻いた板でたたいて形づくる「桶巻作り」という技法で作られていた。

その他、琥珀製の「対葉花文の透彫り」（東大寺が造営された頃の仏像台座などの文様）と「鐘鈴」（鐘状の銅製品）が発見された。

これらは、古代仏教に関連する遺物であること、また出土した瓦の特徴から、この地の有力な豪族が都から瓦工人を招き瓦製造して、近くの寺院や官衙（役所）へ供給していたと思われる。

(12) 平岡遺跡

県道八尾小杉線ぞいの標高約 60ｍの丘陵上に平岡遺跡がある。

昭和 26 年発行の森秀雄著『大昔の富山県』にも登載されており、古くから縄文時代前期後葉（5500 年前）の遺跡として知られている。

遺物は、栗山邦二氏が採集されたものだけで 1000 点以上あり、ていねいに加工された石鏃・石錐・石匙などが多く、中でも石鏃は、県下で最多の出土数とされる。

石器に使われている石材は、鉄石英・頁岩・黒曜石・安山岩・下呂石などさまざまであるが、このうち黒曜石の産地は、長野県諏訪星ヶ台群（旧霧が峰系）が約９割、和田峠が約１割とされる。

また、滑石や蛇紋岩を使ったけつ状耳飾や管玉など装飾品も 100 個程度が採集されている。

現在、県道小杉婦中線の道路工事が行われており、平成 21 年度の試掘調査でも、縄文時代前期の遺構の上に、奈良・平安時代の遺構が確認されている。

さらに平成 25 年度にも道路工事に合わせ調査が行われており、今後も続くものと思われる。

(13) 開ヶ丘遺跡

大型住居跡の柱穴　(発掘当時の写真)

出土した土偶

出土した耳飾り

開ヶ丘遺跡は、呉羽カントリー北側の開けた畑地一帯にある。県営畑地帯総合整備事業（呉羽射水山ろく地区）に伴い、平成13年度より調査が行われ、縄文時代から奈良、平安時代の人々の生活を営んでいた住居跡などが発見された。

平成13年度調査では竪穴住居4棟（縄文代時代中期前葉から中期約4500から5000年前）と石組炉が検出された。また竪穴住居の中などから縄文土器や土偶の一部、石斧、石鏃、石匙、黒曜石の剥片などが大量（コンテナ箱に約50箱分）に出土した。

平成14～15年度の発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居75棟、掘立柱建物6棟などが確認された。竪穴住居は、形が円形や楕円形、方形などさまざまで中央に調理や暖をとるための炉があった。炉の多くは石で囲いを作った石組炉で、石を二重に囲んだものや、長さが 1.5mを超える大型のもの、また石囲いの中に土器及び破片を敷き詰めたものなどさまざまな種類がみられた。住居の平均的な面積は20平方メートル前後で、最も大きい住居が約35平方メートル、最も小さい住居がその10分の1の約3.5平方メートルである。掘立柱建物は、遺跡の南部から6棟見つかり、柱の穴が長方形に並んだもので、高床または地面を床にした建物と考えられる。このうちの1棟は、建物の長辺（桁行）が11.5m、短辺（梁間）が3.5mもあり、きわめて大型のもので食料の貯蔵庫、祭祀にかかわる建物、夏季の住居など様々に使われていたと推定されている。竪穴住居内から多量の道具類が出土した。

最も多いのは煮炊きや貯蔵に使ったとみられる土器で地元のほか、新潟県や東北地方の土器に似たものが見つかっている。石器は、矢の先に付ける石鏃など狩猟用の道具のほか、木材伐採用の磨製、土掘り用の打製石斧、漁網用の石錘、ドングリなど堅果類を磨り潰すための磨石や石皿などが出た。さらに日常生活に使った道具のほかに、土偶や三角とう形土製品など呪術に関係する道具も出土している。また耳たぶに孔をあけて着ける耳飾りや琥珀・滑石で作った玉など、当時の人々が身に着けた装身具も見つかっている。

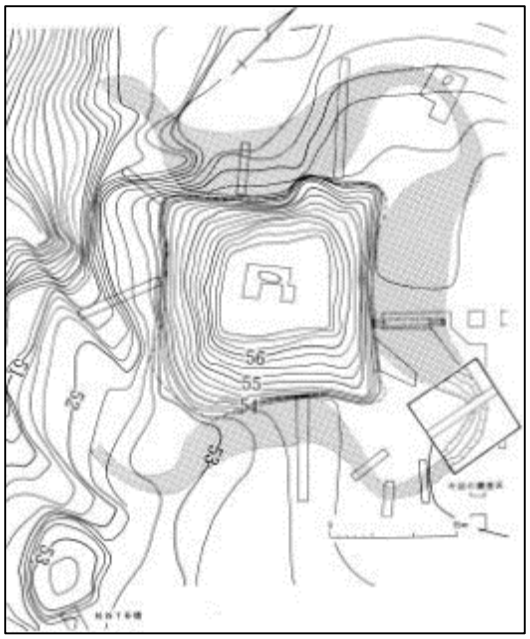
遺跡の周辺には湧水地があり、当時の人々にとって大変暮らしやすい土地で確認された竪穴住居75棟と掘立柱建物6棟など、すべてが同時に存在していたのではなく幾世代にもわたって住んでいたものと思われる。

(14) 杉谷古墳群

杉谷４号墳・四隅突出型古墳　（富山大学医科薬科学部構内）

富山大学医学部、薬学部の付属病院がある敷地内に７基の古墳と１遺跡がある。

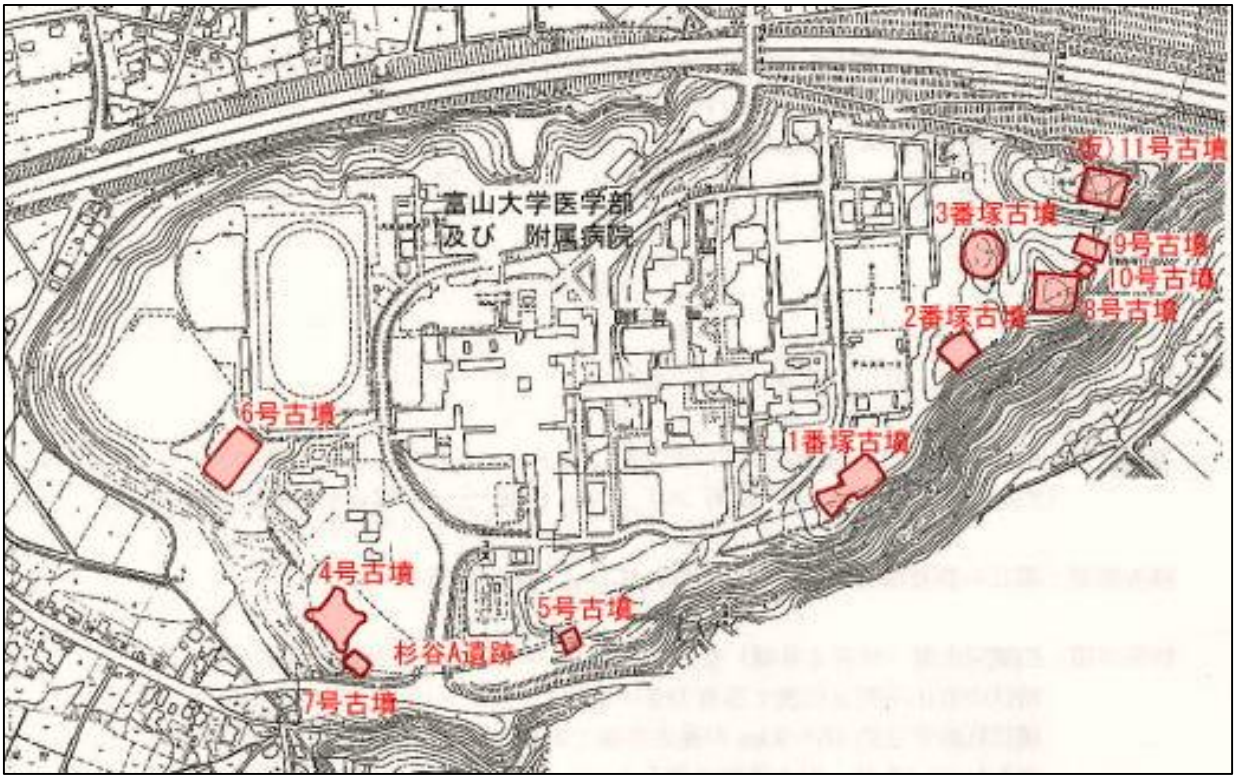
調査は大学の設置に先立って行われたが、その後昭和 49 年の概要調査で 11 基の出現期古墳とそれに関連する方形周溝墓群が確認された。また古墳群からガラス小玉、素環頭太刀、銅、鏃などが出土し古墳時代の権力者の墓であったと云われている。また古墳では、四隅突出型古墳（４号墳、一辺が 25m）と云う出雲を中心に日本海沿岸に散在する古墳があり、古事記や出雲風土記に出てくる出雲との交流がうかがえる。



杉谷４号墳の平面図

出土した素環頭太刀と台付き長頸壺

（2009.3 古沢地区ふるさとづくり推進協議会より）



杉谷古墳群平面図

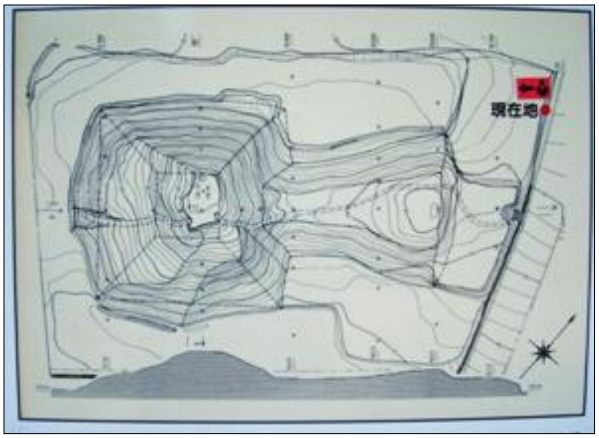
(15) 王塚・千坊山遺跡（国の史跡指定）の概要

井田川・山田川流域の扇状地と、呉羽山丘陵南側にあたる羽根丘陵、富崎丘陵に弥生時代後期から古墳時代前期の集落、墳丘墓、古墳が群をなし分布している。古墳出現期の動向が集落と墓地の両面から追える貴重な遺跡群で、かつ日本海沿岸交流を示唆する四隅突出型墳丘墓もある事から歴史的に高く評価され平成17年3月2日、史跡王塚古墳(昭和23年指定)に6遺跡が追加指定され、名称が変更された。遺跡群には、越中を代表する前方後方墳の王塚古墳・勅使塚古墳、分布域の東限である四隅突出型墳丘墓が4基(2箇所)、前方後方墳への過渡期の墳丘形態を示す前方後方形墳丘墓が1基、首長に繋がる系譜の集団と考えられる千坊山遺跡の弥生集落、首長を支えた層の墓地と推測される富崎千里古墳群がある。
これらの概要を次に表記する。

名　称	面積(㎡)	区　分	概　要
王塚古墳	2,452	前方後方墳	全長58m、後方部高さ7.6m、県内4番目の規模
勅使塚古墳	22,617	前方後方墳	全長66m、後方部高さ8.8m、県内2番目の規模
千坊山遺跡	45,654	弥生集落	竪穴住居24棟、住居の平面形は円形と方形の2種
六治古塚墳墓	2,490	四隅突出型墳丘墓1基	一辺24.5m、高さ5.1m、突出部長さ7.2m、周溝がめぐる
向野塚墳墓	1,896	前方後方形墳丘墓1基	全長25.2m、後方部高さ1.7m、周溝と墳頂部に墓坑確認
富崎墳墓群(1・2・3号墓)	8,118	四隅突出型墳丘墓3基	1、2号墓は一辺21.7m、高さ3m、突出部長さ6mで、周溝がめぐる。3号墓は一辺22m、高さ3.9m
富崎千里古墳群(南群)	27,651	前方後方墳1基 方墳12基、円墳1基	14基で構成、前方後方墳(9号墳)は全長34m、後方部高さ4.1m 円墳（10号墳)は直径20m、高さ4.3m、方墳は一辺15m前後、高さ3m前後

（16）王塚古墳

入口付近から見た王塚古墳



古墳平面図　（現地案内版より）

「かんぽの宿・富山」の入口に国の史跡、王塚・千坊山遺跡群の代表格である王塚古墳がある。

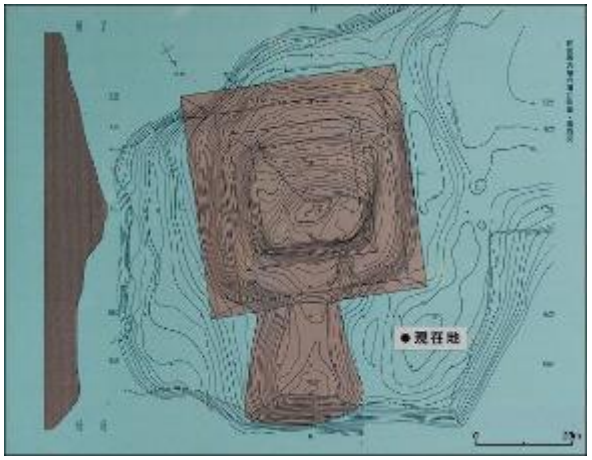
約 1700 年前の古墳時代前期の前方後方墳で全長 58mの大型の古墳（県内で 4 番目の規模）で後方部は、長さ 31m、幅 33m、頂部の高さ 7.6m、前方部は、長さ 27m、幅 26m、くびれ部の幅 15m、高さ後方部と５mと大きく差があり前期古墳の特徴を持っている。

被葬者は、婦負地域を統治した首長と推定されているが、各願寺の開僧佛性聖人とも伝わり石碑が建っている。内部施設や副葬品などの存在が確認されていないが、墳丘形態から勅使塚古墳築造直後に造られたものと考えられる。

昭和 23 年に国の史跡指定を受ける。

（17）勅使塚古墳

山中にひっそりたたずむ勅使塚



古墳平面図　（現地案内版より）

国の史跡指定を受ける王塚・千坊山遺跡群の一つである勅使塚が王塚古墳より南西側 500m、谷を挟んだ山中にある。

県内最古の前方後方墳で、かつ全長 66mで県内第２位の規模を誇っている。

後方部は、長さ 35m、幅 37m、頂部高さ９m。

前方部は長さ 31m、幅 24m、高さ 3.5m、くびれ部の幅 11mで、先端部が楔形に開くなど前期古墳の特徴を残している。

また後方部の中央に長方形の墓坑（長さ 6.2m、幅 6.1m）が確認され木棺が安置されていると推測される郭の痕跡がある。

遺物は、３世紀末の土器（壺、高杯、蓋などの器）が発見されており墳丘頂部に供えられていたものといわれている。

(18) 千坊山遺跡

弥生時代終末期の大規模な集落遺跡で、独立した台地に24棟の竪穴住居跡が発見されている。

王塚古墳・勅使塚古墳との地理的関係などから古墳時代の首長が生み出した集団の集落と推測され、また背後の丘陵縁辺部にある六治古塚墳墓・向野塚墳墓・添ノ山古墳(消失)の３基の墓も、この集落が築いたと考えられている。

(19) 六治古塚墳墓

弥生時代終末期に築かれた四隅突出型墳丘墓で河岸段丘南縁辺部に立地し、南方の谷に辺呂川が流れている。

一辺24.5m、高さ5.1mと大型で、突出部は長さ7.2m、幅10.6m。墳丘周囲の丘陵側に溝が巡っている。

六治古は、人の名前で羽根（長沢地区）の開拓者と言われているが、居住域は平野側にある千坊山遺跡と考えられる。

六治古塚墳墓

(20) 向野塚墳墓

弥生時代終末期から古墳時代初頭に築かれた県内最古の前方後方形墳丘墓である。六治古塚墳墓の110m北東に位置し、全長25.2m、前方部は長さ10.2m、幅8.1m、後方部は長さ15.0m、幅16.5m、頂部の高さ1.7m、くびれ部幅5.1mで、周溝が巡っている。遺跡群唯一の前方後方形墳丘墓で前方後方墳への過渡期の墳丘形態。居住域は、六治古塚墳墓と同じ千坊山遺跡と考えられている。

(21) 富崎墳墓群

富崎墳墓群の四隅突出型古墳　　**現地調査時の写真**　（現地説明案内板より）

山田川右岸の富山県夢の丘牧場の北東側に富崎城跡と並んで富崎墳墓群がある。

約1,800年前の弥生時代後期から末期の四隅突出型古墳３基で構成され、１号墳及び２号墳は、近接し、ほぼ同じ大きさで一辺約21.7m、高さ約３m、突出部の長さ約６mで周囲に溝が掘られている。３号墳は、南北22m、東西21m、高さ3.9mと大きく、突出部を削り出して整形せれている。

また墳丘の裾から装飾豊かな弥生土器が多く出土している。

さらに周辺から長さ 2.5m、幅１mの土壙墓と考えられる土坑と壷、４個体、甕、１個体が出土した直径 1.3m、深さ 0.7mの円形の土坑が検出されている。

四隅突出型の古墳は、呉羽丘陵周辺部で杉谷古墳群１基、と六治古塚墳墓１基、鏡塚２基と合わせて７基が確認されている。居住域は、後期から終末期までが高地性集落の富崎赤坂遺跡・離山砦遺跡で、終末期にふもとにある富崎遺跡に移ったと推測されている。

(22) 富崎千里古墳群（南群）

古墳時代前期に築かれた県内有数規模の古墳群で、富崎丘陵の東縁辺部に立地する。南群 14 基(前方後方墳１基、円墳１基、方墳 12 基)、北群３基(方墳３基)で構成され、前方後方墳の９号墳を頂点に、方墳や円墳が並ぶ光景は圧巻である。首長を支えた小地域の統率者たちが計画的に葬られた墓域と考えられる。

(23) 五ッ塚古墳

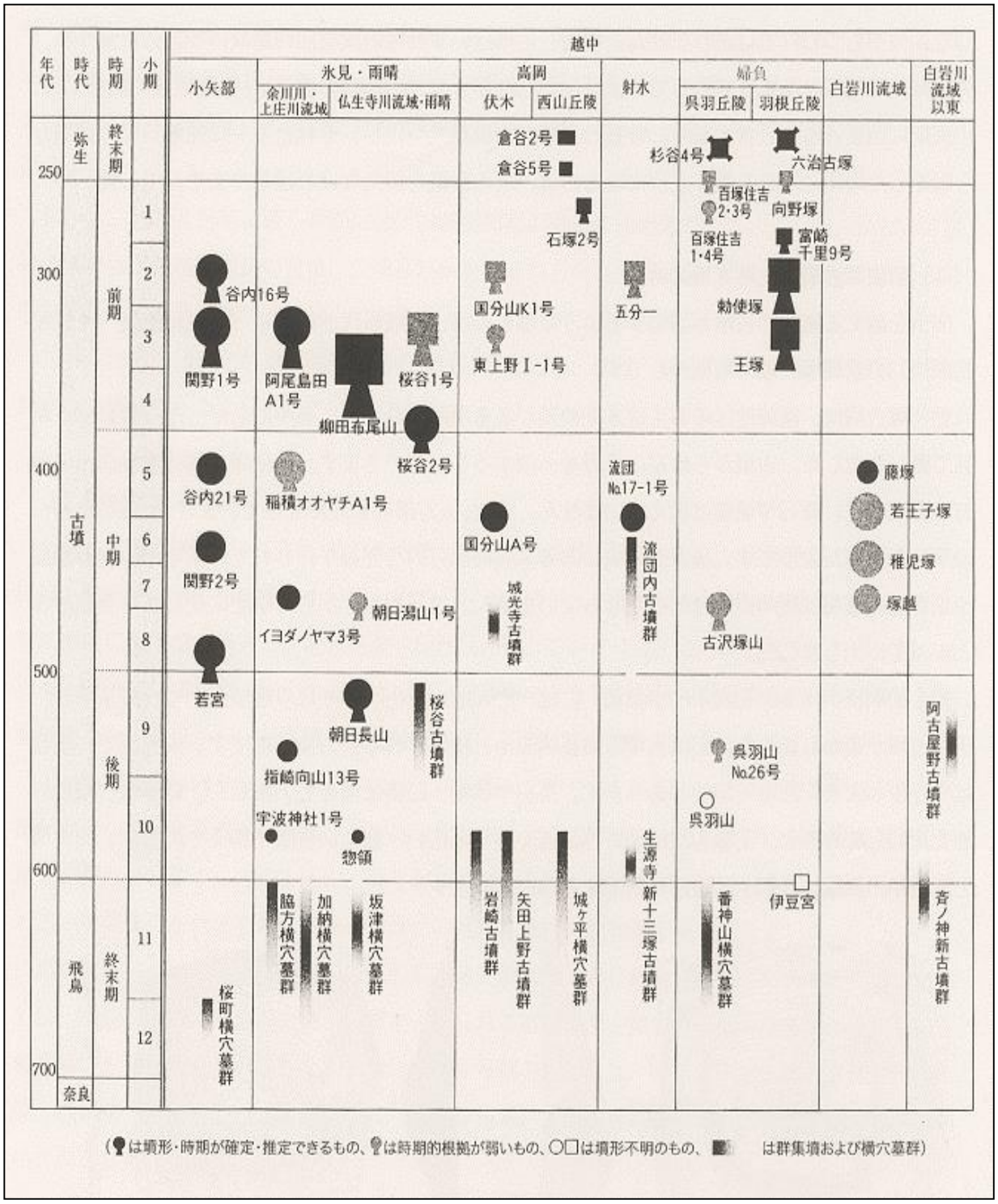
一直線に並ぶ饅頭型の五ッ塚

「勅使塚」より南 200mの山中に、ひっそり饅頭型をした塚が５基、南北に列して並んでいる。

この塚は、５世紀のころに勅使に随伴していた京人５人を葬った塚と伝承されているが、今から約 600 年前、14 世紀の建武年間、各願寺（北叡山と号す）が北陸に勢力を伸ばしてきた比叡山と勢力争いを起こしていた頃、時の帝が両者を諫めるため度々勅使を遣わされた。しかし争いが収まらず、やがて一帯が焦土と化す事態となった。

その時の争いに巻き込まれた勅使の塚とも言われている。

(24) 富山県内の古墳分布と形態及び年代



古墳年表図　（富山県埋蔵文化財センター資料より）

呉羽丘陵には貝塚や住居跡、そして古墳など多くの遺跡が分布している。なかでも古墳は位置や形態が特定しやすく調査が進んでいる。

呉羽丘陵周辺地域では、北から百塚遺跡周辺部、金屋の古墳群、杉谷の古墳群、そして婦中町の長沢から千里にかけての古墳群があり、その年表は掲載とおりである。

a) 旧石器時代（約３万年前～１万２千年前）

大型動物を追って人は、居住地を移動しており墳墓と云う形のものがない。

呉羽丘陵周辺では境野新遺跡や向野池遺跡から当時使われていた削器（削石）が出土している。

b）縄文時代草創期（約１万２千年前）

縄文土器に代表されるように人は、茹(ゆ)でる、煮るなどの調理方法と弓矢を発見した。呉羽丘陵周辺では杉谷遺跡から石の尖頭器が発見されている。

ｃ）縄文時代中期（約 4500 年前）

土器の発見から人は定住し始めた。呉羽丘陵周辺では竪穴住居跡が北代遺跡（縄文広場）、杉谷遺跡などで複数発見されており集落として機能し始めている。

ｄ）弥生時代終末期（約 1800 年前）

集落で生活するようになった人は、階級的に進化し墓も集団化していく。北陸では方形周溝墓、方形台状墓や墳丘墓が一般的な形態で呉羽丘陵でも、杉谷古墳群から方形と円形周溝墓が数多く発見された。

ただし４号墳では出雲周辺に起源を持つ四隅突出型の古墳が確認され、また出土品（杉谷 A 遺跡）から副葬品のガラス小玉、鉄刀（素環頭太刀）鉄鏃、土器からなどが発見され首長級とみられている。支配や統合が進み遠く離れた北九州、出雲方面からもたらされたものと考えられている。

四隅突出型の古墳は、婦中町の富崎古墳群（１～３号）、六治古塚墳墓、鏡坂墳墓群（１，２号）で６基確認されており、集落単位で生活する地域集団が誕生していたとみられる。

e)古墳時代、前、中期（約 1600 年前）

国の支配勢力が出雲から大和（畿内勢力）へシフトしたことにより古墳の形態も前方後円墳などへ変化していった。呉羽丘陵では、百塚遺跡（約 24m）から初期の前方後円墳が確認されている。

これ以降、勢力の集中化が進み古墳も大型化していった。婦中町の勅使塚（約 66m）、王塚古墳（約 58m）、そして古沢の古沢塚山（約 41m）など大型の前方後円墳が確認されている。

ｆ）古墳時代後期（約 1500 年前）

畿内勢力の集中化が進み、地方でも支配が河川の流域単位から他の流域まで広域化して行った。呉羽丘陵周辺でも、古沢の古沢塚山古墳、呉羽山 26 号墳を最後にして前方後円墳が途絶えている。そして次の時代の墓が山の斜面に横穴を掘る横穴墓として金屋の陣の穴と呉羽山の番神山で発見されている。出土品も、須恵器の杯・高杯、鉄製の刀子などが出ている。

(25) 古墳が語る呉羽丘陵周辺地域（婦負のクニの誕生と終焉）

呉羽丘陵周辺地域で特筆すべき事は、弥生時代終末期の四隅突出型の古墳が７基確認されている事である。この四隅突出型の古墳は、弥生時代中期に山陰及び中国地方の山間地で発生した。
地方では、大きな影響を持つ山陰とのつながりを誇示する事が力の強さを示すこととなるので、四隅突出型古墳が日本海沿岸に広まった。

四隅突出型古墳は、北近畿の沿岸部にはなく北陸で越前に８基、加賀で１基、越中で７基（全部が呉羽丘陵周辺にある）とされ、出土した副葬品も含め日本海を北上した文化である事が確認されている。

杉谷４号墳や富崎１～３号墳など呉羽丘陵周辺地域に限らている事は、弥生時代の末期に何代かにわたって強い力を持つ集団がこの地域に存在してた事が考えられ、この呉羽丘陵周辺地域こそ「婦負のクニ」の存在と思われる。

やがて古墳時代に入り「婦負のクニ」では古墳時代前期の前方後円墳が百塚遺跡で確認されている。これは、出雲の力よりしだいに畿内勢力の影響を受けるようになり古墳も前方後円墳へと移行した事が考えられる。また大型化した前方後方墳も婦中の勅使塚（約 66m）、王塚古墳（約 58m）で確認されており勢力が拡大した事もうかがえられる。しかし古墳時代中後期に入って古沢塚山古墳（約 41m）、呉羽山 26 号古墳、呉羽山 16 号古墳（31m）の前方後円墳で発生が途絶えている。この時期が「婦負のクニ」の終焉なのかもしれない。

県内では、婦中の勅使塚、王塚古墳と同年代の大型古墳が小矢部の谷内 16 号墳（約 50m）、氷見の阿尾島古墳（約 70m）で発見されている。

さらに大きい柳田布尾山古墳（107.5m）が確認されており県内で勢力の集中化が進んで行ったものと考えられる。

（資料提供者及び取材協力者と参考文献）

・富山県立図書館
・富山県埋蔵文化財センター
・富山市埋蔵文化財センター
・富山市郷土博物館
・旧北陸街道（富山往還）の概要について
「保科齊彦氏調べ」
・大徳寺について　「須山盛彰氏調べ」
・願念寺について　「舟竹　孝氏調べ」
・富山稲荷神社、豊栄稲荷神社について
「五十嵐顕房氏調べ」
・佐伯有頼少年像について　「正橋剛二氏調べ」
・中堂寺、各願寺、自得寺について
「武内淑子氏調べ」
・『杉谷４号墳と四隅突出墳』2009 年 3 月発行
（古沢校下ふるさとづくり推進協議会）
・『倉垣庄とは、そして下村加茂神社は倉垣庄の総社か』　平成 9 年 7 月発行
古岡英明著
・『老田郷土史』　平成 17 年 7 月発行
（老田地区自治振興会）
・『五福郷土史』　平成 3 年 4 月発行
（五福地区自治振興会）
・『呉羽の里』　昭和 58 年 6 月発行
（呉羽地区自治振興会）
・『寒江のれきし』　昭和 34 年 5 月発行
高瀬保著
・『金草　速星神社』　平成 26 年 10 月発行
山口悦子著
・『旧北陸街道を歩く』　平成 21 年 9 月発行
（呉羽山観光協会）

『旧北陸街道を歩く』で紹介した調査者を始め資料提供者、協力者並びに参考とした文献については、省略いたします。

編集後記

「旧北陸街道を歩く」実行委員会では、平成 19 年 12 月の発足いらい、歴史探訪歩行会を７回開催してまいりました。

参加された方々は、地元呉羽、五福、桜谷はもとより県内の小矢部、氷見、南砺、黒部など各地からのべ約 2200 名余りであります。

この歩行会を実施するにあたり、旧北陸街道の歴史や文化など、見どころを紹介するため郷土史家の先生方から情報提供や調査をして頂き、その内容を冊子にまとめ、『旧北陸街道を歩く』「呉羽丘陵を越えて・富山船橋～峠茶屋～追分茶屋～願海寺～手崎」を平成 21 年９月に発行したところであります。

その後、歩行会で呉羽丘陵を南北縦断として、八ヶ山～城山～古沢～長沢までの歴史的な名所旧跡、由来、伝説なども整理してまいりました。

そしてこれら内容を歩行会開催のたびにＰＲ広報紙として作成し、五福、桜谷、呉羽の各家庭に 9 回にわたり約 15.6 万部を配布してまいりました。

このことにより地元の歴史について興味を持たれ参加者も年々増加傾向にあり大変うれしく思っているところであります。今後、歴史探訪歩行会を継続的に実施するためには、今まで得た情報を整理、管理していくことが必要と思っています。

この事から、平成 21 年９月『旧北陸街道を歩く』冊子に引き続き、新たに『呉羽丘陵とその周辺　ぶらりみどころ』を発行する事としたところであります。

今回の内容は、既存の刊行物やホームページ、さらに現地の説明案内を参考にしてまとめたものでありますが、桜谷、五福、呉羽、婦中に至る広範囲なもので、呉羽丘陵が持つ歴史的な魅力が、その周辺部にも及んでいる事を地域の皆様にも分かって頂けるものと思っております。

事務局としては、限られた能力と時間でありましたが、郷土史家の先生方や関係者から適切な助言やアドバイスを頂きまとめることが出来ました。

ここに改めてお礼を申し上げますと共に、この見どころが更なる歩行会の発展につながればと念じております。

（実行委員会事務局、山口五十一

「呉羽丘陵とその周辺」ぶらりみどころ

発　行　　平成 27 年 3 月 31 日

編　集　　「旧北陸街道を歩く」実行委員会

発行者　　呉羽山観光協会

富山市呉羽町 7538 番地

富山観光ホテル内

電話０７６（４３１）５５５１

印　刷　　とうざわ印刷工芸株式会社

H30/09　一部修正

27 ページ　左 14 行目　大間知正助　⇒　大間知荘平

56 ページ　大正天皇御制「登呉羽山」漢詩の一部

大正天皇御製「登呉羽山」

雨後風無秋氣溫　呉羽峻阪留履痕
維昔秀吉進征旆　敵將力窮降軍門
吾來此地見形勢　中越全景眼中存
立岳衡空向東聳　神通水漲指北奔
兵營一路連城市　海灣直接穮秳原
眺望如此難多得　眞是北國好公園

呉羽丘陵とその周辺
ぶらりみどころ